



Title	GLOCOL 年報 2015
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54714
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

年 報
2015

大阪大学グローバルコラボレーションセンター

GLOBAL COLLABORATION CENTER

OSAKA UNIVERSITY

目 次

	page
はじめに	i
I. 組織の概要	1
1. 沿革	1
1) 設置の目的	1
2) 設置と発展	1
2. 運営体制	1
1) 運営組織	1
2) スタッフ	3
3) オフィス	4
3. 学内の協力体制	4
1) 兼任教員設置の目的	4
2) 兼任教員一覧	4
4. 学外との連携体制	6
5. 運営経費	6
II. 教育活動	8
1. 海外体験型教育企画オフィス (FIELD O)	8
1) 沿革	8
2) 体制	9
3) 活動	9
2. 海外フィールドスタディ・プログラム一覧	23
3. GLOCOL 提供大学院等高度副プログラム	26
1) 「グローバル共生」	28
2) 「人間の安全保障と開発」	29
3) 「司法通訳翻訳」	30
4) 「現代中国研究」	30
5) 「グローバル健康環境」	31
6) 「国連政策エキスパートの養成」	31
7) 「東アジアの地域環境」	31
4. グローバルコラボレーション科目と高度教養プログラム「知のジムナスティックス」	32
III. 研究活動	38
1. 地球規模課題対応国際科学技術協力事業 (SATREPS)	38
2. 科学研究費補助金	43
3. その他外部資金	45
4. 国際研究交流	46
1) 学術交流協定の推進	46
2) 海外からの招へい研究員	46
5. GLOCOL FD セミナー・GLOCOL 連続セミナー	47
6. スタッフの研究活動 (個人研究)	52

IV. 実践支援活動	74
1. JICA 連携事業	74
2. 学生支援活動	75
V. 学内連携事業	76
1. 未来戦略機構との連携	76
1) 超域イノベーション博士課程プログラム	76
2) 未来共生イノベーター博士課程プログラム	76
2. 全学教育推進機構との連携	76
3. 兼任教員会議	77
4. フィールドスタディに関する学内連携	77
5. セミナー	78
VI. 学外連携事業	84
1. 社会学連携	84
2. 他機関との連携	85
3. 学会役員、民間団体役員など	86
4. セミナー・イベントなど	87
VII. 出版、情報発信	93
VIII. 資料	95
1. セミナー、シンポジウム等開催一覧	95
2. 海外出張一覧	100
3. 活動記録	103

はじめに

グローバルコラボレーションセンター・センター長
平田收正

2007年4月1日付で設置された大阪大学グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）は2016年3月末で丸9年を迎え、文部科学省特別経費（旧特別教育研究経費）「国際協力・共生社会のための実践的教育改革事業」による支援期間である9年間の全期間が終了いたします。

GLOCOLの組織と活動の大部分は、上述の特別教育研究経費によって運営されて参りました。文部科学省の定義において、特別教育研究経費は、「新たな教育研究ニーズに対応し、各国立大学等の個性に応じた意欲的な取組みを重点的に支援するため」に措置されるものです。GLOCOLに対する支援分は「大学教育の改革を推進するための各国立大学法人の積極的な取組みを支援（地域医療・先進医療、食の安全・安心、特別支援教育、国際協力など）」することを目的としたものであり、初年度は、年度途中に統合が予定されていた大阪大学と大阪外国語大学の両方を支援対象としたもので、統合に先立って大阪大学に設置されました。

2015年度はGLOCOLが特別経費による支援を受ける最後の年となります。GLOCOLの重要なミッションであった「国際協力やグローバルな問題に個別に取り組む大阪大学の部局や組織を、文系・理系にかかわらず広く有効に連携させ、文理協働の研究（教育）を行う」については、十分な活動が行われてきたことが間違いありませんが、今年度はこれに加え、組織、事業、人員を以下に継承し、発展させるかという最後の重要な課題があります。

GLOCOLの培ってきた資産が、今後大阪大学、そして、日本の大学のグローバル化に有効に引き継がれることを願ってやみません。

以下は、2015年度の主な活動を要約させていただきます。

教育活動

2010年8月に設置された海外体験型教育企画オフィス（FIELDO）は海外体験型教育プログラム関連科目の整備と学生への提供をおこなってきました。今年度はモンゴル「環境と地域保全」、インドネシア「コミュニティ防災 ― 命を守るためのつながりを学ぶ」、バングラデシュ「開発途上国の生活環境の改善に貢献するモノづくりを提案する」、オランダ「国際司法・平和の現場を知る」、タイ「生物資源と環境」といった計5本の海外フィールドスタディを実施し、4学部4研究科から39名が参加しました。これらの実施プログラムでは、GLOCOL、JASSO海外留学支援制度や未来基金からの予算や助成プログラムを活用しています。また、事前学習を目的とした「海外インターンシップⅠ」と実習および事後学習を目的とした「海外インターンシップⅡ」を開講し、国際機関や国際NGO、研究所などの国際的な活動を行う組織における学生のインターンシップ経験を支援しました。さらに、GLOCOL運営経費を用いて海外インターンシップ助成を行い、派遣期間が1ヶ月以上の海外インターンシップでは、ドイツ、ポーランド、ツバル、フランス、イタリア、シンガポールに計7人を、派遣期間が1ヶ月未満の海外ブレ・インターンシップではインドネシア、ミャンマー/バングラデシュ、ボリビア、イタリア、イギリス、ケニア、ネパール、アメリカに計9人を派遣しました。このように、多くの学生たちを海外へ派遣・引率するにあたっての、実施体制やリスク管理体制の整備にも取り組み、その成果は昨年度に刊行したブックレットや、学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究（科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究 代表者：大橋一友教授）やセミナーをとおして、学内外にも発信しています。

大阪大学の全学的な取り組みである大学院等高度副プログラムは今年度も7プログラム実施しており、これまでにGLOCOLのプログラムを受講申請した学生は、720人を超え、修了した学生数は約230人となっています。これら学生の所属先も多様であり、科目の配置だけでなく、学生の構成の面でも分野を横断した教育が実現されました。

またGLOCOLでは、大阪大学の教育目標の一つである「国際性」を強化するためのグローバルコラボレーション科目を全学の学部生や大学院生に提供しています。これらの科目は全学教育推進機構と連携をとりながら、GLOCOL科目の一部を「知のジumnasティックス」として提供しました。一部の授業を一般公開したセミナーもありました。

大阪大学では、未来戦略機構と全学教育推進機構を中心として教育に関する改革が進んでいます。GLOCOLのミッションの一つはグローバル教育を全学的に提供していくことです。これまでもこれらの機構の活動には多くのGLOCOL教員が参画してまいりました。今年度は未来戦略機構の第一部門である「超域イノベーション博士課程プログラム」に2名、第5部門である「未来共生イノベーター博士課程プログラム」に2名のGLOCOL教員がプログラム委員会に参加し、授業を担当しました。

研究活動

GLOCOL は「国際協力と共生社会に関する研究をさまざまな学問分野で推進し、国際性を備えた人材養成のための教育を開発すること」を目的としています。GLOCOL が行う教育の基盤は各教員の研究成果であり、GLOCOL はその設立以来、教員の研究推進に努めてまいりました。学内の部局、研究科や学外の民間機関、国際機関、NGO などと協働して研究やセミナー開催などを活発におこなってきました。各教員は科学研究費やその他の外部資金に積極的に応募し、研究資金を獲得しています。

今年度で GLOCOL が設置されてから 9 年目にあたり、今までどのようにグローバル化に向き合って成果を生み出して来たのかを、4 回にわたって GLOCOL 連続セミナー「大学とグローバル化：大阪大学 GLOCOL の 9 年間の経験から」を実施し、今までの成果や教訓から今後に向けた課題を共有し、多くの方々にご参加いただきました。このセミナーをまとめて GLOCOL ブックレット 18 を刊行いたしました。

日本医療研究開発機構 (AMED) と独立行政法人国際協力機構 (JICA) が共同で実施している SATREPS (Science and Technology Research Partnership for Sustainable Development) は 2011 年に採択され、ベトナムとの間で 2012 年度から 2016 年までの予定で「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」の研究を実施しています。今年度も引き続きベトナムの 5 か所の研究拠点と日本側とで調査研究が実施され、来年 2016 年度の終了へ向けて、最終段階の実施と成果を取りまとめるステージに入ってきています。

実践支援・連携活動

阪大生の JICA 関西での夏期インターンシップ派遣など、大学における社会連携活動を行いました。また個々のプロジェクトでは、「地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ」「ハロハロスクエア」(外国人児童生徒の学習支援に関する吹田市国際交流協会との共同事業) が、有償無償を問わず学部生、大学院生のキャリア形成に資する目的でおこなわれています。

学内における連携については、博士課程教育リーディングプログラムの開発に参加し、委員もつとめています。海外フィールドスタディのプログラム実施にあたっては、工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻との協働、国際公共政策研究科教員のプログラムへの参画など、これまでの連携を継続してさらに深めることができました。

学内の他部局や他の機関などと協力して、セミナーやシンポジウム、ワークショップも多数開催しました。

また、JST の日本・アジア青少年サイエンス交流事業さくらサイエンスプランに 2 件が採択され、5 月にはタイ・バンコクのトリウムウドム・スクサ高校から、生徒 9 名、教員 1 名を招へいしてバイオテクノロジーに関する日本の高度な技術や応用について研修を実施しました。また、7 月にはベトナムのレホンフォン英才高校とハノイ国家大学附属科学技術高校から生徒 8 名、教員 2 名を招へいし、「食と水の健康環境」に関する日本の高度な技術や応用について研修を実施しました。

I. 組織の概要

1. 沿革

1) 設置の目的

グローバル化のなかで現代世界は、政治構造、経済格差、社会生活などあらゆる面で目まぐるしく変化している。貧困、環境、教育、感染症などの課題が地球規模で山積する一方、日本国内では「足もとの国際化」が急速に進んでいる。このような状況のなか、グローバル化した世界の現実について深く理解し、国際性をもって意思疎通し、課題に取り組むことができる有用な人材を養成することが求められている。大阪大学グローバルコラボレーションセンター（以下 GLOCOL という）は、こうした要請に応えるため、国際協力と共生社会に関する研究をさまざまな学問分野で推進し、国際性を備えた人材養成のための教育を開発することを目的としている。

具体的には、次の目標を掲げている。

1. 大阪大学の教育目標である「教養・デザイン力・国際性」のうち、「国際性」を強化し、国際社会に貢献する。
2. 国際協力やグローバルな問題に個別に取り組む大阪大学の部局や組織を、文系・理系にかかわらず広く有効に連携させ、文理融合の研究を行う。
3. 学内外との連携、国内外の連携を重視し、国際機関、政府開発援助（ODA）機関、大学研究機関、NPO、NGO などとの幅広い関係を築くとともに、官学連携、産学連携、社学連携に取り組む。

2) 設置と発展

GLOCOL は、2007 年 10 月に実現した大阪大学と大阪外国語大学の統合に先立ち、両大学の研究教育資源を有効に活かしながら上記の目的を達成することをめざし、2007 年 4 月 1 日に設立された。設立年の 2007 年度には、組織的な基盤を固めつつ、学内外との連携の構築に努めた。当初はセンター長 1 名、特任教員 4 名、事務職員 4 名の小人数で中之島センターを本拠地として出発した。2007 年 9 月には、センター長室と事務局を吹田キャンパスのウエストフロント棟に移転し、大阪外国語大学との統合後新たに設けられた本部事務機構国際部国際連携課国際連携係が、GLOCOL の事務を担当するようになった。なお、現在は、本部事務機構総務企画部国際交流課国際連携係が担当している。GLOCOL は、その後人員を補充し、2015 年度末時点で、センター長 1 名、専任教員 3 名、特任教員 8 名、特任研究員 1 名が、50 名の兼任教員の協力を仰ぎつつ、事業推進にあたっている。

2. 運営体制

1) 運営組織

① グローバルコラボレーションセンター運営協議会

GLOCOL は、大阪大学全体の教育・研究・実践における国際性の強化をめざしている。このためグローバルコラボレーションセンター運営協議会（以下「運営協議会」という）は、国際交流担当理事を議長とし、センター長および大阪大学の全研究科長により構成されている。国際協力と共生社会に関する研究を推進し、研究成果にもとづく社会活動を実践し、それらの分野での人材養成を行うために、大阪大学として GLOCOL をどう活用するかなど、GLOCOL の管理運営に関する基本方針を審議している。今年度は 2016 年 3 月 16 日（第 15 回）に開催した。

2015 年度運営協議会委員

国際・広報戦略、社学連携担当理事・副学長 岡村康行（2015 年 8 月まで）

グローバル連携担当理事・副学長

星野俊也（2015 年 8 月から）

センター長	平田収正
文学研究科長	和田章男
人間科学研究科長	中道正之
法学研究科長	竹中 浩
経済学研究科長	大西匡光 (2015 年 8 月まで)
経済学研究科長	堂目卓生 (2015 年 8 月から)
理学研究科長	篠原 厚 (2015 年 8 月まで)
理学研究科長	常深 博 (2015 年 8 月から)
医学系研究科長	澤 芳樹
歯学研究科長	天野敦雄
薬学研究科長	堤 康央
工学研究科長	掛下知行 (2015 年 8 月まで)
工学研究科長	田中敏宏 (2015 年 8 月から)
基礎工学研究科長	河原源太
言語文化研究科長	木村茂雄
国際公共政策研究科長	村上正直
情報科学研究科長	井上克郎 (2015 年 8 月まで)
情報科学研究科長	尾上孝雄 (2015 年 8 月から)
生命機能研究科長	仲野 徹
高等司法研究科長	三阪佳弘
連合小児発達学研究科長	片山泰一

② グローバルコラボレーションセンター会議

運営協議会が決定した方針にならない、部局の意思決定を行い、センターの円滑な運営を図るためにグローバルコラボレーションセンター会議（以下「センター会議」という）が設置されている。センター会議は、センター長、副センター長、センターの教授、准教授、講師およびセンター会議が必要と認めた者などで構成される。センター会議では、センターの業務に関する重要事項、教員人事、予算に関する決定を行っている。

2015 年度センター会議委員

センター長・教授	平田収正
副センター長・教授	宮原 暁
副センター長 (2015 年 12 月から)・准教授	住村欣範
センター講師	島藺洋介
センター特任准教授	思沁夫
センター特任准教授	本庄かおり
センター特任准教授	敦賀和外
センター特任准教授	常田夕美子
センター特任准教授	吉富志津代
微生物病研究所教授	堀井俊宏
工学研究科教授	長谷川和彦
文学研究科教授	片山 剛
オブザーバー (グローバル連携担当理事・副学長)	星野俊也 (2015 年 8 月から)
オブザーバー (教育担当理事・副学長)	東島 清 (2015 年 8 月まで)
オブザーバー (教育担当理事・副学長)	小林傳司 (2015 年 8 月から)
オブザーバー (国際・広報戦略、社会学連携担当理事・副学長)	(2015 年 8 月まで)
・基礎工学研究科教授	岡村康行
オブザーバー (人間科学研究科教授)	栗本英世
オブザーバー (未来戦略機構特任教授)	小泉潤二
オブザーバー (医学系研究科教授)	大橋一友

③ スタッフ会議

業務の実務を調整し、実施のための協議を行う場として、定期的にスタッフ会議を開催している。スタッフ会議のメンバーは、GLOCOLの教員、研究員および事務職員から構成される。

④ 事務部

総務企画部国際交流課国際連携係がGLOCOLの事務を管轄している。係長、主任、事務職員、特任事務職員3名、事務補佐員2名が勤務し、業務管理、庶務、教務関連、セミナー・シンポジウム開催、ホームページ作成、海外体験型教育企画オフィス運営補助などにあたっている（2016年3月31日現在）。

2) スタッフ

GLOCOLは、センター長のほか、准教授、特任教員、特任研究員、招へい教員・研究員、そして各部局からの兼任教員によって構成されている。この組織を大阪大学総務企画部国際交流課国際連携係 事務職員、特任事務職員、事務補佐員が支えている（2016年3月31日現在）。

センター長・教授	平田收正
副センター長・教授	宮原 暁（研究推進部門・グローバル共生グループ）
副センター長・准教授	住村欣範（教育開発部門・国際協力グループ）（副センター長：2015年12月より）
講師	島藺洋介（研究推進部門・グローバル共生グループ）
特任准教授	思沁夫（研究推進部門・国際協力グループ）
特任准教授	敦賀和外（海外体験型教育企画オフィス）
特任准教授	常田夕美子（教育開発部門・グローバル共生グループ）
特任准教授	本庄かおり（海外体験型教育企画オフィス）
特任准教授	吉富志津代（実践支援部門・グローバル共生グループ）
特任助教	安藤由香里（海外体験型教育企画オフィス）
特任助教	大野光明（研究推進部門・国際協力グループ）
特任助教	小峯茂嗣（教育開発部門・国際協力グループ）
特任研究員	福田州平（教育開発部門・グローバル共生グループ）
招へい教授	小泉潤二（未来戦略機構特任教授）
招へい教授	宮本和久
招へい教授	山本容正（地球規模課題対応国際科学技術協力事業「薬剤耐性細菌発生機構解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」）
招へい教授	水越達也（日本化学工業協会会長）
招へい教授	星野和実
招へい研究員	上田宗平（地球規模課題対応国際科学技術協力事業「薬剤耐性細菌発生機構解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」）
招へい研究員	姉崎正治
招へい研究員	中山達哉（大阪府立大学生命環境科学研究科特任助教）
招へい研究員	起橋雅浩（大阪府立公衆衛生研究所主任研究員）
招へい研究員	山田真弓
招へい研究員	原 めぐみ
招へい研究員	矢元貴美
招へい研究員	JIMENEZ, Joselito Ranara
国際交流課	満尾俊一課長、佐藤正子課長補佐
国際連携係	深井 明係長（2015年9月まで）、植林玉樹係長、中 美緒主任、鄭 丞牟事務職員
特任事務職員	宮地薫子、片山 歩、畑中英理子
非常勤事務職員	青木 愛、大前 舞

3) オフィス

GLOCOL は現在、吹田、豊中、箕面の3つのキャンパスにオフィスを構え、相互の緊密な連絡によって業務を遂行している。吹田キャンパス内ウエストフロント棟には、センター長室および事務機能を担う本部オフィスが置かれている。センター長室では、少人数での授業やミーティングができるようになっている。特任教員の研究スペースと GLOCOL 本体の事務機能の一部が、豊中キャンパスの全学教育推進機構 全学教育総合棟 I の3階フロアにある。同フロアには FIELDO および学生用自主学習スペース STUDIO が設置されている。箕面キャンパスには、学生指導用のスペースがおかれている。



センター本部



豊中オフィス (STUDIO)

3. 学内の協力体制

1) 兼任教員設置の目的

GLOCOL には、グローバルな協力と協働という広いテーマに個別に取り組む部局や組織を、文系・理系にかかわらず有効に連携させるシステムをつくり、新しい教育、研究、実践をする場として機能することが求められている。そのため各部局の教員に兼任教員を依頼し、今年度は、学内から 50 名の教員が GLOCOL を兼任した。2016 年 2 月 16 日には兼任教員会議を開催し、GLOCOL の 9 年間における活動報告とディスカッションを行った（詳細は p.77）。

薬学研究科	人間科学研究科	未来戦略機構	国際教育交流センター
微生物病研究所			コミュニケーションデザインセンター
文学研究科			日本語日本文化教育センター
工学研究科			レーザーエネルギー学研究所
法学研究科	生物工学国際交流センター		産業科学研究科
経済学研究科	国際公共政策研究科	総合学術博物館	言語文化研究科
医学系研究科	情報科学研究科	産学連携本部	基礎工学研究科

2) 兼任教員一覧

石川真由美	未来戦略機構教授
三田 貴	未来戦略機構特任准教授
石井正彦	文学研究科 文化表現論専攻日本語学講座教授
竹中 亨	文学研究科 文化形態論専攻世界史講座教授
片山 剛	文学研究科 文化形態論専攻世界史講座教授
栗本英世	人間科学研究科 人間科学専攻基礎人間科学講座教授
中川 敏	人間科学研究科 人間科学専攻基礎人間科学講座教授
森田敦郎	人間科学研究科 人間科学専攻基礎人間科学講座准教授
平沢安政	人間科学研究科 人間科学専攻教育環境学講座教授
中村安秀	人間科学研究科 グローバル人間学専攻人間開発学講座教授
千葉 泉	人間科学研究科 グローバル人間学専攻人間開発学講座教授
澤村信英	人間科学研究科 グローバル人間学専攻人間開発学講座教授

河森正人	人間科学研究科	グローバル人間学専攻地域研究講座教授
岡田千あき	人間科学研究科	グローバル人間学専攻人間開発学講座准教授
山本ベバリー・アン	人間科学研究科	人間科学専攻先端人間科学講座教授
北村 亘	法学研究科	附属法政実務連携センター教授
深尾葉子	経済学研究科	経営学系専攻経営情報講座准教授
磯 博康	医学系研究科	予防環境医学専攻社会環境医学講座公衆衛生学教授
祖父江友孝	医学系研究科	医学専攻社会医学講座環境医学教授
大橋一友	医学系研究科	保健学専攻統合保健看護科学分野生命育成看護科学講座教授
牧本清子	医学系研究科	保健学専攻統合保健看護科学分野看護実践開発科学講座教授
宇野公之	薬学研究科	分子薬科学専攻生命分子化学講座教授
原田和生	薬学研究科	附属実践薬学教育研究センター実践教育部講師
池 道彦	工学研究科	環境・エネルギー工学専攻環境資材・材料学講座教授
福井希一	工学研究科	生命先端工学専攻生物工学講座教授
關 光	工学研究科	生命先端工学専攻生物工学講座准教授
長谷川和彦	工学研究科	地球総合工学専攻船舶工学講座教授
西田修三	工学研究科	地球総合工学専攻社会システム学講座教授
尾方成信	基礎工学研究科	機能創成専攻機能デザイン領域制御生産情報講座教授
真島和志	基礎工学研究科	物質創成専攻機能物質化学領域合成化学講座教授
三宅 淳	基礎工学研究科	機能創成専攻生体工学領域生物工学講座教授
ジェリー・ヨコタ	言語文化研究科	現代超域文化論講座教授
大村敬一	言語文化研究科	言語文化専攻現代超域文化論講座准教授
近藤久美子	言語文化研究科	言語社会専攻アジア・アフリカ講座教授
竹内俊隆	国際公共政策研究科	国際公共政策専攻システム統合講座教授
山内直人	国際公共政策研究科	比較公共政策専攻現代日本法経システム講座教授
松野明久	国際公共政策研究科	比較公共政策専攻比較公共政策講座教授
蓮生郁代	国際公共政策研究科	国際公共政策専攻国際公益システム講座教授
尾上孝雄	情報科学研究科	情報システム工学専攻情報システム構成学講座教授
堀井俊宏	微生物病研究所	附属難治感染症対策研究センター分子原虫学分野教授
有末伸子	微生物病研究所	附属難治感染症対策研究センター分子原虫学分野助教
東岸任弘	微生物病研究所	附属難治感染症対策研究センター分子原虫学分野助教
西村謙一	国際教育交流センター	日本語教育研究チーム准教授
仁平卓也	生物工学国際交流センター	長・教授
藤山和仁	生物工学国際交流センター	教授
高橋京子	総合学術博物館	教育・研究部資料基礎研究系准教授
兼松泰男	産学連携本部	イノベーション部教授
池田光穂	コミュニケーションデザイン・センター	長・臨床&フィールドコミュニケーションデザイン部門教授
林田雅至	コミュニケーションデザイン・センター	安全コミュニケーションデザイン部門教授
岩井茂樹	日本語日本文化教育センター	准教授

4. 学外との連携体制

GLOCOL は大阪大学内の連携のハブとなるばかりでなく、国内外の大学、研究機関、国際機関、官公庁・自治体、市民社会などとの幅広いネットワークを構築している。2015 年度は GLOCOL セミナーなどに、他大学や民間機関、大阪府警、外務省、国際機関、NPO などから多数の講師を迎えた。また、海外フィールドスタディ 5 件が教育機関や NGO、海外拠点などの協力の下に実施され、4 学部 4 研究科の 39 名が参加した。海外インターンシップでは、海外インターンシップ助成プログラムのもと、国際機関、研究機関、NGO などへ 16 名を派遣した。活動 4 年目を迎える SATREPS では、ベトナムの 5 つの研究拠点での本格的な調査をすすめている。海外学術交流協定は今年度も 8 件が継続されており、国内では引き続き 2 機関と協力についての文書を取り交わしている。

地域研究コンソーシアムを通じ国内研究機関との連携のもとセミナーや活動、足もとの国際化セミナー、市民団体との連携など学外機関との連携も順調に推進した。（詳細は pp.84-92）



5. 運営経費

GLOCOL はプロジェクトの開始から 9 年目の最終年度を迎えた 2015 年度運営費交付金特別経費の査定額が要求額の約 16% 減となり、継承すべき事業を考慮しつつ、予算計画の策定を行った。その際、グローバル人材の育成に向け、教育事業の維持を最優先課題に掲げると同時に管理費の削減努力を行い、学内予算や外部資金への申請を積極的に行った。

管理費等の削減として、2014 年度同様に教務関係の非常勤講師及びゲスト・スピーカーの可能な限り学内教員への切り替えが挙げられる。

また、プロジェクトの集大成として、GLOCOL の 9 年間の経験をテーマに各グループが GLOCOL セミナーを実施し、その成果をまとめたブックレットを 1 種出版した。

教育活動については、大学院等高度副プログラムは 2014 年度と同様の 7 プログラム、グローバルコラボレーション科目は 50 科目が大学院等高度副プログラムおよび高度教養プログラムに提供、実施された。

海外体験型教育プログラムについては、海外インターンシップ助成では昨年とほぼ同数の 16 名の学生を派遣、海外フィールドスタディは昨年と比較すると規模が縮小となったが、計 5 本を実施し、39 名の学生を派遣した。

研究活動としては、SATREPS（地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム）が順調に進捗しているほか、文部科研 11 件、受託研究／事業（SATREPS、さくらサイエンス）の実施、奨学寄附金を受入れた。

以上の財源の収入内訳を示したのが図 1 である。

図1：財源収入内訳
(合計：155,467 千円)

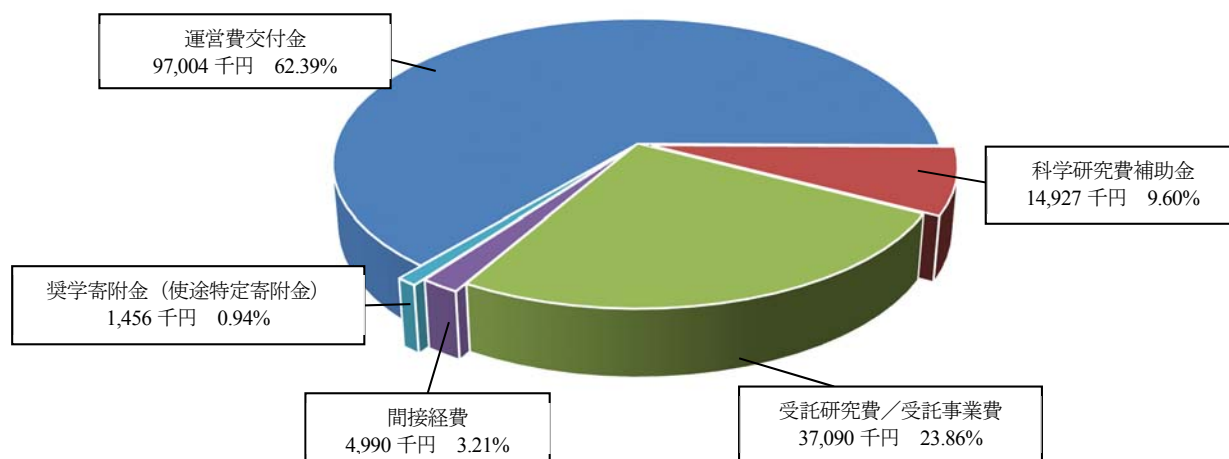
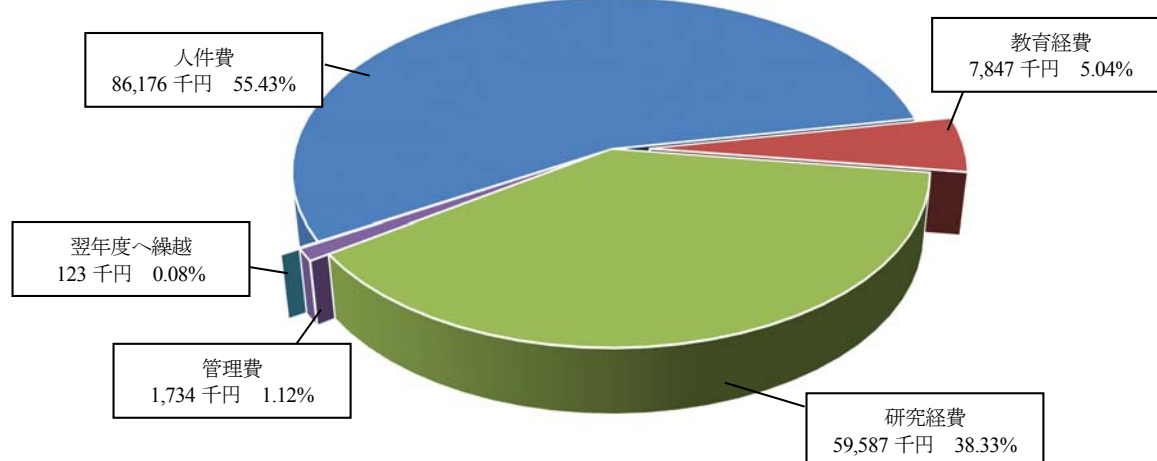


図2：経費別支出額 (年度途中のため、暫定金額)
(合計：155,467 千円)



II. 教育活動

1. 海外体験型教育企画オフィス（FIELDO）

1) 沿革

GLOCOL では、海外での実地体験型学習と実践をサポートすることを目的とする「海外体験型教育企画オフィス」（FIELDO : Fieldwork, Internship and Experiential Learning Design Office）を 2010 年 8 月 1 日に設置し、運営している。

オフィスの目的は、大阪大学全学の学部学生、大学院生を対象とした海外インターンシップや海外フィールドスタディなどを、学内のさまざまな部局と協力しつつ企画し、グローバル人材、国際協力と開発の分野で活躍できる人材、および、共生社会の実現のために資する人材の育成をより一層推進することである。



海外体験型教育の企画

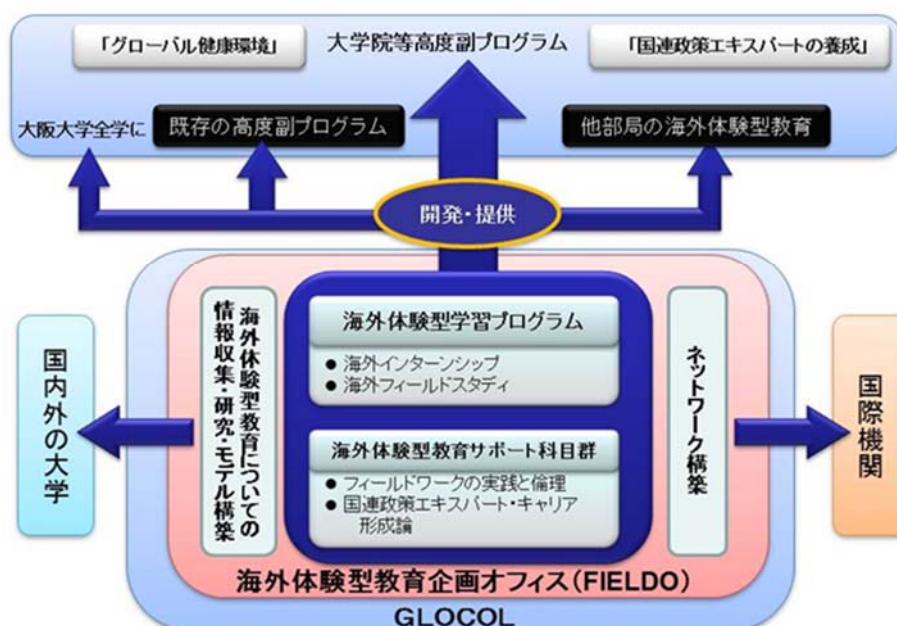
大阪大学全学の学部学生、大学院生を対象とした海外インターンシップや海外フィールドスタディなどを学内のさまざまな部局と協力しつつ企画する。また、そのために必要な調査研究を行う。海外体験型教育の企画にあたっては、GLOCOL で行われている研究や実践支援の経験と成果、および、そこで培われたネットワークを有効に活用する。

海外の大学や機関とのネットワーク形成

海外インターンシップと海外フィールドスタディの受け入れ先と、交渉、調整、提携をおこない、ネットワークを形成して、これを発展させる。

海外体験型教育プログラムの開発

海外インターンシップ、海外フィールドスタディなどの海外体験型教育プログラムをより安全で、現地との関係を考慮した形で行うため、海外リスク管理やフィールドワーク倫理に関する科目を整備し、提供する。また、グローバル健康環境や国連システムにおける実践的政策エキスパート養成など、海外体験型教育を有効に活用することのできる大学院等高度副プログラムを開発し提供する。



2) 体制

① スタッフ

2012年4月19日のスタッフ会議にてGLOCOLの新しい体制が承認され、現在は3名の教員および1名の事務スタッフで運営している（2016年3月31日現在）。

特任准教授	敦賀和外
特任准教授	本庄かおり
特任助教	安藤由香里
特任事務職員	片山 歩

② オフィス

豊中キャンパス 全学教育総合棟I-3階に事務室を置き、2011年4月より学生用自主学习スペース「STUDIO」を併設している。



3) 活動

本年度も「海外フィールドスタディ A」（大学院生対象、1学期）、「海外フィールドスタディ B」（学部生・大学院生対象、2学期）、「海外フィールドスタディ S」（大学院生対象、1学期集中）を開講した。「海外フィールドスタディ A」では、モンゴル、インドネシア、バングラデシュにてフィールド実習を行った。また「海外フィールドスタディ B」では、オランダにてフィールド実習を行った。さらに「海外フィールドスタディ S」ではタイでのフィールド実習を行った。

● 授業科目「海外フィールドスタディ」

昨年度に引き続き「海外フィールドスタディ A」（大学院生対象、1学期）、「海外フィールドスタディ B」（学部生・大学院生対象、2学期）（各2単位）を開講した。この科目は、学生が海外フィールドスタディ実習に参加することにより、専門性を土台にしながら社会の諸問題に実践的に取り組む力を養うことを目的としている。履修学生は、海外フィールドスタディの準備から事後学習までの学習プロセスを主体的にデザインし実行することを通じ、調整力、コミュニケーション力、柔軟性といった、卒業後にプロフェッショナルとして自主的に活動し、他者や他機関の人びとと協働するために必要な資質を身につけることが期待されている。また、フィールド実習での実践的経験を通じ、多角的視点をもって社会を批判的に思考し行動する学生を育成することをめざしている。

この科目では、履修学生の課程に応じて到達目標を設定している。全学生共通の到達目標として、1) 海外フィールドスタディの訪問先に関する情報を自ら収集し、課題を発見できるようになる、2) 海外フィールドスタディの内容を検討、準備できるようになる、3) 海外フィールドスタディ活動において、実践的な活動に積極的に参加することができる、4) 海外において現地の人々や専門分野の異なる学生と経験を共有することにより、諸現象に対する多角的な視点を持ちながら協働できるようになるという4点を掲げ、さらに学部生には5) 海外フィールドスタディの意義を理解し、その経験をどのように活かすか思考できるようになる、また博士課程前期／修士課程の履修学生へは、5) 海外での経験から学んだことをもとに、自身の専門分野における研究やその後のキャリアプランにどのように活かすか思考できるようになる、博士課程後期／博士課程の履修学生へは、5) 海外での経験から学んだことをもとに、自身が持つ専門知識や技術を海外のさまざまな場で活かすことができるようになるという到達目標を定めた。

【事前学習】

各実習地域についての歴史や地域事情、テーマに関連する知識について学習を行った。また「フィールドワークの実践と倫理」においても現地での行動に関して留意する事項や、安全衛生情報についての指導を行った。

【現地実習】

担当教員の引率のもと、各実習地域とテーマに関連する機関などへの訪問、地域社会での聞き取り、施設見学などを行った。実習期間中は日々の学習活動のふり返りを参加者間で行い、また学習成果の発表の場を設けてプレゼンテーションなどを行った。

【事後学習】

事前学習と現地実習を踏まえ、報告書の作成や報告会などの場での発表を行い、学習を総括した。

● 授業科目「海外フィールドスタディ S」

「海外フィールドスタディ S」(1 単位)は、広い分野の学生に対応する汎用的プログラムである「海外フィールドスタディ」と同様の学習内容をある程度含みつつも、あらかじめ対象として想定する学生の専門分野や志向もコースごとに限定し、学生が実習後に実際の研究を展開するうえで、またキャリア形成のうえで必要と思われる特定のテーマに焦点を絞って実習を行うプログラムである。事前学習、現地実習、事後学習は「海外フィールドスタディ」と同様にプログラムごとに行った。

② 海外インターンシップ

● 授業科目

2011 年度より「海外インターンシップ I」(事前学習)および「海外インターンシップ II」(実習および事後学習)を開講している。今年度も「海外インターンシップ II」に (A) と (B) を設け、前期、後期にそれぞれ開講し、実習時期に応じていずれかを選択して履修することを可能とした。同科目の概要は以下のとおり。

【目的】

本科目は、学生が、国際機関や国際 NGO、研究所などの国際的な活動を行う組織において海外インターンシップを実施することを支援する。本科目の履修およびインターンシップに参加することにより、学生が自分の専門性を土台にしながら社会の諸問題に実践的に取り組む力を養い、将来のキャリアをデザインすることを志向することをめざす。

【目標】

- (1)インターンシップの仕組みと意義、限界を理解し、自身のキャリアプランの中にどのように組み込むか思考できるようになる
- (2)自身のインターンシップ受け入れ先に関する情報収集をし、行動プランを作成することができるようになる
- (3)インターンシップに必要な準備を主体的に行えるようになる
- (4)インターンシップを実施し実践的な経験をする (海外インターンシップ II を受講する学生)
- (5)インターンシップの経験から学んだことをもとに、自身の専門分野の研究や将来のキャリアプランに新たな方向付けができるようになる (海外インターンシップ II を受講する学生)

【履修者】

13 名 (医学・医学科 1 名、工学 4 名、国際公共政策 8 名)

【講義内容】

- 4 月 14 日 オリエンテーション
- 4 月 21 日 履歴書・カバーレターの書き方
- 5 月 12 日 インターンシップ経験者の体験談
- 6 月 2 日 中間報告会、リスク管理
- 6 月 16 日 実務レッスン 1 (note-taking)
- 6 月 30 日実務レッスン 2 (communication)
- 7 月 7 日 実務レッスン 3 (communication)
- 7 月 14 日 総括

● 海外インターンシップ助成

本助成は 2011 年度より実施しており、今年度も、インターンシップ期間が 1 か月以上の「海外インターンシップ助成」、1 か月未満の「海外プレ・インターンシップ助成」枠を設けて実施した。

【海外インターンシップ助成】

1. 助成額
 - 1 か月以上 3 か月未満 : 20 万円
 - 3 か月以上 6 か月未満 : 30 万円
2. 応募資格
 - 1) 大阪大学の大学院博士前期課程又は後期課程に在籍する学生 (留学生を含む*)。

* 奨学金を受給している場合は、注意が必要なので事前に問い合わせること。

2) 履修状況等が次のいずれかの者

- ・グローバルコラボレーション科目「海外インターンシップ I」を履修している者
- ・上記科目を 2014 年度までに履修済みの者
- ・上記科目の履修生以外の者であってもインターンシップの受入先が決定している者、もしくは交渉中の者*1*2

*1 応募時に既に実施している海外インターンシップへの助成は不可。

*2 応募者本人が、日本において GLOCOL 担当教員の事前指導を受け、保険加入及びその他の事務手続きを行うことができることを条件とする。

- 3) 応募にあたり、1 か月以上のインターンシップを行うことについて、事前に指導教員の了承が得られていること。
- 4) 海外インターンシップ遂行に必要とされる英語もしくは当該国言語でのコミュニケーション能力を有する者。
- 5) 当センターが指定する海外旅行傷害保険に加入すること。
- 6) 学内の他の奨学金・助成金を受けていないこと。
- 7) 同年度に下記 2. 海外プレ・インターンシップ助成を受給していないこと。
- 8) 渡航先が、外務省が発表する危険情報における安全対策の 4 つのカテゴリーのうち、「渡航の是非を検討してください」、「渡航の延期をお勧めします」もしくは「退避を勧告します。渡航は延期してください」との指定がされている地域でないこと。

3. 2015 年度助成対象者

本年度の助成には 8 名が応募し、選考の結果 8 名（工学 4 名、国際公共政策 3 名、理学 1 名）（追加採択含む）が助成対象となった。8 名の助成対象者のうち 1 名は、派遣団体からの費用補助を満額受給することとなり、本助成を辞退したため最終的には 7 名が助成金を受給しインターンシップを実施した。

4. 派遣先と研修期間

- 1) Leibniz Centre for Agricultural Landscape Research (ZALF) (ドイツ) 2015 年 8 月 1 日～10 月 10 日
- 2) IAV GmbH Ingenieurgesellschaft Auto und Verkehr (ドイツ) 2015 年 8 月 10 日～10 月 30 日
- 3) Center for Molecular and Macromolecular Studies Poland Academy of Science Department of Hetero Organic Compounds (ポーランド) 2015 年 9 月 1 日～10 月 31 日
- 4) 経済協力開発機構 (OECD) 貿易農業局 (フランス) 2015 年 12 月 7 日～2016 年 3 月 2 日
- 5) AIAB Lombardia (イタリア有機農業協会) (イタリア) 2016 年 2 月 5 日～3 月 27 日
- 6) Office of the Prime Minister, Government of Tuvalu (ツバル) 2016 年 2 月 17 日～3 月 23 日
- 7) Green Holidays Tours & Travel Pte Ltd (シンガポール) 2016 年 2 月 18 日～3 月 18 日

【海外プレ・インターンシップ助成】

1. 助成額

上限 15 万円（渡航先に応じて決定）

2. 応募資格

- 1) 大阪大学の学部学生及び大学院生（留学生を含む*）。

* 奨学金を受給している場合は、注意が必要なので事前に問い合わせること。

- 2) 履修状況等が次のいずれかの者

- ・グローバルコラボレーション科目「海外インターンシップ I」を履修している者
- ・上記科目を 2014 年度までに履修済みの者
- ・上記科目の履修生以外の者であってもインターンシップの受入先が決定している者、もしくは交渉中の者*1*2

*1 応募時に既に実施している海外インターンシップへの助成は不可。

*2 応募者本人が、日本において GLOCOL 担当教員の事前指導を受け、保険加入及びその他の事務手続きを行うことができることを条件とします。

- 3) 応募にあたり、1 か月未満のプレ・インターンシップ（短期プログラム）を行うことについて、事前に指導教員の了承が得られていること。
- 4) 海外インターンシップ遂行に必要とされる英語もしくは当該国言語でのコミュニケーション能力を有する者。
- 5) 当センターが指定する海外旅行傷害保険に加入すること。

- 6) 学内の他の奨学金・助成金を受けていないこと。
- 7) 同年度に上記 1. 海外インターンシップ助成を受給していないこと。
- 8) 渡航先が、外務省が発表する「海外安全情報」レベルのうち、「渡航の是非を検討してください」以上の情報が発表されている地域でないこと。

3. 2015 年度助成対象者

本年度の助成には、12 名の応募があったが、うち 1 名は応募条件を満たしていなかったため受理できず、応募資格を満たしたもののうち、選考の結果、9 名（法学部 2 名、工学部 1 名、工学研究科 1 名、人間科学部 2 名、人間科学研究科 2 名、医学部 1 名）が助成対象となった。応募者のうち 1 名はインターンシップ参加取りやめに伴い、応募取り下げとなった。（※2016 年 1 月末現在、1 名は採否保留中）

4. 派遣先と研修期間

- 1) Indonesian Institute of Sciences, Research Center for Geotechnology（インドネシア） 2015 年 8 月 18 日～27 日
- 2) Indonesian Institute of Sciences, Research Center for Geotechnology（インドネシア） 2015 年 8 月 18 日～27 日
- 3) Borderless LINK（ミャンマー）、BLJ Bangladesh Corporation（バングラデシュ）
Grameen Bank（バングラデシュ） 2015 年 8 月 20 日～9 月 17 日
- 4) Sayariy Warmi（ボリビア） 2015 年 8 月 31 日～9 月 26 日
- 5) Istituto Nazionale per la promozione della salute delle popolazioni Migranti e per il contrasto delle malattie della Povertà（INMP）（イタリア） 2015 年 11 月 23 日～29 日
- 6) Kenya Voluntary Development Association（ケニア）2016 年 2 月 18 日～3 月 17 日
- 7) Tomlinscote School Sixth Form College（イギリス）2016 年 2 月 22 日～3 月 18 日
- 8) Future Village（ネパール）2016 年 2 月 27 日～3 月 19 日
- 9) VIA Programs（アメリカ）2016 年 3 月 18 日～27 日

③ WHO 神戸センターとの連携

WHO 健康開発総合研究センター（WHO 神戸センター）は、社会、経済、および環境の変化が及ぼす健康への影響、またそれらの保健政策への反映について研究を行っている。特に、保健行政や、緊急準備対応、都市部の健康（健康格差）を中心に、都市に公平な健康をもたらす政策立案に向けて、健康格差傾向の調査、および証拠の検証という側面から研究を推進している。

FIELDO では 2011 年度に WHO 神戸センターとの連携に関する会議を実施し、以下の事業において連携をしていくことを確認した。

1. インターンシップ派遣事業
2. WHO 神戸センターの見学スタディツアーの実施
3. セミナー、フォーラム、講義などで講師の相互派遣
4. 共同研究

上記に基づき WHO 神戸センターからテクニカル・オフィサー狩野恵美先生をグローバルコラボレーション科目「グローバル健康環境」の講師として派遣いただいた。

④ 高度副プログラム

● 高度副プログラム「グローバル健康環境」

近年、薬・食の安全性、新興・再興感染症や院内感染の問題、地球温暖化や大気・土壌・水質汚染といった地球規模での環境問題と、環境の変化が人間の心身の健康に及ぼす影響に関する懸念が高まっている。本プログラムは、貧困、経済格差などの世界的な経済問題、薬や食の安全性、新興・再興感染症の問題、地球温暖化、大気・土壌汚染などの地球規模の環境問題と変化が人間の心身にどのような影響を及ぼすのかを知り、その上でそれぞれの専門知識を活かしながら、その解決方法を自ら導くことのできる人材を育成することを目標として、2011 年度に開設された文理融合型高度副プログラムである。

地球規模での環境問題、グローバル化による社会環境・生活環境の変化等、人間の心身の健康に及ぼす影響に関する基礎的な知識を習得し、食環境、住環境、自然環境、社会環境を含めた環境の変化が人間の心身の健康に及ぼす影響を、グローバルな視点から具体的に考察することをねらいとした。



【実績】

健康が様々な要因の影響を受けていることは自明であり、現在世界で起きている環境問題・健康問題の解決には学際的なアプローチが不可欠である。そのため、本プログラムでは多様なバックグラウンドを持つ学生が集い、具体的に環境問題・健康問題の解決方法について議論することにより、お互いに「学び合い」ながら、思考を深めていくことを目的とした。本プログラムは必修科目「グローバル健康環境」と、22科目の選択必修科目から構成され、8単位以上の履修を求めている。必修科目で、人間を取り巻く物質的・社会的環境とその健康影響に関して、基盤となる重要な知識を習得したうえで、受講生各々の興味に応じて選択必修科目を履修するように構成されている。選択必修科目には医学・保健学・薬学だけでなく、国際健康政策や国際協力に関するものから、環境工学、社会科学、国際公共政策学まで理系・文系の枠にとられず、幅広く履修できるように構成されている。

健康・環境という多様な要因の影響を受け、そして多様な影響を与える課題にとって、学際的なアプローチは必須である。参加する学生が、それぞれの専門性を基盤に多様な視点を持ちながら意見を出しあうことで、課題をより多面的にそして立体的に捉えることができるようになることを考える。本プログラムには、今年度、7 研究科（理学、医学・医学科、医学・保健学科、薬学、工学、国際公共政策、生命機能）から 16 名の申請があった。

【参考】

プログラム名称	グローバル健康環境 (Global Health Environment)		
プログラム実施部局	グローバルコラボレーションセンター		
連携部局	人間科学研究科、医学系研究科、薬学部、薬学研究科、工学研究科、国際公共政策研究科、環境イノベーションデザインセンター		
修了要件単位数	8単位以上	履修対象者	修士、博士
標準履修期間	1～2 年	対象者制限の有無	無
履修資格・条件	資格や条件はありません。理系・文系を問わず全学からの参加を歓迎します。世界で起きている健康問題・環境問題に対し積極的に取り組むことを目指す人、将来、国際機関でのキャリアを築くことを考えている人、また、健康問題や環境問題に関心がありグローバルな視点・学際的な視点を持ちたいと思っている学生にも向いたプログラムです。		
修了要件	本プログラムが指定する必修科目、選択必修科目を合わせて 8 単位以上取得することとします。		

【講義内容】

・グローバル健康環境

4月16日	講義の説明とオリエンテーション	(GLOCOL 本庄かおり)
4月23日	国際保健の動向と課題	(厚生労働省 国際科 木阪有美)
5月7日	健康指標と社会的健康決定要因	(GLOCOL 本庄かおり)
5月14日	生活習慣病とグローバリゼーション	(GLOCOL 本庄かおり)
5月21日	途上国の環境と健康 パラオ	(未来戦略機構 三田 貴)
6月4日	途上国における母と子の健康	(長崎大学国際健康開発研究科 松山章子)
6月11日	地球環境と健康	(薬学研究科 平田収正)
6月18日	貧困病としての寄生虫病とマラリアワクチン開発	(微生物研究所 堀井俊宏)
6月25日	エイジフレンドリーシティ：人口の高齢化に適した環境づくり	(WHO 神戸センター 狩野恵美)
7月2日	発展途上国の環境と健康 モンゴル	(GLOCOL 思沁夫)
7月9日	新興国の健康と環境 ベトナムの事例から	(GLOCOL 住村欣範)
7月16日	国づくりは人づくり グローバルヘルス分野で出来ること	(国立国際医療センター 藤田則子)
	(FIELDO グローバル・エキスパート連続講座として開催 詳細はp.17)	

● 高度副プログラム「国連政策エキスパートの養成」

国連システムは、平和と安全、開発、人権の分野から、保健、環境まで多様な分野の専門機関も含め構成されており、ニューヨーク、ジュネーブ他の本部および全世界のフィールドで活動している。現在、国連への財政貢献に関し日本はアメリカに次いで第二位となっているが、その財政貢献に比較し国連で働く日本人職員の数が増えていないことがかねてから指摘されている。

国連では、多くの場合、経験を積んでいる専門家が即戦力として求められており、学生が卒業後直後に国連で働ける機会は非常に限られているが、大学時代はキャリアの方向性を定める重要な時期であり、関心分野の知識を深め、大学卒業後もその分野で実務経験を積むことによって、将来的に国連においてキャリアを得る可能性が高まる。

本プログラムは、将来的に国連をはじめとする国際公共セクターでのキャリアを志向する学生に対し、諸課題の基礎知識、実践的ノウハウおよび海外インターンシップの機会を提供し、理系・文系を問わない幅広い教養とグローバル化した世界の現実に対する深い理解を涵養するための教育を行い、将来的に国連をはじめ国際公共セクターにおいて専門家として活躍できる人材の養成を目的とする。



【実績】

2011 年度に開講された「国連政策エキスパートの養成」プログラムは、人間科学研究科、医学系研究科、薬学研究科、国際公共政策研究科、環境イノベーションデザインセンターの協力を得て、将来国際機関や NGO など活躍する人材に分野横断的に座学および実践型の科目を提供している。

同プログラム開講にあたり、国際公共セクターにおけるキャリアについて学ぶ「国連政策エキスパート・キャリア形成論」を国際公共政策研究科と共同開発し、同プログラムの必修科目とした。そのほか公共政策、国際貿易、環境、安全保障、保健、教育などの分野の選択科目を提供するとともに、実践科目として FIELDO が実施する海外インターンシップおよび海外フィールドスタディに関する科目を組み込んだ。

本年度は2研究科から計3名の学生が申請した。2011年に開設した「国連政策エキスパート・キャリア形成論」は、2015年度から国際公共政策研究科開講分のみとし、グローバルコラボレーション科目分は不開講とした。今年度は複数の研究科から10名の学生が受講した。2014年度からは減少したが、これはグローバルコラボレーション科目を不開講としたことも一因であろう。他方で、今年度は、久木田純氏をゲスト・スピーカーとして招き、5月11日の講義を一般公開としたところ、80名以上の参加があり、国連のキャリアに関する関心の高さが確認できた。今後は、全学レベルでキャリア教育を検討する際に、国連を含むグローバルなキャリアについて、学部生も含めて学ぶことができる講義内容と履修制度の在り方も検討することが求められよう。

【講義内容】

- 4月13日 オリエンテーション
国連の取り組みと日本の役割（星野教授）
国際協力分野の人材市場とキャリア（敦賀特任准教授）
- 4月27日 国連行政の概要と実務（蓮生准教授）
- 5月11日 特別講義（久木田純 前 UNICEF カザフスタン事務所長）（詳細は pp.15-16）
- 6月1日 国連による平和構築（敦賀特任准教授）
- 6月15日 国連で求められるコンピテンシーとは（敦賀特任准教授）
- 6月29日 ワークショップ：実務能力を身に付ける①（プロジェクト・マネジメント）（敦賀特任准教授）
- 7月6日 ワークショップ：実務能力を身に付ける②（プロジェクト・コンテスト）（敦賀特任准教授）
- 7月13日 まとめ：「自分のキャリア・パスを描く」（学生によるプレゼンと総括）

⑤ セミナーなど

・ FIELDO グローバル・エキスパート連続講座

今年度も国内外において国際的活動の第一線で活躍されている実務者を招き、実践的な活動を学ぶことやさまざまなキャリア・パスを知ることなどを目的として開催した。

● 国際公共政策研究科「特殊講義（国連政策エキスパート・キャリア形成論）」一般公開講座
FIELDO グローバル・エキスパート連続講座（25）
国連職員の人生計画・ユニセフの問題解決法

【講演者】

久木田 純（前ユニセフ駐カザフスタン事務所代表、国連フォーラム共同代表）

【開催日・場所】

2015年5月11日、基礎工学国際棟セミナー室（豊中キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

国連児童基金（ユニセフ）で30年間にわたって勤務され、国連フォーラムの共同代表も務めておられる久木田純氏をお招きし、国連職員のキャリア・パスとコンピテンシー、及び世界の子どもの権利を守るユニセフの問題解決方法についてご講演いただいた。

プログラム

・ 第1部「国連職員の人生計画」

一度きりの人生をぶれずに高い満足度をもって生きるには、明確な目標を持って、自分で自分の人生をデザインするしかない。世界のために働く国連職員をめざす若者は多いが、世界で通用するプロになるまでの道のりは遠い。特に国連専門職員のエントリー・レベルに達するには大学卒業から10年前後かかる。この道のりを粘り強くあゆみ、必要な能力を獲得しながら前へ進むには、自分の人生をみつめ、一生という長いスパンで計画を立て、自分を動機付け、結果を出していく必要がある。そのために人生計画がどう役立つのか、久木田氏の国連職員への道、国連職員としての30年を例に議論いただいた。

・ 第2部「ユニセフの問題解決法」

ユニセフは、世界中の子どもの権利を守り、基本的ニーズを満たし、子どもが持てる潜在能力を発揮できるよう



な環境を整備する使命を持っている。そのため、気候変動や貧富の格差といった世界規模の問題から、各国の特殊な状況や問題の改善に対応する必要がある。ユニセフの問題解決アプローチについて、そのプログラミングのプロセス、政策アドボカシー、パートナーシップやファンドレイジングなどの側面から説明した。特に久木田氏自身の関わってきた世界ポリオ根絶事業や子どもの死亡率の低減、平和構築、トイレやカマドの普及などの具体例を使って紹介いただいた。

【講師紹介】

西南学院大学文学部英語専攻卒業、シンガポール国立大学社会学部留学（ロータリー財団フェロー）を経て、九州大学大学院で教育心理学修士号取得、同博士課程進学。1985年外務省 JPO 試験に合格、翌年から国連職員としてユニセフ駐モルディブ事務所に派遣され、駐日事務所、駐ナミビア事務所、駐バングラデシュ事務所、ニューヨーク本部を経て、駐東ティモール事務所代表、駐カザフスタン事務所代表を歴任。2015年1月国連退官。1995～1997年、東京大学大学院医学系研究科および教育学部で非常勤講師。著書に『東ティモールの現場から～子どもと平和構築』（ソトコト新書、2012年）、共訳書に『マネジメント・開発・NGO～[学習する組織] BRAC の貧困撲滅戦略』（新評論、2001年）。編著書に『現代のエスプリ～エンパワーメント』376号（至文堂、1998年）などがある。現在、国連フォーラム（unforum.org）共同代表、神戸大学大学院非常勤講師、(NGO)Climate Decision 代表。

【備考】

主催：OSIPP 国連政策研究センター

共催：GLOCOL

※国際公共政策研究科開講「特殊講義（国連政策エキスパート・キャリア形成論）」を一般公開した。



●「シリーズ：適正技術 Design for Life」(10) / FIELDO グローバル・エキスパート連続講座 (26) ソーシャル・ビジネスで生きていく：どうせやるなら、社会を変える仕事を

【講演者】

鈴木雅剛（ボーダレス・ジャパン代表取締役副会長）

【開催日・場所】

2015年6月22日、国際公共政策研究科 2F 講義シアター（豊中キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

近年、社会問題の解決を主眼とした「ソーシャル・ビジネス」が注目を集めているが、まだまだ世の中に大きく広がっていない。どうすればソーシャル・ビジネスを成功させられるのか、本質的な理解と実践力が問われている。

本セミナーでは、国境を超えてソーシャル・ビジネスを展開しているボーダレス・ジャパンの鈴木氏を招き、ソーシャル・ビジネスの本質とはなにか、ボーダレス・ジャパンの創業経緯と現在の事業内容・今後の展開、そして社会貢献をキャリアにすることについて、講演いただいた。

【講師紹介】

ボーダレス・ジャパン代表取締役副会長。2007年、27歳で現代表取締役会長の田口と共に株式会社ボーダレス・ジャパンを創業。世界にほとんど存在しない「ソーシャル・ビジネスしかやらない会社」として、貧困、差別・偏見、環境破壊等の社会問題をソーシャル・ビジネスで解決している。現在、世界6ヵ国8拠点8事業を運営中。社会を変える「本物のソーシャル・ビジネス」、「本物の社会起業家」とはどういうものなのかを世の中に提示している。



【備考】

主催：国際公共政策研究科（OSIPP）稲盛財団寄附講座

共催：GLOCOL

公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS 大阪大学・京都大学連携プログラム）



● GLOCOL セミナー（127）/ FIELDO グローバル・エキスパート連続講座（27） 国づくりは人づくり グローバルヘルス分野で出来ること

【講演者】

藤田則子（国立国際医療研究センター 国際医療協力局運営企画部保健医療協力課課長）

【開催日・場所】

2015 年 7 月 16 日、医学部保健学科第 3 講義室（吹田キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

講師の藤田氏より、日本での産婦人科病院勤務から、カンボジア・アフガニスタン・コンゴなどの紛争後国家と呼ばれた国で母と子、特に女性の健康改善に関わり、それぞれの国々で同じ職業・違う立場の医師（産婦人科医）や助産師たちと付き合いしていくうちに、日本では気がつかなかった、制度（しくみ）に目が行くようになった。そんなご自身の経験をもとにご講演いただいた。

【講師紹介】

1983 年東京医科歯科大学医学部卒業。1997 年まで産婦人科医として日本で病院勤務。1997 年タイマヒドン大学で熱帯医学・公衆衛生学士取得。1998 年から NGO や JICA 事業を通じて、タイミャンマー国境、カンボジア、アフガニスタン、コンゴ民主共和国、セネガル、などで母子保健、リプロダクティブヘルス、保健人材育成管理分野のプログラムマネージャとして勤務。

【備考】

主催：GLOCOL

※「グローバル健康環境」の授業の一環として行われた。



● GLOCOL セミナー (128) / FIELDO グローバル・エキスパート連続講座 (28)
国際刑事裁判所の重要性と可能性 ― 国際司法におけるキャリア形成

【講演者】

尾崎久仁子（国際刑事裁判所判事・第2副所長）

【開催日・場所】

2015年7月23日、豊中総合学館5階講義室501（豊中キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

オランダ・ハーグにある国際刑事裁判所の副所長の尾崎久仁子判事に、国際刑事司法の役割の重要性についてお話をいただくと共に、国際的な司法分野におけるキャリア・パスについてお話いただいた。

【講師紹介】

東京大学教養学部（国際関係論）卒業。オックスフォード大学修士号（国際関係論）取得。1979年外務省入省。条約局法規課、国連代表部等において勤務後、法務省刑事局、同省入国管理局難民認定室長を経て、外務省人権難民課長を務める。その後、東北大学大学院法学研究科教授、在ウィーン代表部公使、国際連合薬物犯罪事務所条約局長等を歴任。2010年に国際刑事裁判所判事に就任後、2013年に国際刑事裁判所第1審裁判部長、2015年より国際刑事裁判所第2副所長となる。

【備考】

主催：GLOCOL

国際公共政策研究科（OSIPP）

共催：法学研究科・法学部、高等司法研究科

※「法と共生社会実践演習Ⅰ」の授業を公開講座とした。



● GLOCOL セミナー (129) / FIELDO グローバル・エキスパート連続講座 (29)
IMF 業務紹介セミナー

【講演者】

ジョバンニ・ガネリ（IMF アジア太平洋地域事務所 次長）

【開催日・場所】

2015年10月5日、豊中総合学館501講義室（豊中キャンパス）

【言語】

英語（通訳なし）

【概要】

IMF アジア太平洋地域事務所のジョバンニ・ガネリ次長から、IMF の業務についてご紹介いただいた。

【講師紹介】

2003年にIMFに着任。財政局、欧州局およびIMF研修所（現 能力開発局）にてヨーロッパ、アジア、アフリカ地域における様々な代表団での任務を担当。2012年8月よりアジア太平洋地域事務所シニアエコノミストとして着任、2015年9月より現職。日本チームのエコノミストとして対日4条協議を担当。研究対象は財政政策。特に近年では日本の構造改革に関する考察を行っている。ウォリック大学で経済学博士号を取得。イタリア国籍。

【備考】

主催：IMF アジア太平洋地域事務所（OAP）

共催：GLOCOL



● GLOCOL セミナー (130) /FIELDO グローバル・エキスパート連続講座 (30)
人道危機に立ち向かう 現場で求められるリーダーシップとは

【講演者】

忍足謙朗（元国連世界食糧計画（WFP）アジア地域局長）

田瀬和夫（国連フォーラム共同代表、デロイトトーマツコンサルティング執行役員）

【開催日・場所】

2015 年 11 月 6 日、大学会館（豊中キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

一刻を争う人道危機の現場で何が必要なのか。内戦から逃れる避難民や自然災害で住居を失った人々を支援するにはどうしたらいいのか。本セミナーでは、30 年以上にわたり国連で人道支援、開発援助で活躍され、ボスニア、カンボジア、スーダンで緊急支援の指揮をとってこられた忍足謙朗氏と、外務省、国連で人間の安全保障を推進され、国連に関心のある専門家や学生が参画している国連フォーラムの共同代表を務められている田瀬和夫氏をお招きし、人道危機の現場や支援の在り方、グローバルな場で必要とされるリーダーシップ・スキルについて、対談形式でご議論いただいた。

【講師紹介】

忍足謙朗：国連世界食糧計画（World Food Programme - WFP）元アジア地域局長。30 年以上にわたり国連に勤務し、人道支援、開発支援の現場で活躍。WFP ではボスニア紛争、コソボ紛争などの紛争地、内戦時代のカンボジア、スーダン共和国等で大規模な緊急支援の指揮をとる。2009 年から 2014 年、WFP アジア地域局長を務め、アジア 14 か国の支援の総責任者となる。この道のリーダー的存在として国内外で評価され、2006 年に TBS「情熱大陸」、2014 年には NHK「プロフェッショナル 仕事の流儀」に出演。2015 年から日本国内での活動を開始、国際協力に興味を持つ若い世代の育成や、防災・緊急支援分野で貢献していこうと考えている。

田瀬和夫：国連フォーラム共同代表、デロイトトーマツコンサルティング執行役員。日本経済と国際機関・国際社会の「共創」をテーマに、企業の世界進出を支援し、人権デュー・デリジェンスをはじめとするグローバル基準の標準化、企業のサステナビリティ強化支援を手がける。1992 年外務省に入省し、国連政策・人権人道・アフリカ開発・国際機関拠出金・人間の安全保障、緒方貞子氏の補佐官などを担当したのち、2004 年より 10 年間国際連合人道問題調整部人間の安全保障ユニット課長。大阪大学大学院国際公共政策研究科招へい教授。

【備考】

主催：GLOCOL



・ FIELDO ブラウンバッグランチ（BBL）セッション

昼休みを利用して、大阪大学教員などを囲む勉強会を開催した。



● FIELDO BBL セッション（17） 海外渡航時の健康管理について

【リソースパーソン】

大橋一友（医学系研究科保健学科教授）

【開催日・場所】

2015年7月8日、GLOCOL センター長室（吹田キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

夏季休暇には、海外フィールドスタディや海外インターンシップ、留学、旅行など海外へ出かける予定の方も多し。日本とは違う慣れない環境の中でも、元気に充実した時間を過ごすために、自身の健康管理について、医師でもある医学系研究科保健学科の大橋教授より、病気の基本的な知識もふまえてお話しいただいた。



● FIELDO BBL セッション（18） あなたも日韓学生フォーラムに参加しませんか？ 2016 年日韓学生フォーラム説明会

【リソースパーソン】

岡田果歩（外国語学部朝鮮語専攻3年）ほか2名

【開催日・場所】

2015年11月9日、GLOCOL STUDIO（豊中キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

日韓学生フォーラムは、韓国の大学生と夏の2週間の合同キャンプで討論・文化交流を行う学生団体である。一人ひとりが興味分野に基づいて作成するプレゼンテーション・英語を使つての討論を中心に、未来志向の日韓関係構築を目指し、各地でのフィールドトリップ・文化紹介プログラム等を通して互いの文化を学び、親睦を深めることを目的としている。学年、国籍は問わず、韓国文化や国際交流に関心のある方、韓国語や英語のスピーキング力を磨きたい方などを対象に説明会を開いた。



● FIELDO BBL セッション（19） 海外渡航時の健康管理について

【リソースパーソン】

大橋一友（医学系研究科保健学科教授）

【開催日・場所】

2015年12月17日、GLOCOL STUDIO（豊中キャンパス）

【言語】

日本語

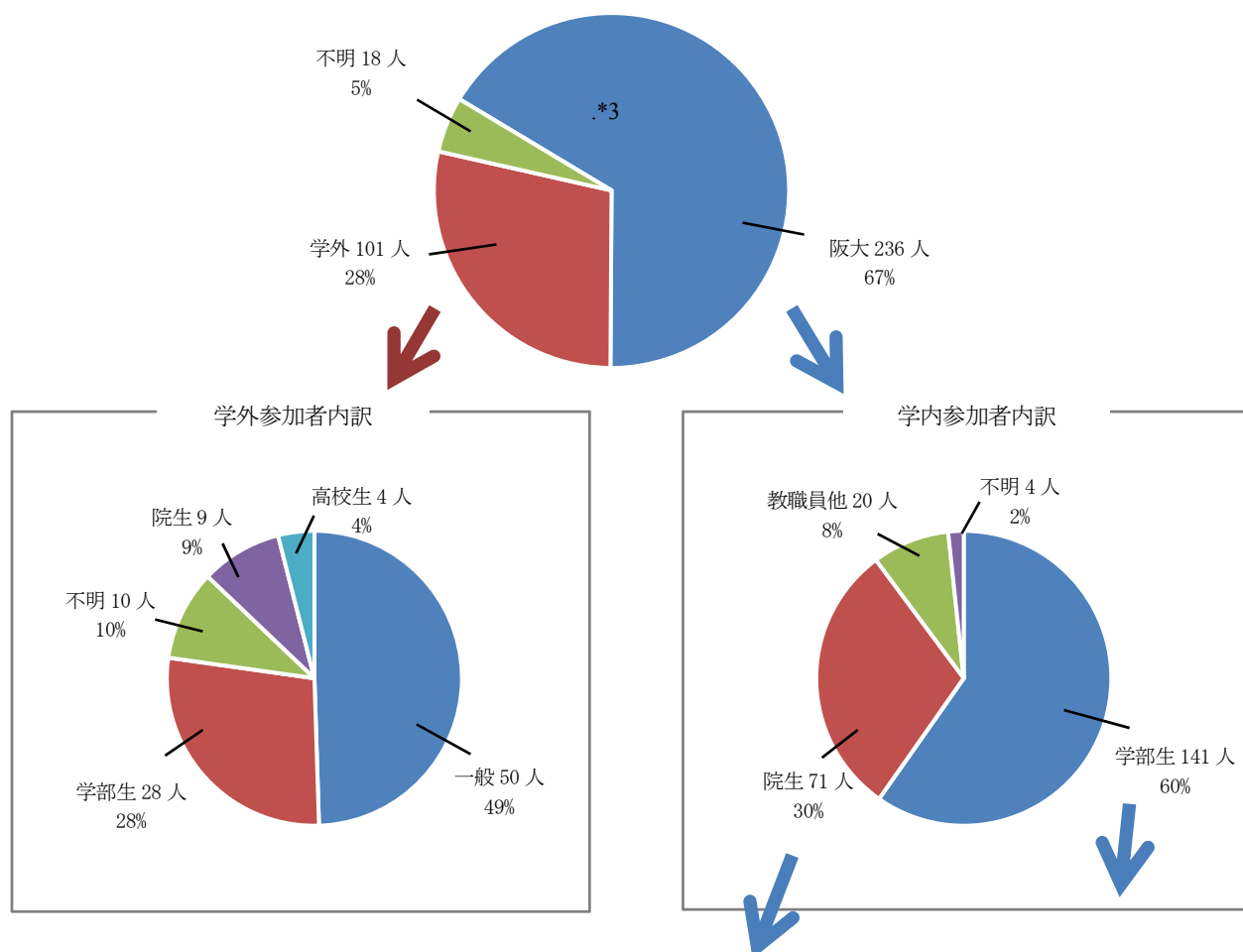


【概要】

春季休暇には、海外フィールドスタディや海外インターンシップ、留学、旅行など海外へ出かける予定の方も多い。日本とは違う慣れない環境の中でも、元気に充実した時間を過ごすために、自身の健康管理について、医師でもある医学系研究科保健学科の大橋教授より、病気の基本的な知識もふまえてお話しいただいた。

2015 年度 FIELD O グローバル・エキスパート連続講座 参加者の所属内訳

【総計：総参加者数 355 人／6 回】



大阪大学院生 参加者内訳 (人)

国際 公共 政策	工学	人間 科学	保健 学	法学	経済 学	言語 文化	基礎 工学	歯学	生命 機能	薬学	計
21	10	10	10	9	4	3	1	1	1	1	71

大阪大学学部生 参加者内訳 (人)

法学	外国 語	人間 科学	保健 学	文学	国際 公共 政策	理学	医学	工学	経済 学	基礎 工学	歯学	計
48	36	20	8	6	5	4	3	3	3	3	2	141

⑥ FIELDO 学生用自主学習スペース (STUDIO)

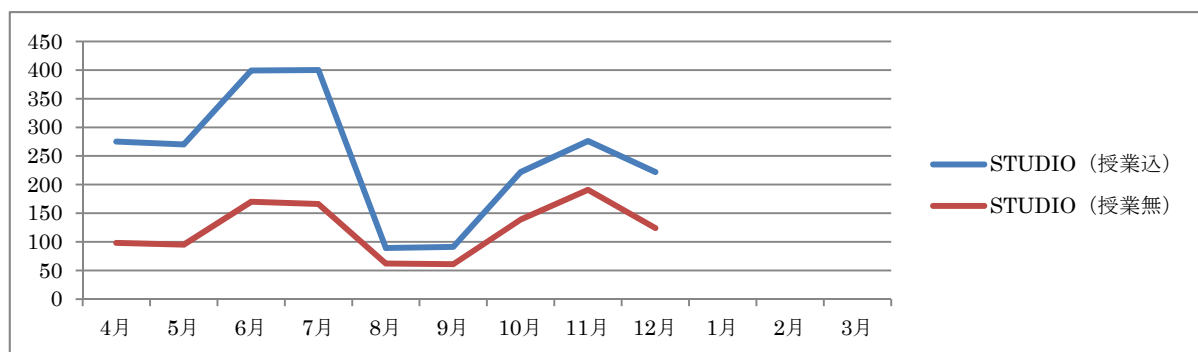
2011 年 4 月より、全学教育総合棟 I-3 階の FIELDO オフィス内に、海外体験型学習のための学生用自主学習スペース「STUDIO」を開設している。このスペースは、学生が以下の目的で利用するためのものである。

- ・海外インターンシップ、海外フィールドスタディに関する図書閲覧
- ・インターネットでの情報検索
- ・インターンシップ、フィールドスタディ経験者、教職員による相談
- ・海外インターンシップ、海外フィールドスタディの企画立案に関する情報収集や研究
- ・海外インターンシップ、海外フィールドスタディの事前事後学習、グループ学習



2015 年度の利用状況：利用者数月平均は、昨年度とほぼ同数であり、引き続き STUDIO が活用されている。

2015 年度	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	平均 (人)
STUDIO (授業込)	275	270	399	400	89	91	222	276	222				249
STUDIO (授業無)	98	95	170	166	62	61	139	191	124				122



⑦ 学生海外渡航時のリスク管理 (予防・対策) に関する研究

科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究 (課題番号: 26590209、補助事業期間: 2014～2015 年度) を活用し、学生海外渡航時のリスク管理についての研究に引き続き取り組んだ。昨年度実施したリスク管理体制に関するアンケート調査分析を進めるとともに、5 月 25 日-26 日にボストンにて行われた NAFSA (National Association of Foreign Student Advisers) のリスク管理ワークショップに参加して、情報収集を行った。また、7 月 30 日には NAFSA リスク管理ワークショップの要素を取り入れた危機管理シミュレーションを GLOCOL 教職員および阪大内他部局教職員も参加して実施した (詳細は p.48)。これらの取り組みをもとに、IAEVG 国際キャリア教育学会 (9 月)、Asia Pacific Career Development Association 研究大会 (9 月)、大学教育における「海外体験学習」研究会年次大会リスク管理分科会 (12 月) において研究成果発表を行うとともに、公開シンポジウム「大学のグローバル化と学生海外渡航時のリスク管理ー学生を守る・大学を守るー」(1 月 27・28 日) を開催して日本全国の大学等関係者との意見交換を行った (詳細は pp.44-45)。また、日本学生支援機構ウェブマガジン『留学交流』(2016 年 3 月号) へも「大学における学生海外渡航時のリスク管理に関する調査」についての論考を投稿し本研究のまとめとした。

2. 海外フィールドスタディ・プログラム一覧

2015年度、GLOCOLでは計5本の海外フィールドスタディ・プログラムを実施した。内訳としては、科目「海外フィールドスタディ A」として実施したプログラムが3つ、「海外フィールドスタディ B」として実施したプログラムが1つ、「海外フィールドスタディ S」として実施したプログラムが1つであった。また、この5本のプログラムでは、さまざまな助成プログラムを活用して、派遣学生に渡航費の一部補助を行った。その一覧は以下のとおりである。

プログラム名	「科目名」/ 科目外	助成金財源
モンゴル 「環境と地域保全」	「海外フィールドスタディ A」	日本学生支援機構「2015年度海外留学支援制度（短期派遣）」
インドネシア 「コミュニティ防災—命を守るためのつながりを学ぶ—」	「海外フィールドスタディ A」	日本学生支援機構「2015年度海外留学支援制度（短期派遣）」 GLOCOL 運営費交付金
バングラデシュ 「開発途上国の生活環境の改善に貢献するモノづくりを提案する」	「海外フィールドスタディ A」	日本学生支援機構「2015年度海外留学支援制度（短期派遣）」 GLOCOL 運営費交付金
オランダ 「国際司法・平和の現場を知る」	「海外フィールドスタディ B」	日本学生支援機構「2015年度海外留学支援制度（短期派遣）」 大阪大学未来基金グローバル化推進事業「海外研修プログラム助成金」 GLOCOL 運営費交付金
タイ 「生物資源と環境」	「海外フィールドスタディ S」	日本学生支援機構「2015年度海外留学支援制度（短期派遣）」*大阪大学未来基金グローバル化推進事業「海外研修プログラム助成金」*

* 生物学国際交流センター（ICBiotech）からの申請。

● モンゴル

海外フィールドスタディ A「環境と地域保全」

派遣：2015年8月9日～18日 参加学生：3名

本コースでは、人々の生存と環境が相互に影響を与えており、生存環境を脅かす数々の危機的状況に直面しているモンゴルの現状に対し、オブルハンガイ県チャガンボルガソの環境保護活動組合、同県における鉱山開発現場や寺院、博物館、遊牧民の家庭等を訪問し、講義を受けたり、調査を行ったり、地域の人々と共に活動することを通して、現地を取り巻く状況を包括的に理解した。また、モンゴル国立大学とも連携し、調査成果の報告や現地学生とのディスカッション等の交流も行った。

● インドネシア

海外フィールドスタディ A「コミュニティ防災—命を守るためのつながりを学ぶ—」

派遣：2015年9月1日～10日 参加学生：2名

本コースでは、インドネシアを訪問し、ガジャマダ大学およびインドネシア現地 NGO の COMBINE Resource Institution（COMBINE）と連携してプログラムを実施した。コミュニティラジオを活用した情報提供／共有、ファーストエイドやメンタルヘルスケア、子どもたちの防災／環境教育、復興過程のコミュニティビジネス、記憶を語り継ぐ活動など、地域共生のためのコミュニティ防災活動を、多くの自然災害の経験から先進的な取り組みを進めているインドネシア／ジョグジャカルタ周辺地域から学んだ。またその過程を通して、グローバルな視点から諸課題をとらえる姿勢を養うとともに、大学、地域コミュニティ、非政府団体（NGO）との協働により諸課題に取り組む人材の育成につながった。

● バングラデシュ

海外フィールドスタディ A 「開発途上国の生活環境の改善に貢献するモノづくりを提案する」

派遣：2015 年 9 月 5 日～15 日 参加学生：6 名

本コースは、バングラデシュの農村において、農作業の負担を軽減し、所得向上に貢献するプロダクトの考案、改良、普及を進めるという目的のもと、実施された。今年度は昨年度から継続して、収穫した籾（米）の乾燥機の開発と実験を行った。バングラデシュでは収穫した籾を一度、パーボイル（半茹で）してから天日で乾燥する作業工程を踏むが、雨天や曇天によって天日干しができないために、全収穫量の 2 割ほどが廃棄される。このことから、乾燥機の需要を判断し、参加学生が現地の適正技術で製作できる籾乾燥機の試作品を設計した。今年度はバングラデシュ南西部のジェソール（Jessore）郡の農村において、設計した籾乾燥機を製作し、試行実験を行った。その上で実験結果を取りまとめ、現地の農民にプレゼンテーションを行い、さらなる改良を行うためのフィードバックを得ることができた。この過程において学生たちは、調査コーディネーター（バングラデシュ人）の協力を得ながら、現地の農民、鉄工所、建築職人などの多様な立場の人々との協働を行うという体験を得ることができた。

● オランダ

海外フィールドスタディ B 「国際司法・平和の現場を知る」

派遣：2016 年 2 月 13 日～22 日 参加学生：8 名

本コースは、国際的な紛争の解決手段として司法について学ぶことを目的とした。国際司法・紛争解決の分野で重要な取り組みを進めているオランダのハーグを中心として、国際司法裁判所（ICJ）、国際刑事裁判所（ICC）、旧ユーゴスラビア国際刑事裁判所（ICTY）、常設仲裁裁判所（PCA）、化学兵器禁止機関（OPCW）、欧州安全保障協力機構（OSCE）少数民族高等弁務官事務所等を訪問して国際司法の現場について深く学ぶとともに、協定校であるグローニンゲン大学において平和・人道についての講義を受講し、現地学生との討議を通して、国際司法・平和にかかわる諸課題について考えた。また、各機関で実際に職員と意見交換する中で、どのように自らのキャリア・研究をグローバルな観点から活かせるかを発見することも目的とした。

● タイ

海外フィールドスタディ S 「生物資源と環境」

派遣：2015 年 8 月 3 日～9 月 7 日 参加学生：20 名

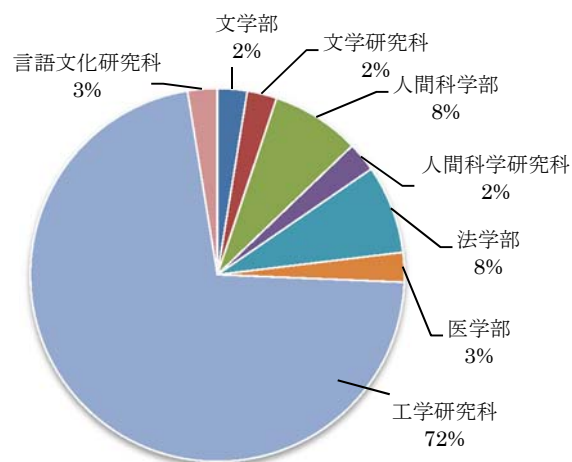
このプログラムは、GLOCOL と大阪大学生物工学国際交流センター（ICBiotech）が共同し、タイの複数の大学・教育機関（マヒドン大学／モンクット王工科大学トンブリ校／カセサート大学／チュラロンコン大学）と連携して構築した海外フィールドスタディ・プログラムである。「生物資源と環境」に関連するテーマについて学ぶ博士前期・後期課程の学生を対象として、フィールドワークとラボワークを含む実習を中心としたプログラムの中で、それぞれの実習の場における高度な技能を身につけ、日本と東南アジアの交流先国の間の関係性について理解することを目的として行った。今年度よりプログラム運営は ICBiotech が主導で行い、来年度は単位認定まですべてを ICBiotech で行う予定である。

2015 年度海外体験型教育プログラム 実施関連データ

海外フィールドスタディ参加者内訳

【全体】

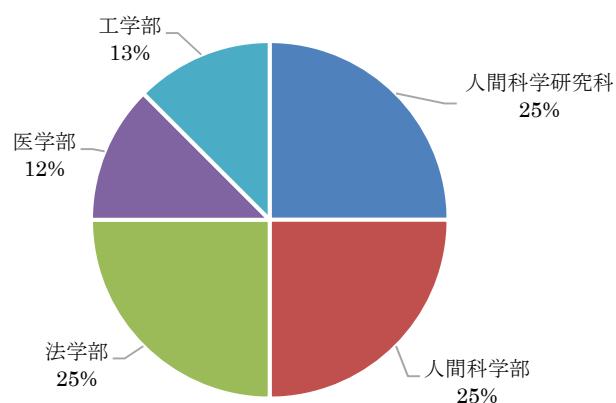
文学部	1
文学研究科	1
人間科学部	3
人間科学研究科	1
法学部	3
医学部	1
工学研究科	28
言語文化研究科	1
合計	39



海外インターンシップ参加者内訳

【全体（海外インターンシップ／海外プレ・インターンシップ）】

人間科学研究科	2
人間科学部	2
法学部	2
医学部	1
工学部	1
工学研究科	4
理学研究科	1
国際公共政策研究科	3
合計	16



助成財源内訳

※未来基金：大阪大学未来基金グローバル化推進事業「海外研修プログラム等助成」

【海外フィールドスタディ】

	派遣 人数	助成額*	助成額財源の内訳			派遣先
			GLOCOL 運営費交付金	JASSO 留学生 交流支援制度	未来基金	
授業科目 での実施	40	1,320,000	441,000	850,000	29,000	モンゴル、インドネシア、 バングラデシュ、オランダ、 タイ
授業科目外 での実施	0	0	0	0	0	
計	39	1,320,000	441,000	850,000	29,000	

* 「生物資源と環境」(タイ) 分を除く。

【海外インターンシップ】

	人数	助成額	助成額財源の内訳			派遣先
			GLOCOL 運営費交付金	JASSO 留学生 交流支援制度	未来 基金	
海外インターンシッ プ (1 ヶ月以上)	7	1,321,612	1,321,612	0	0	ドイツ、ポーランド、フラン ス、イタリア、ツバル、シン ガポール
海外プレ・インター ンシップ (1 ヶ月未 満)	9	1,177,081	1,177,081	0	0	インドネシア、ミャンマー／バ ングラデシュ、ボリビア、イタ リア、ケニア、イギリス、ネ パール、アメリカ
計	16	2,498,693	2,498,693	0	0	

3. GLOCOL 提供 大学院等高度副プログラム

今日、大学には、多様化する国際社会においてリーダーシップを発揮することのできるプロフェッショナルの育成が求められている。そうした人材の育成には、各学部、研究科での専門教育とともに、それらを異なる専門性と結びつけ、実践的な課題に即して深める座標軸が必要である。GLOCOL では、大阪大学の複数の研究科との連携により、これまで8つの高度副プログラムを開発することで、全学の大学院生、5、6年次の学部学生にこうした座標軸を提供してきた。

その歴史をひも解けば、2009年度から、「グローバル共生」「人間の安全保障・社会開発」「司法通訳翻訳論」の3つの高度副プログラムの試行を行い、2010年度には、これらの3つのプログラムを正式に実施するとともに、新たに「現代中国研究」が加わった。また、同年度より「人間の安全保障・社会開発」は、「人間の安全保障と開発」に名称を改めた。そして2011年度には、「医療通訳」「グローバル健康環境」「国連政策エキスパートの養成」の3つの高度副プログラム、さらに2013年度には、「東アジアの地域環境」が新たに始まった。

GLOCOL の高度副プログラムは、GLOCOL が独自に提供するグローバルコラボレーション (GLOCOL) 科目をコアとし、多数の部局との連携のもとに開発、実施されている (プログラムごとの連携部局については、p.28 を参照)。また GLOCOL 科

目は、必修科目や選択科目として、他の高度副プログラム、副専攻にも提供されている。

これまでにプログラムを受講申請した学生は、720 人を超え、修了した学生の数も 229 人（1 月現在）に達している。またプログラムの受講申請をしている学生の所属も、多様なものになっており、科目の配置だけでなく、学生の構成の面でも分野を横断した教育が実現されている（下記の表を参照）。

大学院等高度副プログラム申請者数及び修了者数（2015 年度までの累計）

*数字は 1 月末現在：成績確定していないため修了者数をゼロとしている。昨年度までの合計数は 229 人。

プログラム名	受講対象者	課程	文学	人間科学	法学	経済学	理学	医学系（医）	医学系（保）	歯学	薬学	工学	基礎工学	言語文化	国際公共政策	情報科学	生命機能	高等司法	連合小児	小計	合計	※27年度
グローバル共生	E5.6 M・D	B	[申請者] 修了者							1										1 0	(135) 41	(7) 2
		M	[申請者] 修了者	6 3	46 16	1 1	4 1	3 1	4 1	9 2		10 1	1 12	24 12	8 1	2 1	1 1			119 37		
		D	[申請者] 修了者	1 2	6 2		1 1		1 1					5 1			1 1			15 4		
		計	[申請者] 修了者																			
人間の安全保障と開発 (旧人間の安全保障・社会開発)	E5.6 M・D	M	[申請者] 修了者		45 30	2 3	6 3	2 2	7 3	7 3		4 1	17 1	3 1	6 5	18 1	4 1	1 1		122 46	(138) 50	-
		D	[申請者] 修了者		5 2		1 1	2 1	3 1	2 1		1 1		1 1						16 5		
		計	[申請者] 修了者																			
		計	[申請者] 修了者																			
司法通訳翻訳 (旧司法通訳翻訳論)	E5.6 M・D	M	[申請者] 修了者	4 2	34 17	25 7		1 1			1 1		1 1	46 18	6 1					119 46	(149) 56	(7) 2
		D	[申請者] 修了者	2 3	9 2			1 1						13 5	3 1					30 10		
		計	[申請者] 修了者																			
		計	[申請者] 修了者																			
現代中国研究	M・D	M	[申請者] 修了者	9 3	23 10	9 2	14 3	1 1		1 1		4 1	1 1	14 4	4 1					80 23	(87) 24	(13) 7
		D	[申請者] 修了者	1 1	1 1		1 1				1 1			3 1						7 1		
		計	[申請者] 修了者																			
		計	[申請者] 修了者																			
国連政策エキスパートの養成	M・D	M	[申請者] 修了者	2 1	12 1	1 3	7 3	3 1				6 1	1 1	2 1	29 11	2 2	2 1			67 19	(76) 21	(3) 2
		D	[申請者] 修了者				1 1	2 1				1 1		1 1						9 2		
		計	[申請者] 修了者																			
		計	[申請者] 修了者																			
グローバル健康環境	E5.6 M・D	M	[申請者] 修了者	1 7	16 7	1 1		1 12	15 15	27 2	6 3	4 3			6 1		2 1			79 39	(85) 40	(16) 7
		D	[申請者] 修了者					5 1						1 1						6 1		
		計	[申請者] 修了者																			
		計	[申請者] 修了者																			
医療通訳 ※平成24年度までの数値 (平成25年度からは他部署へ移管)	M・D	M	[申請者] 修了者	1 1	11 5		1 1	2 2	11 5				1 3	15 3						42 16	(53) 16	他部署
		D	[申請者] 修了者		3 1			2 1						4 1						11 0		
		計	[申請者] 修了者																			
		計	[申請者] 修了者																			
東アジアの地域環境	E5.6 M・D	M	[申請者] 修了者	1 2	3 2							4 2			1 1					9 2	(11) 2	(1) 0
		D	[申請者] 修了者				1 1					1 1								2 0		
		計	[申請者] 修了者																			
		計	[申請者] 修了者																			
合計		B	[申請者] 修了者					0 0		1 0	0 0									1 0	(734) 250	(47) 21
		M	[申請者] 修了者	24 9	190 86	39 9	33 10	7 1	32 18	55 25	0 0	11 3	45 7	8 1	107 38	72 17	8 2	6 1	0 0	637 227		
		D	[申請者] 修了者	4 0	24 7	2 2	5 0	2 0	14 1	3 1	0 0	1 2	3 0	0 8	28 1	9 0	0 1	0 0	0 0	96 23		
		計	[申請者] 修了者	28 9	214 93	41 11	38 10	9 1	46 19	58 26	1 0	12 3	48 9	8 1	135 46	81 18	8 2	7 2	0 0	734 250		

B・・・医学部、歯学部、薬学部(6年制課程)の5・6年次

M・・・博士前期課程、修士課程、生命機能研究科博士課程1・2年次、法科大学院の課程

D・・・博士後期課程、博士課程、生命機能研究科博士課程3年次以上

2015 年度 GLOCOL 大学院等高度副プログラムへの科目提供部局

	グローバル共生	人間の安全保障と開発	司法通訳翻訳	現代中国研究	グローバル健康環境	国連政策エキスパートの養成	東アジアの地域環境
人間科学研	19 (1)	10 (1)	2	8	1	4	1
人間科学部		5	1				
法学研	2 (2)		12	4			
法学部			13				
経済研		2		2			2
医学系研		2 (1)			7 (1)	1	
薬学研		2 (1)			4 (2)	1 (1)	2 (1)
薬学部							
工学研		2			2		1
言文研	8 (4)		18 (12)	2			
OSIPP	7 (2)	3	1	2	2	10 (2)	
CSCD	5	1				1	
全学教育		1					
計	41 (9)	28 (3)	47 (12)	18	16 (3)	17 (3)	6 (1)

* () は外数で 2015 年度不開講科目を示す。

大阪大学の特色ある教育プログラムの一つとして、GLOCOL の高度副プログラムは、一定の成果をあげている。2011 年度に提供を開始した「医療通訳」は、2013 年度に人間科学研究科、2014 年度には医学系研究科に移管され、さらに充実したプログラムとなっている。GLOCOL の存続が不可能となった場合、GLOCOL が育てた各プログラムは、順次、他部局への移管や、廃止の検討をせざるを得ない。たとえそうなったとしても、これまでに 7 つのプログラムを通して GLOCOL が全学に提供してきた機能が継承され、大阪大学にしかできないグローバル人材の育成に資するよう努めていきたいと考えている。

1) 「グローバル共生」

「グローバル共生」プログラムは市民や何らかの専門的知性や技能をもった人たちが、社会という現場で立場を超えて協働し、グローバル共生社会のデザインを描くための理論と実践方法について学ぶプログラムである。参加型・対話型・現場でのトレーニング型 (OJT) などの先進的な教育手法を通して、対話と協働の重要性について、身体と感覚を働かせながら学ぶことを主眼としている。高邁な理念や理想の学習だけでなく、現実の行動原理に結びつき、具体的な成果を生むための一歩を踏み出す学生を後押しするのが本プログラムの目的である。

2009 年に設置された本プログラム (初年度は試行) では、必修のコア科目である「グローバルコラボレーションの理論と実践」が、現代社会を生きる上での心構えを考えさせる基礎的な科目として、多くの高度副プログラムの選択科目として採用され、GLOCOL の看板科目の一つとなっている。また「多言語共生社会演習」では、「やさしい日本語」の概念に関する基礎的な学習に加え、2012 年度からはより応用的、実践的側面を強化し、地方自治体の外国人向け「暮らしのガイド」の作成を想定した実習を行っている。さらに 2014 年度からは、非日本語母語話者による「やさしい日本語」を用いたコミュニケーションをも視野に入れ、演習の充実を図ってきた。

「グローバル共生実習演習」では、グローバル共生に関わる医療現場や保健現場、教育現場等におけるオンサイト教育を実施し、教育的な効果のみならず、実践的な面でも大きな成果をあげている。今年度は、5 研究科から 7 人の学生が、本プログラムの申請を行った。



本プログラムは、一大学の教育プログラムとしての段階から、大学を起点とした実践活動を展望する段階に達したと言える。今後は、本プログラムを Community Extension Research の一環として位置づけ、学部学生、大学院生に加え、本学の卒業生等の社会人との連携を図り、「市民としての社会的責任」という本プログラムがめざす方向性の浸透をすすめていきたい。

2) 「人間の安全保障と開発」

「人間の安全保障と開発」プログラムは、学生各々の専門知識を生かしながら、紛争や貧困、そしてそれらに付随するさまざまな問題の解決に、能動的に関わることでできる人材の育成を目的としている。開発や援助の舞台で求められる人材は、医療・保健、環境、土木や建築、エネルギー、法制度、教育など、多様であるが、各々の専門性に開発学の視点を加えることで、広い視野をもって問題を読み解き、解決に結びつけることができる能力を身につけることが本プログラムのねらいである。

本プログラムは、2科目の選択必修科目と、38の選択科目から構成され、8単位以上の修得を求めている。選択必修科目は、「Theory and Practice of Human Security and Development」と「特殊講義（紛争研究概論）」の2科目である。

選択科目は、課題別科目群、地域言語科目群、フィールド実践・研究推進・評価科目群に分けられる。課題別科目群（29科目）では、開発と人間の安全保障が幅の広いアプローチを必要とすることから、文系・理系から多くの選択科目を用意し、学生各々が専門性と興味にあう科目を履修できるようにした。

また、フィールドでの実践活動の手法を習得し、インターンシップやボランティアの経験のなかで使ってみることも重要であり、フィールド実践・研究推進・評価科目群では、このような内容のものを7科目用意した。

本プログラムのもう一つの特徴は、英語で提供されている（あるいは、履修可能な）科目だけでも、プログラムの要件を満たし、修了できるように組まれている点である。開発・援助の舞台に必要な英語の能力を伸ばすことができると同時に、留学生も履修しやすくなっており、授業もさまざまな学生が違った視点を提供することで、活発に意見交換ができるようになった。

本プログラムは、今年度より新規申請の受け付けを停止しているが、昨年度までの申請者である総登録者数は7研究科から15名となっている。

本プログラムを履修した学生からは、「自分の専門分野が、実際に地域や社会の中の問題とどのように関連しているかを考えるよい機会であった」といった理系の学生からの感想や、「さまざまな国からの留学生や研究科の人、異なったバックグラウンドをもつ人たちの意見を聞けて、たいへん刺激になった」という感想が寄せられた。

選択必修科目授業内容：

「Theory and Practice of Human Security and Development」は、開発・援助に携わっていくには、多くの場合、英語の能力が必要とされることに鑑み、すべての授業が英語で行われ、文献や課題等も英語でこなすことが求められた。本科目は、開発学の理論と開発援助のなかでの主要な課題（ジェンダー、参加型開発、環境、グッドガバナンスなど）について、講義とディスカッション、文献の購読や課題に取り組むことによって、理解を深めることを目的とした。

「特殊講義（紛争研究概論）」は、紛争分析、紛争解決、紛争後平和構築といった、紛争の各局面に関する研究の全体像を理解することを目的とした。紛争の研究は一つの体系的分野というよりも、政治学、歴史学、社会学、人類学、地域研究など複数のアプローチが学際的に行われている分野である分野の特性を理解し、同時に、国際社会のさまざまなアクター（国際機関・政府・市民社会等）が紛争の解決・予防に取り組んでいることも学んだ。



3) 「司法通訳翻訳」

グローバル化の時代にあつて、日本にも多くの外国人が来日・在住するようになっていいる。それに伴い、日本語を十分に解しない外国人が、刑事・民事・家事事件に関わるケースや、出入国管理や難民認定での手続などに臨む事案が格段に増えており、司法通訳翻訳の重要性が増している。

司法通訳翻訳とは、法廷での審理、警察による捜査、弁護士による接見など、さまざまな司法ないしは行政機関や団体の実務場面で必要とされる通訳や翻訳の総称である。本プログラムは、法学部と外国学部を併せ持つ大阪大学としての強みを生かし、高度職業人としての司法通訳翻訳人の養成を主眼とするものである。特に、法律的手続、司法通訳翻訳人の役割や行動基準、コミュニケーションの3つに関する知識の習得や、スキルの向上の機会を提供し、また、司法通訳翻訳の在り方について考察する場を与えようとしたものである。

カリキュラムとしては、司法通訳翻訳実習に関する選択必修科目のほか、実務通訳翻訳の基礎理論に関する科目群 (A)、司法通訳翻訳の現場を知る科目群 (B)、司法通訳翻訳の背景を知る科目群 (C)、そして通訳スキルと言語運用能力の滋養に関する科目群 (D) の中から、各自の必要と関心に合わせて履修することができるようになっている。また、専門的な通訳翻訳の訓練を受ける機会は限られているため、本プログラムでは、プログラムの構成科目以外にも、受講生が法廷で実際の通訳業務から学ぶ機会を提供している。具体的には、大阪地方裁判所の協力を得て、要通訳事件の日程の案内を作成し、本プログラムを履修する学生に提供している。学生は、裁判傍聴と傍聴日誌の作成を通じて、司法通訳翻訳の現場に触れ、通訳翻訳のスキルを学ぶことができる。

受講生は、科目群 (A) (C) (D) をとおして、通訳翻訳一般、司法通訳翻訳の技能や知識を習得することができる。本プログラムの特徴の一つは、科目群 (B) の「法務行政論」、「警察活動の理論と実務」、「グローバル化時代の弁護実務」である。これらの科目は、法務省、検察庁、大阪府警、大阪弁護士会から講師を招聘して授業を行っている。また、大阪地方検察庁、法務総合研究所国際協力部、更生保護施設、大阪入国管理局関西国際空港支局、大阪刑務所、大阪少年鑑別所、大阪府警察本部などでの実地見学も行っている。これらの施設訪問はその前後の教室での講義（知識）を補強する意義があり、受講生全体に高く評価されている。また、上記の科目は、法学部の特別講義科目として学部生も履修できるようになっており、将来の法曹ないしは国家・地方公務員を目指すものも含めて、多くの学部生（主として法学部3、4回生）に実務家から学ぶ貴重な機会を提供してきた。

例年、受講生はバラエティに富んでおり、さまざまな研究科所属の大学院生がいる。本プログラムの履修をとおして、裁判所、検察庁、警察本部などに通訳人として登録できた者もいる。このことは、本プログラムが、学生の実践への関心および社会的要請に応えるものであることを裏付けている。



4) 「現代中国研究」

1990年代以降の中国市場の突出した存在感は、中国社会の変容のみならず、中国をとりまく東・東南アジアの政治的、経済的、文化的環境を大きく変容させている。こうした中国と中国をとりまく国際社会の変化を正しく理解するためには、中国近現代史や国際政治、経済学など複数の視点の獲得と、中国や台湾との国際的な学術交流ネットワークを通じた現象理解が不可欠である。高度副プログラム「現代中国研究」は、「中国」に関わるさまざまな学問領域を中国近現代史のコンテクストのなかに位置づけるとともに、領域間の多角的な対話とネットワークを生み出す契機を提供することをめざしている。

本プログラムは、オムニバス講義「現代中国研究」（法学研究科・提供）および「中国文化コロキウム」の二つのコア科目によって構成されている。

オムニバス講義「現代中国研究」では、【第1部】20世紀中国の射程と【第2部】21世紀の中国と東アジアの2部構成となっており、第1部では、20世紀に至る中国と東アジアの歴史を複眼的な視点から説き起こす。また第2部では、21世紀の中国をとりまく課題を、東アジア地域が共有する課題



としてとらえ、文系的な視点のみならず、自然科学的な視点も交えつつ議論してきた (<http://www.law.osaka-u.ac.jp/c-forum/box4/kogi.htm> 参照)。

一方、もう一つのコア科目である中国文化コロキウムでは、「政治文化システム」「中国と東アジアの近代」「華僑華人と『少数民族』」をテーマに、東アジアの政治空間の現状と歴史的な生成過程に関するつきつめたディスカッションを実施してきた。

高度副プログラム「現代中国研究」は、現代中国と東アジアに関する旧大阪外国語大学と旧大阪大学の知的リソースが結実することで生み出された。こうしたリソースの結実に、プラットフォームとして GLOCOL が果たした役割は小さくない。旧大阪外国語大学と旧大阪大学が統合し、新たな大阪大学が誕生した翌年の 2008 年、GLOCOL では、共同研究プロジェクト「現代中国学の新たなプラットフォーム」を発足させ、2009 年には、第 3 回「現代<中国>の社会変容と東アジアの新環境」の開催をサポートした。2013 年、国際セミナーは第 7 回を数え、高度副プログラム「現代中国研究」の参加教員を研究組織とする「21 世紀課題群と中国」が、未来研究イニシアティブに採択された。

GLOCOL は、高度副プログラム等の教育プログラムや Community Extension Research 等の実践的枠組みを用意することで、学内の様々な教員が参加し得る共同研究を生み出すプラットフォームとして機能している。しかし、こうした共同研究をもとに、真に学際融合的な知を生み出すプラットフォームとなり得るかは、大学全体にとっての今後の課題でもある。

なお、今年度は、5 研究科から 13 人の学生が本プログラムの申請を行った。

5) 「グローバル健康環境」

本プログラムの詳細については、pp. 13-14 を参照。



6) 「国連政策エキスパートの養成」

本プログラムの詳細については、pp. 14-15 を参照。



7) 「東アジアの地域環境」

2013 年度から提供している本プログラムは、ローカルとグローバルの 2 つの視点から東アジアの地域環境を捉える方法論を学び、実践を通じて知識を検証し、そして最終的には自分の認識、価値観を再検討する、再構築することを目標にする。

東アジア地域は、世界経済の“成長センター”と言われ、世界経済を牽引していると同時に、それ自体が巨大な市場を形成しつつある。しかしながら、その一方で、東アジアが抱える環境問題は深刻化、複雑化、そして多様化してきている。そして、東アジア地域と世界、地域内の関係は、依存と協力、対立と衝突という相反するメカニズムによって、流動化と複雑化を深めている。

本プログラムでは、地域環境をキーワードに東アジアの地域環境と社会および地域環境と社会の形成との関係を俯瞰的・構造的に理解する。また、地域内で抱える様々な環境問題を地域研究及び学際的な研究によって示された多様で具体的な事例を通じて学び、地域環境の特徴、特質が近代化という理念、プロセスとの因果関係を把握することを目指す。さらに、現地調査、地域の人々との交流、学生同士、学生と教員との討論などを通じて、より現実に近い形で問題、課題を把握し、実践を通じて環境問題を解決する可能性と方法を習得する。



4. 「グローバルコラボレーション科目」と高度教養プログラム「知のジムナスティックス」

GLOCOL では、高度な専門性と、専門性を超えた人的ネットワークのなかで専門性を発揮し得る力を兼ね備え、地球規模の諸課題について現場の視点に立って取り組むことのできるグローバル人材を育てるために、グローバルコラボレーション科目を全学の学部生、大学院生に提供してきた。



私たちが知の最前線にたどりつき、将来、そうした知を生み出すためには、段階をひとつひとつ踏んで学習を進めることが、たいへん重要である。グローバルコラボレーション科目では、理論から実践へ、①理論と方法論、②地域の多様性に関する知識、③現場で学ぶ視点の涵養、④実践による多角的な学び、の4つの段階を用意し、私たちの生活世界の実践にむすびついた知の最前線へと受講者を導く。

もちろん、知の最前線への接近の仕方は、いくつもの仕方があるが、GLOCOL では、全学教育推進機構と連携をとりつつ、一部の科目を教養教育的な「知のジムナスティックス」として提供しながらも、リベラル・アーツの発想とは多少距離を置き、現象の個性に充分配慮した実践的な課題解決への道を探ろうとしてきた。

今後は、コミュニティと学習者の双方において学びを生み出す Collaborative Learning や Social Learning の発想を取り入れていくことで、大学の枠組みを越え、研究と教育の距離をよりいっそう近づける努力を重ねていきたいと考えている。

グローバルコラボレーションセンター科目提供一覧（「知のジムナスティックス」プログラムの一部を^(*)）

第1 科目群：国際問題と多文化共生社会の基礎理論

Theory and Practice of Human Security and Development^(*)、グローバル健康環境、開発援助における評価の理論と実践、難民問題から世界を見る、開発の政治経済学、Gender and Development、グローバルコラボレーションの理論と実践^(*)、グローバル共生実践演習、多言語共生社会演習^(*)、グローバルコラボレーション言語Ⅰ、グローバルコラボレーション言語Ⅱ、司法通訳翻訳実践演習、公益通訳翻訳論演習Ⅰ、公益通訳翻訳論演習Ⅱ、通訳翻訳学特論A、通訳翻訳学特論B、通訳翻訳演習（英語）、通訳翻訳演習（韓国・朝鮮語）、通訳翻訳演習（中国語）

第2 科目群：地域の多様性を読み解く

中国文化コロキウム^(*)、東アジアの環境の現状と未来、東南アジア社会文化ケーススタディ A、東南アジア社会文化ケーススタディ B、オセアニアのグローバリゼーション A、オセアニアのグローバリゼーション B

第3 科目群：現場で学ぶ視点の涵養

フィールドワークの方法Ⅰ、フィールドワークの方法Ⅱ^(*)、トランスカルチュラル・スタディⅠ、アカデミック・スキルズ、現代ジャーナリズム論、国連政策エキスパート・キャリア形成論^(*)、リサーチ・プロポーザル作成演習、エスノグラフィを読む、エスノグラフィを書く、環境問題への回路Ⅰ、環境問題への回路Ⅱ、環境問題への回路Ⅱ実践演習、環境問題への回路Ⅲ、Food Security, Globalization and Sustainability、フィールドワークと開発、マイノリティとグローバリゼーション、Global Competency and Internship Abroad、法と共生社会実践演習Ⅰ、法と共生社会実践演習Ⅱ

第4 科目群：実践による多角的な学び

海外フィールドスタディ A^(*)、海外フィールドスタディ B^(*)、海外フィールドスタディ S、海外インターンシップⅠ^(*)、海外インターンシップⅡ (A)^(*)、海外インターンシップⅡ (B)^(*)

グローバルコラボレーション科目の中には、授業の一環として、以下のように一般公開したセミナーがあった。

● セミナー・シリーズ：グローバル化時代の法と社会

第3回 法整備支援とは何か

【講演者】

佐藤直史（JICA シニアアドバイザー、弁護士）

【開催日・場所】

2015年5月22日、豊中総合学館講義室L4（豊中キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

JICA は、「法の支配」を浸透させ、ガバナンスの改善に資することを目指して、開発途上国・新興国に対する法整備支援を行ってきた。このセミナーでは、法整備支援の概要について説明し、法整備支援における法文化をめぐる諸問題について、先進国の法文化と地域固有の法文化の間には、どのような摩擦が生じ、法整備支援において、望ましい地域固有の法文化との関わり方の問題などについて、具体的な事例を交えて検討した。

【講師紹介】

国際協力機構（JICA）シニアアドバイザー、弁護士（牛島総合法律事務所）。都内の渉外法律事務所においてビジネス法務を中心とする法律実務に従事した後、ロンドン大学 School of Oriental and African Studies 法学修士課程（LL.M. in Law and Development）を経て、ベトナム法整備支援プロジェクト・フェーズⅢに長期専門家として参画。同専門家の任期が終了した後、JICA 初の法整備支援分野のシニアアドバイザーに着任。JICA がアジア・アフリカ諸国で行う法整備支援の企画・立案、実施、モニタリング、評価等を担当するほか、法整備支援の調査・研究、国内外の会議への参加、法整備支援の理解促進、「JICA 法整備支援能力強化研修」等後進の育成等に従事。日本弁護士連合会国際交流委員会幹事。中央大学法科大学院講師（兼任）。法整備支援関係の主な著作に、「開発途上国の『法整備』に対する開発の視点からのアプローチ」（『法律家の国際協力』34 - 63 ページ・日本評論社・2012 年）など。

【備考】

主催：GLOCOL

※法学部・法学研究科が開講する「法と開発」の授業を一般公開した。



● GLOCOL セミナー（124）

みんなでジャーナリズムする

【講演者】

中尾卓司（毎日新聞社会部編集委員）

【開催日・場所】

2015年7月2日、カルチュ・ミュルチラング（豊中キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

「現代ジャーナリズム論」の教室では、「夢を語ろう」と話し合い、「対話の場」を重ねている。戦後 70 年、大阪都構想、集団的自衛権と安保法制、共生社会、18 歳選挙権など、国際社会との関係を見つめ、この社会が直面するテーマを取り上げて考えた。夢を実現するには、越えてなくてはならない「溝」があるかもしれないが、立場の異なる人とも対話を深めて、学ぶ意味を見出し、将来に向けての「夢」と大学における「学び」の関係についても議論した。

また、学部・専攻も文化や背景も年齢層も異なる幅広い参加者からは、「立場や意見が違っても、おもしろい」「本音を語り合うことで自分の感じ方のレパートリーが増えた」「話すことってこんなに楽しかったんや」といった感想が寄せられた。



【講師紹介】

1990 年 毎日新聞社入社。社会部、外信部、ウィーン特派員、おおさか支局長を経て、毎日新聞社会部編集委員。大阪大学グローバルコラボレーションセンター「現代ジャーナリズム論」非常勤講師。

【備考】

主催：GLOCOL

※「現代ジャーナリズム論」の授業を一般公開した。



● GLOCOL セミナー (125)

人類学的な営為を行う人類学者ではない人びとを対象とした場合のエスノグラフィーのあり方

【講演者】

岩谷洋史（立命館大学理工学部・非常勤講師／国立民族学博物館・外来研究員）

【開催日・場所】

2015 年 7 月 4 日、STUDIO（豊中キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

フィールドで出会う人びとは、時として、調査者である人類学者と一見すると、同じような知的な営みを行っている。自らが属する「文化」「コミュニティ」「制度」「構造」などなどについて分析をしつつ、それらに関連する概念をもとに、日常的な実践を行う。その実践は時として、エスノグラフィーのプロセスである場合もある。このような実践を行う人びとがいるフィールドに調査者が参与する場合、協同的に新たな知を創造する場合もある。逆に協同によってこそ調査者のエスノグラフィーが実現される場合もある。フィールドの人びとは単なるインフォーマントではない。本発表では、発表者の現代日本社会における仕事場（酒造メーカー）でのフィールド体験をもとにして、エスノグラフィーの記述のあり方について考えてみた。

【講師紹介】

京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程単位取得退学。現在、立命館大学理工学部非常勤講師／国立民族学博物館・外来研究員。これまで、主に、日本における酒造業を対象にして、現場で働く人々の技能の学習についての人類学的な研究に取り組んできた。近年、文化人類学の方法論にも関心を広め、研究活動に取り組んでいる。

【備考】

主催：GLOCOL

※「エスノグラフィを書く」の授業を一般公開した。



● セミナー・シリーズ：グローバル化時代の法と社会

第4回 International Protection of Refugees: Global Trends of Displacement and Refugee Governance

【講演者】

Mr. Furio De Angelis (UNHCR Representative in Canada)

【開催日・場所】

2015年7月9日、豊中総合学館講義室 L4 (豊中キャンパス)

【言語】

英語 (通訳なし)

【概要】

Special Seminar for World Refugee Day

On December 4, 2000, the United Nations General Assembly adopted Resolution 55/76, noting that 2001 marked the 50th anniversary of the 1951 Convention relating to the Status of Refugees. From 2001, June 20th would be celebrated as World Refugee Day. World Refugee Day brings you an opportunity to learn and understand about refugees.

The Global Collaboration Center (GLOCOL) and Graduate School of Law, Osaka University has begun a new course entitled "Legal Service in Multicultural Society" this year. This special seminar provides you a chance to understand refugee issues.

Mr. Furio De Angelis, UNHCR Representative in Canada will speak about "International Protection of Refugees: Global Trends of Displacement and Refugee Governance".

【講師紹介】

Furio De Angelis studied International Relations and International Law at the Political Science Faculty of the University of Rome, Italy, where he also obtained a post-University Diploma in European studies. Before joining the UNHCR, Mr. De Angelis was active in the field of international youth exchange and intercultural learning.

In 1987, Mr. De Angelis joined the UNHCR and his work has taken him to various refugee operations all over the globe and to countries such as Afghanistan, Croatia, Pakistan, Turkey, Kenya, Ukraine and Sudan. His work positions have been in various capacities including as a field officer, protection officer, senior resettlement officer and Deputy Representative. Currently Mr. De Angelis is the UNHCR Country Representative in Canada based out of Ottawa.

【備考】

主催：GLOCOL

※「世界難民の日」を記念して「法と共生社会実践演習Ⅰ」の授業を一般公開した。

● GLOCOL セミナー (127) / FIELDO グローバル・エキスパート連続講座 (27)
国づくりは人づくり グローバルヘルス分野で出来ること

2015年7月16日、医学部保健学科第3講義室 (吹田キャンパス)

※「グローバル健康環境」の授業の一環として行われた。

(詳細は p.17)

● GLOCOL セミナー (128) / FIELDO グローバル・エキスパート連続講座 (28)
国際刑事裁判所の重要性と可能性 国際司法におけるキャリア形成

2015年7月23日、医学部保健学科第3講義室 (吹田キャンパス)

※「法と共生社会実践演習Ⅰ」の授業を公開講座とした。

(詳細は p.18)

● セミナー・シリーズ：グローバル化時代の法と社会
第5回 検事の法整備支援：ラオス長期専門家としての経験から

【講演者】

伊藤浩之検事（大阪地方検察庁）

【開催日・場所】

2015年7月31日、豊中総合学館 501 講義室（豊中キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

大阪地方検察庁の伊藤浩之検事に、長期専門家として3年間ラオスの法律人材育成強化プロジェクトへ派遣された経験を通して見る法整備支援や、現検事として、法整備支援の経験がいかに役立っているのかについてお話いただいた。

【講師紹介】

2000年検事任官。以降、東京、神戸、奈良、大阪、名古屋、津の各地検に勤務。2010年4月から法務省法務総合研究所国際協力部教官。2011年7月から2014年7月までJICA ラオス法整備支援長期専門家としてラオス人民民主共和国へJICA 法律人材育成強化プロジェクト派遣。2014年7月から大阪地方検察庁・検事。以下の執筆等がある。

- ・「ラオス改正刑事訴訟法の概要」『ICD News』第61号 2014年12月号
(<http://www.moj.go.jp/content/001141361.pdf>)
- ・「法制度整備支援の海外現場からたかがチャート、されどチャート ～ラオスで画期的なチャートを作ろう！～」『法務省だより あかれんが』第39号、2012年4月 (<http://www.moj.go.jp/KANBOU/KOHOSHI/no38/two.html>)
- ・「隣国から学ぼう！～ベトナム法・司法制度改革支援プロジェクトとラオス法律人材育成強化プロジェクトの協力～」『ICD News』第55号 2013年6月号 (<http://www.moj.go.jp/content/000112965.pdf>)

【備考】

主催：GLOCOL

※「法と開発」の授業を一般公開した。



● GLOCOL セミナー (135)
モンゴルから一点突破で貧困の解消に挑む12年

【講演者】

照屋朋子（NGO ユイマール代表）

【開催日・場所】

2015年12月22日、STUDIO（豊中キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

照屋氏は高校時代に一枚の写真を見たことがきっかけで、モンゴルのマンホールチルドレンを救済するためのNGOを立ち上げた。現場で直面した困難や葛藤をどのように乗り越えながら現場での活動を進めていったかを語っていただいた。

【講師紹介】

1984年生まれ、沖縄県那覇市出身。早稲田大学法学部、上智大学法科大学院卒業。法務博士。沖縄尚学高等学校在学中に、モンゴルのマンホールチルドレンの写真を見た事がきっかけでボランティアクラブに入部。高校3年間ボランティア活動に熱中する中で、将来は国際協力の道に進もうと考えるようになる。早稲田大学法学部国際関係コースに入学後、



ALSA (The Asian Law Students Association) 早稲田支部の代表を2期務め、日本代表として、ワシントンD.C.、バンコク、イスタンブール等の国際会議に出席。会議だけでなく、現場を知り一点突破を成し遂げようとの思いから大学2年生の夏に初めてモンゴルへ行き、孤児院「太陽の子ども達」と出会う。以来、在学中にアルバイトで資金をため、5回単身モンゴルへ行き、孤児院やマンホールの子も達と交流を深める。上智大学法科大学院在学中の2007年、孤児院「太陽の子ども達」より支援要請を受け、NGO ユイマール設立。モンゴルへの渡航は30回を越え、通算4年間をモンゴルの孤児院で過ごす。2011年、世界経済フォーラム(ダボス会議)が選出する若手リーダー Global Shapers 30 人に選出。2015年、世界の若手リーダー50人に選ばれ、ダボス会議(世界経済フォーラム年次総会)に唯一の日本人若手リーダーとして参加。ダボス会議にて、仏オランド大統領との意見交換メンバーに選出され、モンゴル国エルベクドルジ大統領への社会福祉政策への助言も行う。

【備考】

主催：GLOCOL

※「トランスカルチュラル・スタディ I」の授業を一般公開した。



● GLOCOL セミナー (136)

閉鎖国家・北朝鮮を取材する ― 接近し、証拠を示す取材

【講演者】

石丸次郎 (ジャーナリスト、アジアプレス大阪事務所代表)

【開催日・場所】

2016年1月12日、ステューデント・コモンズ セミナー室1 (豊中キャンパス)

【言語】

日本語

【概要】

国際NGO「国境なき記者団」が発表した2015年の報道の自由度ランキングによると、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)は、180の国/地域の中で179位となっている(ちなみに日本は61位)。そのような国の実情を日本に、そして世界に伝えるために、講師の石丸次郎氏がどのように取材を進め、困難に直面しながらも真実を伝えようとしてきたのかをお話しいただいた。

【講師紹介】

ジャーナリスト、アジアプレス大阪事務所代表。1962年生まれ、大阪府出身。朝鮮世界の現場取材をライフワークとする。北朝鮮人ジャーナリスト育成に注力。

【備考】

主催：GLOCOL

※「トランスカルチュラル・スタディ I」の授業を一般公開した。



Ⅲ. 研究活動

1. 地球規模課題対応国際科学技術協力事業（SATREPS）

SATREPS（サトレップス）とは、日本医療研究開発機構（AMED*）と独立行政法人国際協力機構（JICA）が共同で実施している、地球規模課題（一国や一地域だけで解決することが困難であり、国際社会が共同で取り組むことが求められている環境・エネルギー問題、自然災害（防災）、感染症・食糧問題など）の課題解決のために日本と開発途上国の研究者が共同で研究を行う3～5年間の研究プログラムである。GLOCOLでは以下の研究課題を2012年度より実施している。

（*2015年より当プログラムである感染症分野が国立研究開発法人科学技術振興機構 JST から、日本医療研究開発機構 AMED に移管）

研究課題名：「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」

相手国：ベトナム社会主義共和国

相手国参加機関：ベトナム国立栄養院、タイビン医科大学、ニャチャン・パスツール院、ホーチミン市公衆衛生医療院、ビンディエン卸売市場、カントー大学

実施年度：2012～2016年度

本研究のテーマである薬剤耐性菌の問題は、ローカルな特定の状況での薬剤の使用や食品の生産・流通・消費によって発生し、地域の人々の健康への脅威となっている一方、難治性の感染症の原因であると同時に抗生物質そのものの使用と開発全般にも関わる世界的に重要な課題となっている。また、ベトナムにおける食品の残留抗生物質と薬剤耐性菌の発生は、日本とベトナムの貿易関係の強化において、食物検疫の枠組みの中でも考えられなければならない問題である。GLOCOLは、グローバルな状況を見据えたローカルな研究、文理の枠を超えた多様な分野の協働、そして、高度な研究成果の実践への還元を目指しており、本研究テーマの広がり的重要性は GLOCOL の研究活動の趣旨に十分見合うものであることから、本研究課題を申請し、2011年度に採択されるにいった。

【研究代表者】

山本容正（GLOCOL 招へい教授・大阪府公衆衛生研究所所長）（研究統括、耐性菌の解析全般）

【研究参加者】

宇野公之（薬学研究科教授）（環境薬物解析）

平田収正（GLOCOL センター長・教授）（環境薬物解析）

原田和生（薬学研究科講師）（環境薬物解析）

朝野和典（医学系研究科教授）（感染症解析）

大橋一友（医学系研究科教授）（人材育成）

住村欣範（GLOCOL 准教授）（人類学的解析）

本庄かおり（GLOCOL 特任准教授）（公衆衛生解析）

李 俊遠（GLOCOL 招へい研究員）（水産物に関する人類学的解析）

高橋 章（徳島大学大学院医歯薬学研究部教授）（食品微生物）

下畑隆明（徳島大学大学院医歯薬学研究部助教）（食品微生物）

山本真由美（岐阜大学保健管理センター教授）（保健衛生解析）

大山卓昭（国立保健医療科学院主任研究官）（感染症学解析）

長谷 篤（大阪市立環境科学研究所研究員）（モニタリングマニュアル作成）

久米田裕子（大阪府立公衆衛生研究所課長）（研究統括、モニタリングマニュアル作成）

河合高生（大阪府立公衆衛生研究所主任研究員）（食品微生物解析）

神吉政史（大阪府立公衆衛生研究所主任研究員）（食品微生物解析）

河原隆二（大阪府立公衆衛生研究所主任研究員）（食品微生物解析）

起橋雅浩（大阪府立公衆衛生研究所主任研究員）（食品検査）

小西良昌（大阪府立公衆衛生研究所主任研究員）（残留抗菌剤検査）
 余野木伸哉（大阪府立公衆衛生研究所研究員）（食品微生物解析）
 陳内理生（大阪府立公衆衛生研究所研究員）（食品微生物解析）
 山口貴弘（大阪府立公衆衛生研究所研究員）（食品検査）
 内田耕太郎（大阪府立公衆衛生研究所研究員）（残留抗菌剤検査）
 浜端朋子（大阪府立公衆衛生研究所非常勤作業員）（食品微生物解析補助）
 山崎伸二（大阪府立大学生命科学研究科教授）（研究統括、マウスモデル作成）
 日根野谷 淳（大阪府立大学生命科学研究科助教）（影響因子解析）
 中山達哉（大阪府立大学生命科学研究科特認助教）（遺伝子解析）
 平井 到（琉球大学医学部保健学科教授）（遺伝子解析）
 上田宗平（琉球大学医学部保健学科産学官連携研究員）（食品微生物解析）
 Tran Thi My Duyen（薬学研究科 D2）（環境薬物解析）
 割鞘美苗（薬学研究科 M2）（環境薬物解析）
 浅山 恵（薬学部 B6）（環境薬物解析）
 山根諒子（武庫川女子大学 M2）（食品微生物解析）
 立川なお（GLOCOL 非常勤職員）（人類学的解析補助）
 若林真美（医学系研究科・RA）（人類学的解析補助）
 *事務担当：大前 舞（GLOCOL 非常勤職員）

【研究の目的】

近年、世界を震撼させているスーパー（薬剤）耐性菌の出現は難治性の感染症を引き起こし、その背景には医療に限らず、畜産や水産における抗菌剤の濫用が指摘されている。さらに、これらスーパー耐性菌の国境を越えた拡散は地球規模での対応を迫っている。特にベトナムでは、住民の耐性菌保菌率が著しく増加しており、その発生や蔓延に関与する諸因子の調査研究は喫緊の課題となっている。本研究では、薬剤耐性細菌発生機構の解析やその蔓延に関与する抗菌剤や関連諸要因を微生物学的、薬物学的、さらには当該国の社会・経済的背景を基にした人類学・開発学的視点より研究解明し、これを基盤とした耐性菌モニタリングシステムの構築を行う。

また、研究課題においては、当該テーマに関する研究とモニタリングシステムの開発・運営を持続的に行うために、高度な研究能力と専門性を備えた人材を育成するための研修も実施する。

【2015 年度の実施概要】

プロジェクトは4年目に入り、来年2016年度の終了へ向けて、最終段階の研究の実施と成果の取りまとめステージに入っている。特にプロジェクトは、将来の社会実装につなげるため各研究成果の複合的な分析をしつつ、ベトナム保健省への提言を含むプロジェクト包括報告書を作成し始めた。包括報告書の構成は、これまで解明してきた薬剤耐性菌に係る科学的な裏付けのパート、社会実装のツールと言える薬剤耐性菌と残留抗菌性物質を食品流通上で検出するモニタリング・システムモデルのパートから成り、ベトナム保健省が今後どのように薬剤耐性菌対策をしていけば良いかということについての提言を含む予定である。プロジェクトは、微生物学 WG、薬学 WG、人類学 WG と人材育成 WG の専門ワーキング・グループに分かれ、ベトナム5地域（ハノイ、タイビン、ニャチャン、ホーチミン、カントー）で活動してきた。微生物学 WG は、薬剤耐性菌のうち、特定の抗菌性物質が効かない ESBL 産生菌をターゲット菌とし、食品中、健常人および病院で ESBL 産生菌がどれだけ拡散しているか分布状況を調査し、さらに分離した ESBL 産生菌株が持っている薬剤耐性遺伝子を追跡し、伝播機構を調査している。また、実験動物（マウス）を用いた ESBL 産生菌がマウスの腸管に定着する因子解析実験を日本国内で進めており、特定の抗菌性物質投与が ESBL 産生菌の腸管定着に影響を与えていることが実験動物レベルで解明されつつある。薬学 WG は、抗菌性物質が食品・環境中にどれだけ残留しているか検査する手法を開発しており、対象地域でどのような抗菌性物質が残留しているか、傾向を明らかにしつつある。人類学 WG は、水産・畜産生産現場や農村地域住民が使用する抗菌性物質の実態を調査し、処方箋なしで抗菌性物質が利用されている傾向を調査してきた。人類学 WG は2015年度から介入活動を開始し、小規模な村落を対象に、疫学的なリスク要因分析に基づき、薬剤耐性菌の蔓延を抑制するための啓発、処方箋に従い抗菌性物質を利用するための啓発活動、住民の公衆衛生意識を改善する活動等を実施中である。介入活動は疫学的に評価する予定であり、地域住民に対するベースライン意識調査結果や、微生物学 WG による耐性菌保率データなど、介入活動前後のデータを比較し、効果を評価する予定である。食品流通上の薬剤耐性菌および残留抗菌性物質モニタリング・システムモデルは、2014 年度にプロジェクトが開発した解析マニュアルに基づき、ハノイ・ニャチャン・ホーチミン地区で定期的にモニタリング活動が行われている。モニ

タリング結果は、ベトナム保健省・食品安全管理局（VFA）の様式に準拠した定型フォーマットで蓄積されている。人材育成 WG は、本邦での長期・短期研修と現地研修を通じて計画どおり進捗しており、2015 年 9 月にベトナム人微生物学者が博士号学位を日本の大学で取得した。

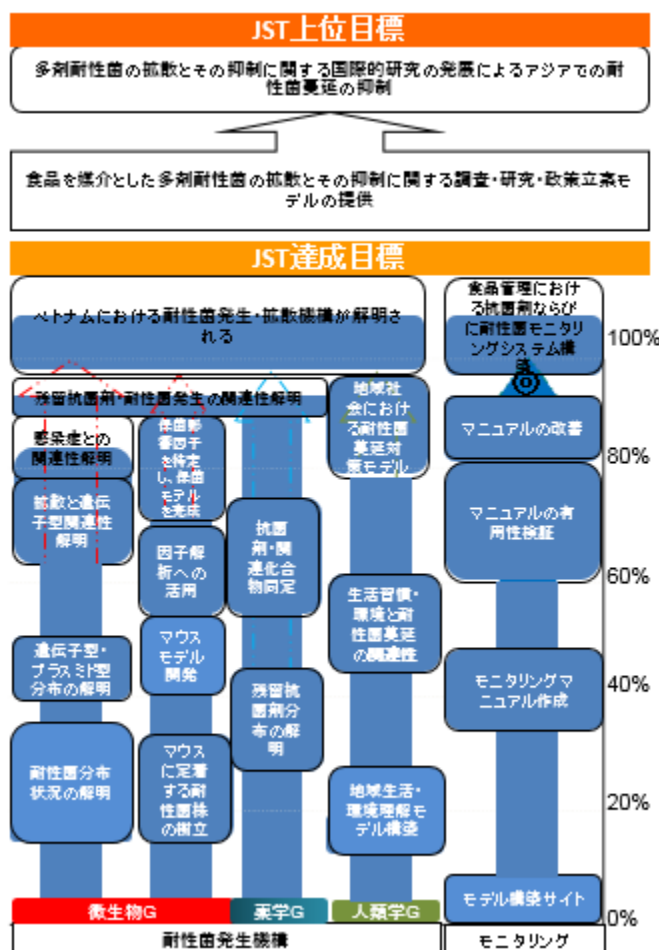
2015 年 4 月 7 日には、南フロリダ大学から BOO H. Kwa 教授を招き、東南アジアの公衆衛生についての議論もおこなった（詳細は p.41）。7 月 14 日にはベトナムでの担当機関や保健省担当の方々と研究成果をもとに、今後のベトナムの食と健康の安全の確保のための取り組みのあり方についてセミナー講演をおこなった（詳細は pp.41-42）。11 月 19 日には GLOCOL 連続セミナー（1）の共催として参加した（詳細は p.49）。

成果目標シート

研究課題名	薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発
代表研究者氏名 (所属機関)	山本啓正 国立大学法人 大阪大学グローバルコラボレーションセンター
研究期間	平成23年6月1日～平成29年3月31日
相手国名	ベトナム
主要相手国研究機関	国立栄養院

付随的成果

日本政府、社会、産業への貢献	・日本社会における耐性菌保有量の減少 ・耐性菌を指標とした新たな食品衛生管理による安全・安心の強化
科学技術の発展	・耐性遺伝子伝播解析手法の開発
知財の獲得、国際標準化の推進、生物資源へのアクセス等	・分離耐性菌株のデータベース化
世界で活躍できる日本人材の育成	・国際研究業務調整実務実績を有する日本人材の育成 ・途上国で活躍できる若手研究者の育成
技術及び人的ネットワークの構築	・ベトナム国立公衆衛生分野研究機関との技術及び人的ネットワークの構築
成果物(提言書、論文、プログラム、マニュアル、データなど)	・レビュー付国際誌での論文発表 ・食品生産販売分野を対象とした耐性菌モニタリングマニュアルの作成



● GLOCOL セミナー (123)

**Public Health Transition in Modernizing SE Asia:
Lessons from the Malaysian Experience**

【講演者】

Boo H. Kwa, Ph.D. (Associate Dean for International Programs, Professor of Global Health, College of Public Health, University of South Florida, USA)

【開催日・場所】

2015年4月7日、理工学図書館2階会議室（吹田キャンパス）

【言語】

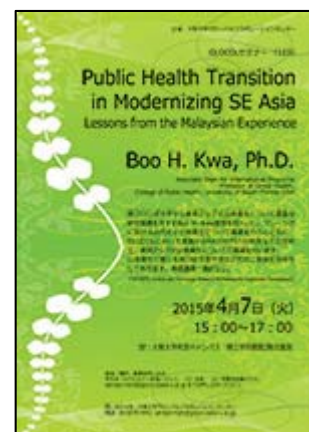
英語（通訳なし）

【概要】

南フロリダ大学から東南アジアの公衆衛生について豊富な研究実績を有する Boo H. Kwa 教授を招へいし、マレーシアにおける近代化と公衆衛生についてご講演をいただくとともに、GLOCOL において実施中の SATREPS の状況なども含めて、東南アジアの公衆衛生についての議論を行った。

【備考】

主催：GLOCOL



● GLOCOL セミナー (126)

ベトナムの食の安全を守る — 薬剤耐性菌モニタリングシステムの構築に向けて

【開催日・場所】

2015年7月14日、千里ライフサイエンスセンター6F 千里ルーム A
(豊中市新千里東町 1-4-2)

【言語】

英語（通訳なし）

【概要】

急速な近代化が進むベトナムにおいて、食の安全は火急の問題となっている。GLOCOL が取り組む食品管理における薬剤耐性菌の研究成果をもとに、今後のベトナムの食と健康の安全の確保のための取り組みのありかたについて、ベトナムの担当機関、および、保健省の担当者を交えて議論をおこなった。

プログラム

開会の辞

山本容正：プロジェクト代表者・大阪大学招へい教授・大阪府立公衆衛生研究所所長
モニタリングシステムの試行について

長谷 篤：大阪市立環境科学研究所研究員

ベトナムにおけるモニタリングの方法について

Nguyen Thi Ngoc Hue：国立ニャチャン・パスツール研究所
モニタリングの試行結果について

Nguyen Do Phuc：国立ホーチミン市公衆衛生研究所
ベトナムの食品管理におけるモニタリングの意義とデータの利用について

Bui Thi Mai Huong：ベトナム国立栄養院
質疑



日本と世界における広範囲な耐性菌サーベイランスの取り組み

渡邊治雄：国立感染症研究所名誉所員、公益財団法人黒住医学研究振興財団副理事長
家畜領域の耐性菌モニタリング

川西路子：農林水産省動物医薬品検査所主任研究官

総合討論：ベトナムにおける耐性菌モニタリングシステムの構築に向けて
山本容正（座長）

Le Danh Tuyen：国立栄養院院長

Vien Quang Mai：ニャチャン・パスツール研究所所長

Dang Van Chinh：ホーチミン市公衆衛生研究所所長他

ベトナム保健省からのコメント

Hoang Van Thanh：ベトナム保健省治療局副局長

閉会の辞

山本容正

【備考】

主催：SATREPS「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」
GLOCOL



2. 科学研究費補助金

科学研究費補助金は、人文・社会科学から自然科学までの全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる「学術研究」（研究者の自由な発想に基づく研究）を格段に発展させることを目的とする「競争的研究資金」であり、ピア・レビュー（専門分野の近い複数の研究者による審査）による審査を経て、独創的・先駆的な研究に対し助成されたものである。

GLOCOL 教員が代表者となり採択された研究課題と研究分担者となっている課題は以下のとおり。

【研究代表者】

- ・平田収正
「ベトナムの2大河川最下流域における毒性化学物質による食品汚染に関する調査研究」基盤研究（B・海外学術調査）
- ・大橋一友
「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」挑戦的萌芽研究
※2016年1月27、28日公開シンポジウム開催（詳細は pp.44-45）
- ・宮原 暁
「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」基盤研究（B・海外学術調査）
「東西交流史の新たな視覚：メキシコ史研究から見る東・東南アジアの文化変容」挑戦的萌芽研究
- ・住村欣範
「照葉樹林文化圏の近代化過程における食品の保存方法に関する複合的研究」挑戦的萌芽研究
- ・思沁夫
「トナカイ放牧と自然保全の持続可能な関係：エヴェンキ人のローカルナレッジの再評価」基盤研究（C）
- ・本庄かおり
「性別役割分業規範の健康影響とそのメカニズムに関する社会疫学研究」基盤研究（C）
- ・常田夕美子
「現代インドの村落・都市中間地帯における親密圏の再編：移動社会を支えるケア関係」基盤研究（C）
- ・大野光明
「沖縄の反基地運動と米軍黒人兵の連帯の力学：太平洋を横断するネットワークの視点から」若手研究（B）
- ・福田州平
「フィラデルフィア万博に注目した米中日国際文化関係の研究」挑戦的萌芽研究

【研究分担者】

- ・平田収正
「ニチニチソウアルカロイドを高効率に生産する光制御技術の探索と開発」基盤研究（C）（研究代表者：玉川大学 兼子敬子）
- ・住村欣範
「ベトナムの2大最下流域における毒性化学物質による食品汚染に関する調査研究」基盤研究（B・海外学術調査）
（研究代表者：平田収正）
「アジアの認知症高齢者の徘徊などの心理行動学的徴候と関連要因の国際疫学調査」基盤研究（B・海外学術調査）
（研究代表者：牧本清子）
- ・思沁夫
「照葉樹林文化圏の近代化過程における食品の保存方法に関する研究」挑戦的萌芽研究（研究代表者：住村欣範）
- ・本庄かおり
「社会環境から個人要因の認知症発症プロセスの解明に関する社会疫学研究」基盤研究（A）（研究代表者：磯 博康）
「オセアニア・南アジアの労働者・低所得者における生活習慣病の実態と社会的危険因子」基盤研究（A）（研究代表者：名古屋大学 青山温子）
「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」挑戦的萌芽研究（研究代表者：大橋一友）
「たばこ対策の健康影響および経済影響の包括的評価に関する研究」厚生労働科学研究費補助金（研究代表者：国立研究開発法人国立がん研究センター 片野田耕太）
- ・敦賀和外
「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」挑戦的萌芽研究（研究代表者：大橋一友）

・小峯茂嗣

「発展途上国の農業支援ものづくりを志向したフィールド教育の実施と教育効果の分析」挑戦的萌芽研究
(研究代表者：大村悦二)

・安藤由香里

「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」挑戦的萌芽研究（研究代表者：大橋一友）

・大野光明

「発展途上国の農業支援ものづくりを志向したフィールド教育の実施と教育効果の分析」挑戦的萌芽研究
(研究代表者：大村悦二)

● 公開シンポジウム

大学のグローバル化と学生海外渡航時のリスク管理 — 学生を守る・大学を守る

【開催日・場所】

2016年1月27・28日、東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター2F 多目的室2
(東京都港区芝浦3-3-6)

【言語】

日本語

【概要】

近年、大学教育におけるグローバル人材の育成が推進されており、学生の海外渡航プログラムが多数実施されていますが、そのリスク管理体制については担当者間で不安の声が多数聞かれています。GLOCOLでは、海外体験型教育企画オフィス（FIELD）にて、2010年度より海外体験型教育プログラムを実施しており、これまでに約400名の学生を海外に送り出してきた。またプログラム実施当初より、学生海外渡航時のリスク管理にも力を入れており、平成26年度には科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）を得て、全国の大学等を対象に大学における学生海外渡航時のリスク管理に関するアンケートを実施し、学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究を進めてきた。このシンポジウムでは、リスク管理に関するアンケートの分析報告を行うとともに、リスク管理アクションプラン作成のグループワークも取り入れながら、今後求められるより良い学生海外渡航時のリスク管理について考え、議論した。

登壇者：

大橋一友、敦賀和外、本庄かおり、安藤由香里、片山 歩（GLOCOL）

コメンテーター：

外務省領事局海外邦人安全課関係者
日本学生支援機構留学生事業部関係者 他

プログラム：

冒頭挨拶「学生海外渡航時のリスクとは — 研究の目的と阪大の取り組み」
「学生海外派遣の現状（派遣国、期間、形態）とリスク事例」
「リスク管理のための体制整備 — 現状と課題」（リスク管理に関するアンケート分析など）

質疑応答

「よりよいリスク管理体制を築くために — アクションプランの作成」（グループワーク）

質疑応答

【備考】

主催：GLOCOL

科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」（研究代表者：大橋一友）





3. その他外部資金

- 住村欣範准教授奨学金
 - ・ 上野製薬株式会社（ベトナムにおける食品安全衛生に関する調査研究のため）
- 思沁夫特任准教授奨学金
 - ・ 公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団（「環境事業助成」：モンゴル国オンギ川流域における柳林保護および越冬用飼料（草）の栽培に関する協力行動のため）
- JST 日本・アジア青少年サイエンス交流事業 さくらサイエンスプラン
 - ・ 受付番号：E20150227009（A. 科学技術交流活動コース） ベトナムの高校との交流

【概要】

ベトナムのレホンフォン英才高校とハノイ国家大学附属科学技術高校から、生徒8名、教員2名を2015年7月15日から23日の9日間招へいし、「食と水の健康環境」に関する日本の高度な技術とその応用について研修を実施した。大阪大学等で教員や先輩のベトナム人留学生から講義を受け、ベトナムと具体的な関係をもつ動物検疫所、イオンりんくう泉南、島津製作所創業記念館等を見学し、ベトナムの状況を踏まえた説明を受けた。プログラムの一部は、本プログラムの直後に同様のテーマでベトナムにて研修を行う予定になっていた兵庫県立兵庫高校（SGH指定校）と共同で実施し、最終日には同校で交流会とプログラムの総括を行った。



- ・ 受付番号：E20150227010（A. 科学技術交流活動コース） タイ トリアムウドム・スクサ高校との交流

【概要】

タイ・バンコクのトリアムウドム・スクサ高校から、生徒9名、教員1名を招へいし、バイオテクノロジーに関する日本の高度な技術とその応用について研修を実施した。2015年5月10日から17日の8日間の滞在期間中に、大阪大学のCBCMP（Chemistry-Biology Combined Major Program）コース、生物工学国際交流センター、未来医療センターを訪問し、各施設で担当者から説明を受けた。またサラヤ株式会社による講演会の聴講、リマテックホールディングス株式会社、花王和歌山工場の見学を通じ、当該テーマにかかる科学技術について学び、大阪教育大学附属高校平野校舎で、授業見学と交流会を行った。



4. 国際研究交流

1) 学術交流協定の推進

GLOCOLの教育、研究、実践のいずれの面においても、事業を展開するためには、海外の大学や機関と学術交流協定などの国際連携を確立することが望ましく、2011年度から本格的に活動を行ってきたFIELDの海外体験型教育プログラム（海外インターンシップ、海外フィールドスタディ）を安定的に推進するためにも、単に教育面での交流にとどまらない学術交流協定を締結することが必要となっていた。国内においては、日本財団学生ボランティアセンター、吹田市国際交流協会と協力についての文書を取りかわしている。海外ではパラオ保健省との締結を今年度に更新し、下記の8機関と協定をかわしている。

タイビン医科大学（一般協定）、ベトナム国立栄養院（一般協定）、カントー大学環境学部（一般協定）、カントー大学農学・応用生物学部（一般協定）、カントー大学水産学部（一般協定）、ミンダナオ州立大学イリガン工科校（一般協定）、パラオ保健省（一般協定）、国際移住機関：IOM（インターンシップ覚書）

2) 海外からの招へい研究員・受託研修員

・ 招へい研究員

李俊遠（2011年8月1日～2016年3月31日）
（国立慶北大学非常勤講師）

・ 海外客員教授

Nguyen Vo Chau Ngan（2014年6月1日～2016年3月31日）
（カントー大学環境天然資源学部環境技術専攻主任講師）

Bumochir Dulam（2014年6月1日～2016年3月31日）
（モンゴル国立大学教授）

于千千（2014年6月1日～2016年3月31日）
（雲南省普洱学院大学副学長・教授）

・外国人受託研修員

Dao Thi Van Khanh (2015 年 5 月 15 日～7 月 13 日)

(ニャチャン・パスツール研究所附属食品検査センター、副センター長)

Le Viet Ha (2015 年 6 月 15 日～11 月 14 日)

(タイビン医科大学、講師)

Ha Thi Tuong Van (2015 年 6 月 15 日～11 月 14 日)

(ベトナム国立栄養院附属食品微生物学・分子生物学研究所、研究員)

Trinh Hong Son (2015 年 6 月 15 日～8 月 15 日) (2015 年 11 月 15 日～11 月 21 日)

(ベトナム国立栄養院・栄養教育普及センター、センター長)

Le Danh Tuyen (2015 年 7 月 12 日～7 月 19 日)

(ベトナム国立栄養院、院長)

Vien Quang Mai (2015 年 7 月 12 日～7 月 19 日)

(ニャチャン・パスツール研究所、所長)

Dang Van Chinh (2015 年 7 月 12 日～7 月 19 日)

(ホーチミン市公衆衛生医療院、院長)

Bui Thi Mai Huong (2015 年 7 月 12 日～8 月 1 日) (2015 年 11 月 15 日～11 月 21 日)

(ベトナム国立栄養院附属食品微生物学・分子生物学研究所、副所長)

Nguyen Thi Ngoc Hue (2015 年 7 月 12 日～8 月 1 日)

(ニャチャン・パスツール研究所附属食品検査センター、センター長)

Nguyen Do Phuc (2015 年 7 月 12 日～8 月 1 日)

(ホーチミン市公衆衛生医療院附属南部食品安全検査所、副所長)

Le Hong Dung (2015 年 11 月 15 日～11 月 21 日)

(ベトナム国立栄養院食品化学課、課長)

5. GLOCOL FD セミナー・GLOCOL 連続セミナー

GLOCOL スタッフの研究、教育、実践支援の質向上および個々のスタッフの活動についての相互理解を深めるために、GLOCOL FD セミナーを実施している。2015 年度は 3 回実施した。第 1 回は大野特任助教と深井係長からハラスメントと情報セキュリティ・個人情報保護についての周知説明があった。全員参加できるように、テレビ会議システムを使用して吹田キャンパスの事務所とつながれた。第 2 回は GLOCOL 内だけでなく、他部局の教職員も対象として、学生海外派遣時のリスク管理について、グループワークおよび意見交換をおこなった。第 3 回は植林係長から研究不正防止についての周知徹底があった。

GLOCOL が設置されてから、今までどのようにグローバル化に向き合って成果を生み出してきたのか 4 回にわたって GLOCOL 連続セミナーをおこない、今までの成果や教訓から今後に向けた課題を共有した。このセミナーをまとめて GLOCOL ブックレット 18『大学とグローバル化 ― 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の経験から』を刊行した。

● GLOCOL FD セミナー第 1 回 2015 年 7 月 7 日 於：STUDIO (豊中キャンパス)

大野光明・深井 明「ハラスメントと情報セキュリティ・個人情報保護について」



● GLOCOL FD セミナー第2回 2015年7月30日 於：STUDIO（豊中キャンパス）

「全員参加型！ ケーススタディから考える学生海外派遣時のリスク管理」

2014年に実施したリスク管理シミュレーション（ロールプレイ）に引き続き、学生海外派遣時のリスク管理を考えるFDセミナーを行った。今回は、他部局の参加者とGLOCOL教職員と共に、リスク管理（予防・対策）についてグループワークおよび意見交換をおこなった。学生海外派遣時のリスク管理の注意点について安藤特任助教より情報提供を行い、その後、班ごとにケーススタディに取り組み、ディスカッションを行い、リスク管理を行ううえで重要なリスク分析の考え方も実践を通して学ぶことができた。

・内容

- ・リスク管理の注意点
- ・ケーススタディ
- ・リスク分析マトリックス
- ・まとめ



● GLOCOL FD セミナー第3回 2016年2月16日 於：本部棟 301 会議室（吹田キャンパス）

植林玉樹「研究の不正防止について」



● GLOCOL 連続セミナー

大学とグローバル化 — 大阪大学 GLOCOL の9年間の経験から

【開催日・場所】

第1回：2015年11月19日・コンベンションセンター1F 会議室1（吹田キャンパス）

第2回：2015年11月21日・ステューデント・コモンズ カルチェ・ミュルチラング（豊中キャンパス）

第3回：2015年12月4日・銀杏会館大会議室（吹田キャンパス）

第4回：2015年12月11日・ステューデント・コモンズ カルチェ・ミュルチラング（豊中キャンパス）

【言語】

日本語

【備考】

主催：GLOCOL



● GLOCOL 連続セミナー (1) / GLOCOL セミナー (131)

アジアの課題と大学の知

日時：2015 年 11 月 19 日

場所：コンベンションセンター1F 会議室 1 (吹田キャンパス)

共催：SATREPS「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」

概要：アジアが抱える諸課題に対して、大学の専門的知識や技術はどのように活用できるのか。また、どのようなプロセスや工夫によって、活用可能なものとなるのか。GLOCOL が大阪大学内外の機関とともにベトナム、モンゴル、バングラデシュで実施してきた研究・実践プロジェクトを通じて得られた成果や課題を共有した。

挨拶：平田收正 (センター長)

報告：住村欣範 (准教授)、思沁夫 (特任准教授)、小峯茂嗣 (特任助教)

コメンテーター：小西淳文 (JICA シニア課題アドバイザー)

仁井裕幸 (公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団専務理事)

星野俊也 (大阪大学副学長・理事)

司会：大野光明 (特任助教)



● GLOCOL 連続セミナー (2) / GLOCOL セミナー (132)

足もとの国際化と大学 — グローバル時代における社会学連携の成果と課題

日時：2015 年 11 月 21 日

場所：ステューデント・コモンズ カルチェ・ミュルチラング (豊中キャンパス)

概要：昨今、大学の社会貢献がますます問われ求められている。GLOCOL は「足もとの国際化」をキーワードに、身近にあるグローバル化と多文化共生の重要性について研究・教育・実践支援活動を行ってきた。これまでの成果を紹介し、大学の社会における役割の今後の展望も含めて、地域の NGO/NPO や行政の参加者とともに、地に足をつけたグローバルな視点で共生について考える機会とした。これまでの社会学連携活動および教育について、総括のための報告会で、関係者と成果や課題について議論した。

基調報告：吉富志津代 (特任准教授)

対談：橋口裕子 (吹田市国際交流協会) × 福田州平 (特任研究員)

Edward Sumoto (ミックスルーツ・ジャパン) × 吉富志津代 (特任准教授)

司会：常田夕美子 (特任准教授)



● GLOCOL 連続セミナー (3) / GLOCOL セミナー (133)
海外体験型教育プログラムのつくりかた
— GLOCOL・FIELDO の経験・教訓を共有

日時：2015 年 12 月 4 日

場所：銀杏会館大会議室（吹田キャンパス）

概要：大学が提供する学びの場は、キャンパス内だけでなく、その外、そして、海外へと広がっている。FIELDO は、設立から 5 年間で約 400 人の学生たちを海外に送り出してきた。このセミナーでは、海外体験型教育プログラム（フィールドスタディ、インターンシップ）の企画立案、学内体制づくり、受け入れ先との事前準備、リスク管理を含む実施時の留意点等について、FIELDO が培ったノウハウを学内外の教職員の方々に共有した。

報告者：敦賀和外（特任准教授）、本庄かおり（特任准教授）、

安藤由香里（特任助教）、片山歩（特任事務職員）

コメンテーター：和栗百恵（福岡女子大学准教授）

司会：敦賀和外（特任准教授）

プログラム：

1. 海外体験型教育とは？

目的と期待される成果

プログラムの形態と内容 — どのようなプログラムにするか？

2. 実施方法（教務・事務の側面から）

いつ準備するのか？ — 学内手続きと予算化

学生をどのように集めるのか？ — 募集と選抜

3. プログラム作成

受け入れ先とどのように調整するのか？ — 事前調査と調整

事前学習で何を教えるか？ — 現地情報とリスク管理

4. プログラム実施（教育・事務）

実習中は何に気を配るのか？ — 現地と留守番体制

実習後はどうするのか？ — 振り返りと事務手続き

5. 5 年間の教訓

6. コメンテーター講評

7. 質疑応答

※セミナー終了後、同会場にて名刺交換・意見交換の時間も設けた





● GLOCOL 連続セミナー（4） / GLOCOL セミナー（134）
グローバルに生きる！ はじまりは GLOCOL だった

日時：2015 年 12 月 11 日

場所：ステューデント・コモンズ カルチュ・ミューラング（豊中キャンパス）

概要：2007 年に GLOCOL が誕生し、多くの学生が GLOCOL の大学院等高度副プログラム、海外フィールドスタディ、海外インターンシップに参加した。学部や研究科の垣根を越えた GLOCOL での学びを経て、学生たちはどんな将来を描いたのだろうか。様々な分野で活躍する卒業生たちの生の声を聞き、大学が果たすべき役割について考え、議論した。

報告者：GLOCOL のプログラムに参加した阪大修了生。

- ・黒田篤槻（日本 Tata Consultancy Services 株式会社）「全部繋がっているんだと思います。」
- ・切川菜央（神鋼環境ソリューション株式会社 産業水処理事業部）「森の精霊が教えてくれたこと」
- ・林 若可奈（人間科学研究科卒業生）「本当は身近なグローバルライフ」
- ・若林真美（医学系研究科博士後期課程）「国際協力キャリアへの挑戦」

司会：思沁夫（特任准教授）、小峯茂嗣（特任助教）

挨拶：平田収正（センター長）



6. スタッフの研究活動（個人研究）

平田 収正（ひらた かずまさ）

-----センター長・教授

【学歴】京都薬科大学薬学部生物学科卒業（1982）、大阪大学薬学研究科応用薬学専攻修士課程修了（1984）、大阪大学薬学研究科応用薬学専攻博士課程修了（1987）【職歴】大阪大学薬学部文部技官（1987）、大阪大学薬学部助手（1987-1992）、文部省在外研究員（ドイツ・ミュンヘン大学）（1992-1993）、大阪大学薬学研究科環境生物薬学専攻助手（1993）、大阪大学薬学研究科環境生物薬学専攻助教授（1993-1998）、大阪大学薬学研究科生命情報環境科学専攻助教授（1998-2006）、大阪大学薬学研究科附属実践薬学教育センター教授・センター長（2006-2012）、大阪大学薬学研究科副研究科長（2008—1012）、大阪大学薬学研究科附属薬用植物園長（2013-）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター長（2014-）【学位】薬学博士（1987 大阪大学）【専攻・専門】応用環境生物学、グローバル健康環境

【2015 年度の活動報告】

◇出版業績

- 2016 「ブックレット刊行にあたって」、GLOCOL ブックレット 18『大学とグローバル化 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の経験から』大阪大学グローバルコラボレーションセンター、pp.5-8.
- 2015 Yamaguchi, T., Okihashi, M., Harada, K., Uchida, K., Konishi, Y., Kajimura, K., Hirata, K., Yamamoto, Y. 'Rapid and Easy Multiresidue Method for the Analysis of Antibiotic in Meats by Ultrahigh-Performance Liquid Chromatography-Tandem Mass Spectrometry' *J. Agric. Food Chem.*, 2015, **63**, 5133-5140.
- 2015 Yamaguchi, T., Okihashi, M., Harada, K., Konishi, Y., Uchida, K., Do, M., Bui, H., Nguyen, T., Nguyen, P., Chau, V., Dao, K., Nguyen, H., Kajimura, K., Kumeda, Y., Bui, C., Vien, M., Le, N., Hirata, K., Yamamoto, Y. 'Antibiotic residue monitoring results for pork, chicken, and beef samples in Vietnam in 2012 - 2013' *J. Agric. Food Chem.*, 2015, **63**, 5141-5145.
- 2015 Matsushima, K., Kaneda, K., Harada, K., Matsuura, H., Hirata, K. 'Immobilization of enzymatic extracts of *Portulaca oleracea* cv. roots for oxidizing aqueous bisphenol A' *Biotechnol. Lett.*, 2015, **37**, 1037-1042.

◇教育活動

大阪大学薬学研究科応用環境生物学特別講義
 大阪大学薬学部環境安全学
 大阪大学薬学部機能食品学
 大阪大学薬学部健康管理学
 大阪大学薬学部実務実習（薬局）
 大阪大学薬学部生物化学Ⅰ
 大阪大学薬学研究科発展途上国における感染症の現状と対策

◇社会活動、センター外活動

薬学教育評価機構評価委員長
 薬学教育協議会薬学教育者 WS 実施委員長

◇外部資金による研究

科学研究費補助金 基盤研究（B・海外学術調査）「ベトナムの 2 大河川最下流域における毒性化学物質による食品汚染に関する調査研究」研究代表者
 科学研究費補助金 基盤研究（C）「ニチニチソウアルカロイドを高効率に生産する光制御技術の探索と開発」（研究代表者：玉川大学 兼子敬子）研究分担者
 公益財団法人小林国際奨学財団「照葉樹林地域のセンターにおける有用植物資源の探査と機能性に関する研究」研究代表者
 Long Range Research Initiative 「メコン川流域における複合的な環境汚染に対する新規網羅的モニタリングシステムの開発とその実効性の検証」研究代表者
 地球規模課題対策国際科学技術協力事業「薬剤耐性最近発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」（研究代表者：山本容正）研究分担者

宮原 暁（みやはら ぎょう）

副センター長・教授（グローバル共生グループ）

【学歴】大阪外国語大学外国語学部インドネシア・フィリピン語学科卒業（1989）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程（社会人類学専攻）修了（1992）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程（社会人類学専攻）中退（1997）【職歴】大阪外国語大学アジアⅡ講座専任講師（1997）、大阪外国語大学アジアⅡ講座助教授（1999-2007）、大阪外国語大学アジアⅡ講座准教授（2007-）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター准教授（2007-2014）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター副センター長（2010-）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター教授（2014-）、【学位】博士（社会人類学）（2007 東京都立大学）【専攻・専門】社会人類学、華僑華人研究、親族研究

【2015 年度の活動報告】

◇出版業績

- 2015 宮原 暁（編）GLOCOL ブックレット 17『「いたみ」「かなしみ」「他者」の現場：フィールドワークを問う』大阪大学グローバルコラボレーションセンター。
- 2015 「Displacement の素描」、GLOCOL ブックレット 17『「いたみ」「かなしみ」「他者」の現場：フィールドワークを問う』大阪大学グローバルコラボレーションセンター、pp.89-101。
- 2015 「欲望の場所 — 浸透する『他者』」『世界思想』42 号 23-28 頁。

◇講演・口頭発表

- 2015 年 6 月 5 日 “1730 Jesuit House in Cebu” as a Focal Point for “Chinese Exchange.” International and interdisciplinary conference MOVEMENTS, NARRATIVES, AND LANDSCAPES. (University of Zadar, Croatia)
- 2015 年 6 月 8 日 “Mura” and Outsiders: Territorialization and Displacement in Traditional and Contemporary Japan. Slovenian Migration Institute at Research Center of Slovenian Academy of Sciences and Arts.
- 2015 年 6 月 11 日 “Marebito (Strangers in Traditional Japan) Real Creators of Japanese Culture.” University of Sofia, Department of Japanese Studies.
- 2015 年 7 月 11 日 “Movement, Nostalgia, Secular Pilgrimage. 南洋理工大学
- 2015 年 7 月 17 日 Overseas Death, Burial Practices, and Ancestral Worship: A Historical Overview and A Conceptual Framework. IUAES Inter-Congress 2014 (Bangkok タマサート大学)
- 2015 年 8 月 5 日 “Sever Ties and Mobile Bone: An Interpretation for Cremation Practices among Diasporic Chinese in the Philippines. International Workshop on Death, Burial Rituals, and Cemeteries among Chinese Communities of Insular Southeast Asia (Kaisa para sa Kaunlaran).
- 2015 年 10 月 17 日 “Women’s Experiences in “Chinese Diasporic Space” in Southeast Asia Movement, Nostalgia, and Interface.” THE 6TH INTERNATIONAL CONFERENCE OF INSTITUTES & LIBRARIES ON CHINESE OVERSEAS STUDIES (WCILCOS) (中国・廈門、華僑大学)
- 2015 年 10 月 22 日 “Overseas Death, Burial Practices, and Ancestral Worship: An Interpretation for Cremation Practices among Diasporic Chinese in the Philippines. 香港中文大学

◇教育活動

- 大阪大学外国語学部外国語学科「東南アジア社会文化演習ⅡaC」Ⅰ期
- 大阪大学外国語学部外国語学科「東南アジア社会文化演習ⅡbC」Ⅱ期
- 大阪大学外国語学部外国語学科「東南アジア社会文化演習ⅡaD」Ⅰ期
- 大阪大学外国語学部外国語学科「東南アジア社会文化演習ⅡbD」Ⅱ期
- 大阪大学外国語学部外国語学科「東南アジアフィールドワーク a」Ⅰ期
- 大阪大学外国語学部外国語学科「東南アジアフィールドワーク b」Ⅱ期
- 大阪大学人間科学部「地域研究概論」Ⅰ期（オムニバス）
- 大阪大学人間科学部「国際フィールドワーク論」Ⅱ期
- 大阪大学人間科学研究科「超域地域論特講Ⅱ」Ⅰ期
- 大阪大学人間科学研究科「超域地域論特定演習Ⅰ」Ⅰ期
- 大阪大学人間科学研究科「超域地域論特定演習Ⅱ」Ⅱ期
- 大阪大学人間科学研究科「超域地域論特定研究Ⅰ」Ⅰ期
- 大阪大学人間科学研究科「超域地域論特定研究Ⅱ」Ⅱ期
- 大阪大学人間科学研究科「超域地域論特別演習Ⅰ」Ⅰ期

大阪大学人間科学研究科「超域地域論特別演習Ⅱ」Ⅱ期

大阪大学人間科学研究科「超域地域論特別研究Ⅰ」Ⅰ期

大阪大学人間科学研究科「超域地域論特別研究Ⅱ」Ⅱ期

大阪大学人間科学研究科「地域研究特講」(オムニバス)Ⅱ期

大阪大学グローバルコラボレーションセンター・高度副プログラム「グローバル共生」

「グローバルコラボレーションの理論と実践」「多文化共生社会論」「多言語共生社会演習」

大阪大学グローバルコラボレーションセンター・高度副プログラム「現代中国研究」

「現代中国研究」「中国文化コロキウム」

京都外国語大学外国語学部「比較文化論2」Ⅱ期

◇社会活動、センター外活動

日本華僑華人学会常任理事

地域研究コンソーシアム運営委員長

◇外部資金による研究

科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究「東西交流史の新たな視角：メキシコ史研究から見る東・東南アジアの文化変容」
研究代表者

科学研究費補助金 基盤研究(B・海外調査)「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」研
究代表者

◇海外調査活動

2015年3月24日～4月4日、ベトナム・フィリピン・科研基盤B「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディア
スポリック空間」の調査及び情報収集(科研費)

2015年6月3日～16日、クロアチア、スロベニア、マケドニア、ブルガリア・人口移動に関する国際会議、招待講演、
現地調査、バルカン地域の国家形成に関する資料収集(運営費交付金)

2015年7月9日～18日、シンガポール、タイ・人口移動に関する国際会議、招待講演、および科研基盤B「インターフェ
イスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」の現地調査(科研費)

2015年8月3日～11日、フィリピン、香港・フィリピンでの会議に参加し科研課題の情報収集および学術交流協定にも
とづく調査を行い、香港で科研費基盤B「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」
の研究打ち合わせ(科研費、運営費交付金)

2015年10月15日～23日、中国、香港・科研基盤B「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック
空間」に関する研究打合せおよび研究報告(中国華僑大学)、講演(香港中文大学)、中国泉州において調査活動(科
研費)

2015年11月19日～28日、マレーシア、イタリア・マレーシアでの会議参加、ローマで「グローバル化時代の法と社会」
に関する情報収集、打合せ(運営費交付金)

住村欣範（すみむら よしのり）

-----副センター長（2015.12-）・准教授（国際協力グループ）

【学歴】大阪大学人間科学部（1991）、大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了（1996）、大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了（2000）、放送大学大学院文化科学研究科修士課程修了（2008）【職歴】帝塚山大学短期大学部非常勤講師（2000）、大阪外国語大学外国語学部専任講師（2000）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所非常勤講師（2004）、関西大学社会学部非常勤講師（2004）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター准教授（2007-）、大阪市立大学大学院文学研究科非常勤講師（2008）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター副センター長（2011-2012、2015.12-）【学位】学術修士（大阪大学 1996）、修士（学術）（放送大学 2008）【専攻・専門】人類学、ベトナム地域研究

【2015 年度の活動報告】

◇出版業績

2016 「SATREPS 薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」、GLOCOL ブックレット 18『大学とグローバル化 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の経験から』大阪大学グローバルコラボレーションセンター、pp.34-40.

◇講演・口頭発表

2015 年 11 月 19 日 GLOCOL セミナー (131) /GLOCOL 連続セミナー (1)「大学とグローバル化 — 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の経験から」「アジアの課題と大学の知」報告、大阪大学グローバルコラボレーションセンター（大阪大学コンベンションセンター1F 会議室 1）

◇教育活動

大阪大学 GLOCOL 科目「環境問題への回路Ⅰ」（オムニバス）
 大阪大学 GLOCOL 科目「環境問題への回路Ⅱ」（オムニバス）
 大阪大学 GLOCOL 科目「東アジアの地域環境」（オムニバス）
 大阪大学 GLOCOL 科目「グローバル健康環境」
 大阪大学 GLOCOL 科目「グローバルコラボレーション言語Ⅰ・Ⅱ」
 大阪大学 GLOCOL 科目「海外フィールドスタディⅠ」
 大阪大学全学共通教育科目「アジアの文化と社会を知る」
 大阪大学外国語学部「ベトナム語Ⅳa」
 大阪大学外国語学部「ベトナム語Ⅳb」
 大阪大学外国語学部「東南アジア社会文化演習Ⅱa（F）」
 大阪大学外国語学部「東南アジア社会文化演習Ⅱb（F）」
 大阪大学人間科学部「地域言語基礎Ⅰ（ベトナム語）」
 大阪大学人間科学部「地域言語基礎Ⅱ（ベトナム語）」
 大阪大学人間科学部「地域言語基礎Ⅲ（ベトナム語）」
 大阪大学人間科学部「地域知識論Ⅱ」
 大阪大学大学院人間科学研究科「地域知識論特講Ⅱ」
 大阪大学大学院人間科学研究科「地域知識論特定研究Ⅰ」
 大阪大学大学院人間科学研究科「地域知識論特別研究Ⅱ」
 大阪大学大学院人間科学研究科「地域知識論特定演習Ⅰ」
 大阪大学大学院人間科学研究科「地域知識論特別演習Ⅱ」
 大阪大学大学院薬学研究科「応用環境生物学特別講義」（オムニバス）

◇社会活動、センター外活動

大阪大学全学教育推進機構企画開発部兼任
 大阪大学大学院人間科学研究科兼任
 大阪大学人間科学部兼任
 大阪大学外国語学部兼任
 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター兼任
 大阪大学生物工学国際交流センター兼任
 大阪大学生物工学国際交流センター外部評価委員

◇外部資金による研究

科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究「照葉樹林文化圏の近代化過程における食品の保存方法に関する複合的研究」研究代表者

地球規模課題対応国際科学技術協力事業「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」(研究代表者:山本容正) 研究分担者:人類学グループ、人材育成グループリーダー

科学研究費補助金 基盤研究(B・海外学術調査)「ベトナムの2大河川最下流域における毒性化学物質による食品汚染に関する調査研究」(研究代表者:平田収正) 研究分担者

科学研究費補助金 基盤研究(B・海外学術調査)「アジアの認知症高齢者の徘徊などの心理行動学的徴候と関連要因の国際疫学調査」(研究代表者:牧本清子) 連携研究者

Long Range Research Initiative「メコン川流域における複合的な環境汚染に対する新規網羅的モニタリングシステムの開発とその実効性の検証」(研究代表者:平田収正) 研究分担者

◇海外調査活動

2015年5月26日～30日、ベトナム・科研挑戦的萌芽研究「照葉樹林文化圏の近代化過程における食品の保存方法に関する複合的研究」の研究打合せ及び調査(科研費)

2015年6月14日～16日、ベトナム・国立栄養院において、SATREPS「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの構築」に関する会議に出席(受託研究費)

2015年6月25日～30日、ベトナム・科研挑戦的萌芽研究「照葉樹林文化圏の近代化過程における食品の保存方法に関する複合的研究」の研究打合せ及び調査(科研費)

2015年7月25日～29日、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの構築」に関する研究打合せ(受託研究費)

2015年9月13日～17日、ベトナム・メコン川流域ベトナム南部における地域適合型の包括的な環境再生ソリューションモデルの形成(発展途上国の環境問題を総合的に支援するための技術統合グループの形成を目指して)に係る調査および研究(他部局経費)

2015年10月10日～13日、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理におけるモニタリングシステムの開発」に係る研究打ち合わせ出席(受託研究費)

2015年11月9日～13日、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理におけるモニタリングシステムの開発」に係るサイエンティフィックミーティングとワークショップ出席、ベトナムにおける食品安全に関する調査実施(受託研究費、奨学寄附金)

2015年12月6日～10日、ベトナム・メコン川流域ベトナム南部における地域適合型の包括的な環境再生ソリューションモデルの形成(発展途上国の環境問題を総合的に支援するための技術統合グループの形成を目指して)に係る打合せ、協議および熱帯植物由来テルペノイドの有用機能評価と生産系構築に向けた基盤研究に係る研究打ち合わせ(奨学寄附金、他部局経費)

2016年1月30日～2月1日、ベトナム・科研費萌芽的研究「照葉樹林文化圏の近代化過程における食品の保存方法に関する複合的研究」に関する研究会に参加(科研費)

2016年3月27日～4月1日、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理におけるモニタリングシステムの開発」の研究会およびODA カントー大学強化支援事業の会議に出席(受託研究費、他機関経費)

島藺洋介（しまどの ようすけ）

-----講師（グローバル共生グループ）

【学歴】早稲田大学第一文学哲学科社会学専修卒業（1997）、京都大学大学院人間環境学研究科修士課程修了（2000）、オックスフォード大学社会文化人類学研究所医療人類学修士課程修了（2003）、京都大学大学院人間環境学研究科博士課程指導認定退学（2009）、オックスフォード大学社会文化人類学研究所社会人類学博士課程修了（2013）【職歴】京都造形芸術大学通信教育部非常勤講師（2007-2008）、多摩大学グローバルスタディーズ学部非常勤講師（2008-2012）、慶応大学先導研究センター非常勤研究員（グローバル人文 COE「倫理と完成にかんする先端的研究教育拠点」）（2111-2012）、金沢大学意識保険研究域医学系生態医学・公衆衛生学研究員（内閣府・最先端次世代型研究開発支援プログラム「グローバル化における生殖技術の市場化と生殖ツーリズム：倫理的、法的問題」）（2011-2013）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター講師（2013-）【学位】人間環境学修士（京都大学 2000）、医療人類学修士 M. Phil Medical Anthropology（オックスフォード大学 2003）、社会人類学博士 D. Phil in Social Anthropology（オックスフォード大学 2013）【専攻・専門】社会人類学、医療人類学

【2015 年度の活動報告】

◇出版業績

- 2016 「はじめに」、GLOCOL ブックレット 18『大学とグローバル化 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の経験から』大阪大学グローバルコラボレーションセンター、p10.
- 2016 「足もとの国際化と大学」、GLOCOL ブックレット 18『大学とグローバル化 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の経験から』大阪大学グローバルコラボレーションセンター、pp.70-71.
- 2016 「コメント：呪術的实践=知の現代的諸相 — 科学/医療/宗教/その他の実践=知との並存状況から」『コンタクトゾーン』7号（印刷中）
- 2016 「商品としての腎臓 — 医療技術と人体組織の経済をめぐる共生学的試論」栗本・志水・河森編『共生学が創る世界』（印刷中）

◇講演・口頭発表

- 2015 年 6 月 12 日「エスノグラフィック・コラボレーションとコラボレイティブ・エスノグラフィ — 家庭医療と人類学の協働の可能性」、第 6 回日本プライマリケア連合学会ワークショップ「Beyond 質的研究 — 家庭医の症例検討会における医療人類学者とのコラボ!」、筑波。
- 2015 年 11 月 8 日「自己と非自己のはざま — 症例へのコメント」プライマリケア連合学会第 11 回秋期生涯教育セミナー、ワークショップ「症例検討会で家庭医療学 × 医療人類学」、大阪。

◇教育活動

- 大阪大学グローバルコラボレーションセンター高度副プログラム「司法通訳翻訳」
- 大阪大学大学院人間科学研究科「超域地域論特講 I」
- 大阪大学大学院人間科学研究科「超域地域論特講 II」
- 大阪大学大学院人間科学研究科「超域地域論特定演習 I」
- 大阪大学大学院人間科学研究科「超域地域論特定演習 II」
- 大阪大学大学院人間科学研究科「地域研究特講」（オムニバス）
- 大阪大学大学院法学研究科「法務行政論」
- 大阪大学大学院法学研究科「警察活動の理論と実務」
- 大阪大学大学院法学研究科「グローバル化時代の弁護実務」
- 大阪大学大学院法学研究科「司法通訳翻訳実践演習」
- 大阪大学外国語学部「東南アジア社会文化演習」IIa
- 大阪大学外国語学部「東南アジア社会文化演習」IIIa
- 大阪大学外国語学部「東南アジア社会文化演習」IIb
- 大阪大学外国語学部「東南アジア社会文化演習」IIIb
- 大阪大学法学部「特別講義（法務行政論）」
- 大阪大学法学部「特別講義（警察活動の理論と実務）」
- 大阪大学法学部「特別講義（グローバル化時代の弁護実務）」
- 大阪大学法学部「総合演習（司法通訳翻訳実践演習）」

◇社会活動、センター外活動

- 京都大学医学教育推進センター客員研究員

◇外部資金による研究

科学研究費補助金 若手研究 (B)「代理懐胎の人類学：英国における代理懐胎の実態と当事者の語りの研究」研究代表者

◇海外調査活動

2015 年 6 月 7 日～11 日、島菌洋介、フィリピン・レイテ島での災害復興支援と学校建設に関わるコミュニティエクステンション・リサーチの試行（他機関経費）

2015 年 6 月 19 日～25 日、島菌洋介、フィリピン・マニラでの臓器移植に関する研究調査（運営費交付金）

2015 年 7 月 14 日～19 日、島菌洋介、タイ・IUAES の国際会議に参加、研究発表（運営費交付金）

2015 年 8 月 6 日～16 日、島菌洋介、フィリピン・臓器移植に関する調査（運営費交付金）

思沁夫（すちんふ）

-----特任准教授(国際協力グループ)

【学歴】内モンゴル自治区芸術学院大學卒業（1979）、中国国際政治大學第二総合学部（法律）卒業（1986）、金沢大学大学院文学研究科修士課程修了（1998）、金沢大学大学院社会環境科学研究科博士課程卒業（2002）【職歴】内モンゴル自治区法律専門学校教師（1986-1989）、内モンゴル自治区行政幹部管理大學講師、弁護士（1989-1993）、金沢大学特別研究員／北陸大学非常勤講師（2002-2004）、ドイツ・ボン大学研究員（2004-2005）、ロシア・クラスノヤルスク国立大学特別要請研究員（2005-2007）、大阪大学サステナビリティサイエンス研究機構特任研究員（2007）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教（2007-2010）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授（2010-）【学位】学術博士（金沢大学 2002）【専攻・専門】文化人類学、生態人類学

【2015 年度の活動報告】

◇出版業績

- 2016 「大学の知を活かした環境保護、環境保護を活かした実践型教育 — モンゴルでの取り組みを事例に」、GLOCOL ブックレット 18『大学とグローバル化 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の経験から』大阪大学グローバルコラボレーションセンター、pp.41-54.
- 2015 Siqinfu “From Nomads to Settlers: A History of the Aoluguya Ewenki(1965-1999)”, Åshild, K.(ed.), Reclaiming the forest: the Ewenki reindeer herders of Aoluguya, New York: Berghahn Books, 2015.
- 2015 思沁夫・A.B.マリヤナ編『アムール地域のエヴェンキ人文化に関する実証的研究』ブラガウィンスキー国立大学出版会
- 2015 「内モンゴル（満洲）に生きたダフル人、エヴェンキ人女性たち」生田美智子編『女性たちの満洲』大阪大学出版会、pp. 279-301（査読有）
- 2015 思沁夫・田中仁編『【OUFC ブックレット vol.6】東アジア“生命健康圏”構築に向けて—大気汚染と健康問題を考える日中国際会議の記録』OUFC.
- 2015 「総論：東アジア“生命健康圏”の構築に向けて」思沁夫・田中仁編『【OUFC ブックレット vol.6】東アジア“生命健康圏”構築に向けて—大気汚染と健康問題を考える日中国際会議の記録』OUFC.

◇講演・口頭発表

- 2015.09.21 基調講演「民族語は消滅するのか？エヴェンキ語を例に」、内モンゴル師範大学主催シンポジウム「民族教育の現在」
- 2015.09.23 講演「生態人類学研究の 20 年：エヴェンキ人はなぜトナカイが好きか」中国人民大学・人類学研究所
- 2015.09.25 講演「食べ物の多様性と生物多様性：雲南を例に」中国農業大学・食品安全研究センター
- 2015.11.19 発表「大学の知を活かした環境保護、環境保護を活かした実践教育—モンゴルでの取り組みを事例に」GLOCOL 連続セミナー：大学とグローバル化「大阪大学 GLOCOL の 9 年間の研究から」第 1 回「アジアの課題と大学の知」、大阪大学グローバルコラボレーションセンター

◇教育活動

- 大阪大学サステナビリティ学教育プログラム・大阪大学人間科学研究科/人間科学部・グローバルコラボレーションセンター協力科目「環境と社会」/「環境と社会特講」Ⅰ期コーディネーター（オムニバス）
- 大阪大学大学院等高度副プログラム・GLOCOL 教育プログラム「グローバル共生」コーディネーター（オムニバス）
- 大阪大学グローバルコラボレーション科目「グローバルコラボレーションの理論と実践」、「環境問題への回路Ⅰ」「環境問題への回路Ⅱ」、「環境問題への回路Ⅲ」「環境問題への回路Ⅱ 実践演習」、「Food security, globalization and sustainability」、「環境生物学特別講義/発展途上国における感染症対策」コーディネーター・担当
- 大阪大学グローバルコラボレーション科目「現代中国研究」「グローバル健康学」（オムニバス）
- 2015 年 8 月 9 日～18 日 海外フィールドスタディ(Field Study)モンゴル「開発と地域保全」を企画、実施した。

◇社会活動、センター外活動

- 法廷通訳（講演 1 回、モンゴル語による通訳 3 件、ロシア語 2 件）
- 中国環境保護 NGO「自然之友」特別要請会員
- ツァガンボルガソ遊牧民環境保護組合 顧問・メンバー
- ロシアブリヤード共和国民間組織（NGO）「エヴェンキ文化保護・人材育成会」学術指導教員(スタッフ)
- ボン大学 特別要請研究員
- 北京大学 客員教授

中国農業大学 客員教授
 普洱学院大学 特別要請教授
 国立民族学博物館 共同研究員
 総合地球環境学研究所 共同研究員
 東北芸術工科大学東北文化センター 共同研究員
 北海道立北方民族博物館 研究協力員
 世界トナカイ放牧者協会 理事

◇外部資金による研究

科学研究費補助金 基盤研究 (C)「トナカイ放牧と自然保全の持続可能な関係：エヴェンキ人のローカルナレッジの再評価」研究代表者
 科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究「照葉樹林文化圏の近代化過程における食品の保存方法に関する研究」(研究代表者：住村欣範) 研究分担者
 WWF モデル事業「雲南白馬雪山自然保護区における林下資源の持続利用と自立・対話型コミュニティの構築」研究代表者
 公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団環境プロジェクト助成事業「モンゴル国オング川流域における柳林保護および越冬用飼料(草)の栽培に関する協力行動」研究代表者
 公益財団法人小林国際奨学財団「照葉樹林地域のセンターにおける有用植物資源の探査と機能性に関する研究」(研究代表者：平田収正) 研究分担者
 東北芸術工科大学 東北文化研究センター共同研究プロジェクト「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」『東アジアにおける民族と集落－生業の置換による集落機能の変容』共同研究者
 国立民族学博物館 共同研究「ポスト社会主義以後の社会変容：比較民族誌的研究」(研究代表者：国立民族学博物館 佐々木史郎) 研究分担者

◇海外調査活動

2015 年 7 月 18 日～24 日、モンゴル、中国・モンゴル国オブスハンガイ県オング川流域における柳林保護および越冬用飼料(草)の栽培に関する協力活動のため(助成金)
 2015 年 8 月 1 日～19 日、モンゴル・海外フィールドスタディ「環境と地域保全」の実施および学生引率のため(私費、運営費交付金)
 2015 年 8 月 22 日～27 日、ノルウェー・オスロ世界平和研究所にて世界温暖化とトナカイ放牧についての研究打合および国際シンポジウム(カナダ)の開催準備打合せ(他機関経費)
 2015 年 8 月 30 日～9 月 27 日、中国、ロシア・科研基盤 C「トナカイ放牧と自然保全の持続可能な関係：エヴェンキ人のローカルナレッジの再評価」の調査(科研費)
 2015 年 10 月 22 日～31 日、中国・H28 年度以降の超域イノベーション博士課程プログラム 海外フィールド・スタディにかかる予備調査(他部局経費)
 2 月 27 日～3 月 6 日、中国・雲南大学、普洱学院との共同研究及び拠点形成についての打合せ(運営費交付金)

敦賀和外（つるが かずと）

-----特任准教授（海外体験型教育企画オフィス）

【学歴】国際基督教大学教養学部卒業（1993）、国際基督教大学行政学研究科修士課程修了（2002）【職歴】読売新聞社事業局文化事業部（1993）、国連開発計画アフガニスタン事務所プログラム・オフィサー（2002）、日本国際協力銀行バンコク駐在員事務所コンサルタント（カンボジア担当）（2007）、広島平和構築人材育成センター・プログラムマネージャー（就職支援担当）（2007）、国連日本政府代表部政務部一等書記官（2008）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授（2010-）、大阪大学超域イノベーション博士課程プログラム兼任教員（2012-）【学位】行政学修士（国際基督教大学 2002）【専攻・専門】国連研究、平和構築

【2015 年度の活動報告】

◇出版業績

2016 敦賀和外、本庄かおり、安藤由香里、片山歩「海外体験型教育とは」、「海外体験型教育とは」「海外フィールドスタディ（FS）の運営」「海外渡航時のリスク管理」「5 年間の教訓」、GLOCOL ブックレット 18『大学とグローバル化 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の経験から』大阪大学グローバルコラボレーションセンター、pp.108-125.

◇講演・口頭発表

2015 年 5 月 2 日 第 10 回大阪大学ホームカミングデイ若手会企画「これまでのキャリア・パスと若手に伝えたいこと」（スピーカー）
 2015 年 5 月 22 日 大阪大学基礎教育科目「21 世紀の難問を総合的に考える」（ゲスト・スピーカー）
 2015 年 7 月 4 日 ミラツクギャザリング in 京都（スピーカー）
 2015 年 9 月 3 日 Japan's Assistance For Fragile States: Potential For US-Japan Cooperation（於スティムソンセンター、米国ワシントン DC）（スピーカー）
 2015 年 10 月 18 日 シンポジウム「ソーシャル・イノベーションが拓く未来」（司会・議事進行）
 2015 年 11 月 25 日 TEDxOsakaU Salon、「Piece by Piece～平和の世界へ～」（スピーカー）

◇教育活動

大阪大学大学院 国際公共政策研究科科目「国連政策エキスパート・キャリア形成論」
 大阪大学グローバルコラボレーション科目「海外インターンシップⅠ」「海外インターンシップⅡ」
 大阪大学国際公共政策研究科「プロジェクト演習（国連安保理研究ワークショップ）」
 大阪大学国際公共政策研究科「プロジェクト演習（科学技術とソーシャル・エンタープライズ）」
 大阪大学超域イノベーション博士課程プログラム「超域イノベーション海外実習」

◇外部資金による研究

科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」（研究代表者：大橋一友）
 研究分担者

◇海外調査活動

2015 年 5 月 23 日～28 日、敦賀和外、アメリカ・科研挑戦的萌芽研究「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」に関する意見交換及び情報収集を、「Joint NAFSA and URMIA Seminar on Risk Management」参加にて実施（科研費）
 2015 年 8 月 8 日～15 日、イギリス・RENKEI が UCL で開催するワークショップに参加するため（他部局経費）
 2015 年 9 月 2 日～7 日、アメリカ・スティムソンセンターのプロジェクト「Japan as a peace enabler: views from the next generation」研究会参加（他機関経費）
 2016 年 1 月 6 日～10 日、フィリピン・超域イノベーション博士課程プログラム 超域アクティビティ・プラス（教員発案型）「ものづくり分野における途上国と先進国の新しい協力関係を提示する共創フィールドワーク」現地調査（他部局経費）
 2016 年 3 月 13 日～16 日、アメリカ・スティムソンセンターのプロジェクト「Japan as a peace enabler: views from the next generation」研究会参加（他機関経費）

常田タ美子（ときた ゆみこ）

-----特任准教授（グローバル共生グループ）

【学歴】 ロンドン大学東洋アフリカ学院日本語学科・言語学学科卒業（1987）、ロンドン大学東洋アフリカ学院社会人類学修士課程修了（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得退学（1997）【職歴】 ロンドン商工会議所 特別研究員（1987-1988）、日本学術振興会特別研究員（DC）（1995-1997）、日本学術振興会特別研究員（PD）（1997-2000）、フリーランス翻訳者（2002-2004）、京都大学人文科学研究所研究支援推進員（2004-2005）、京都大学人文科学研究所研究支援推進員（2006-2007）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教（2007-2010）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授（2010-）【学位】 学術博士（東京大学 2000）【専攻・専門】 文化人類学、南アジア地域研究、ジェンダー研究

【2015 年度の活動報告】

◇出版業績

2015 “Beyond the ‘Baby Factory’: Construction of Intimacy in Commercial Surrogacy Practices in India”, *Global Collaboration Online Discussion Papers* no.2015-01, pp. 1-13.

◇講演・口頭発表

2015 年 5 月 31 日 “Migration and Settlement in Rurban Areas of Coastal Odisha, India, from 1980s to 2010s” Third Congress of the Asian Association of World Historians (AAWH) “Migration in Global History: Peoples, Plants, Plagues, and Ports”, Nanyang Technological University, Singapore.

2015 年 7 月 15 日 “Intimate Networks in the Age of Globalization: Women’s Agency and Reassembling Relationships of Care in India”, International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter-Congress, Thammasat University, Bangkok.

2015 年 12 月 16 日 「現代インドにおける女性の自由」自由研究セミナー『インドを学ぼう』、慶應義塾大学日吉キャンパス。

◇教育活動

大阪大学大学院等高度副プログラム・グローバルコラボレーションセンター科目「グローバル共生実践演習」Ⅱ期

大阪大学グローバルコラボレーションセンター科目「海外フィールドスタディ（A）」Ⅰ期

大阪大学グローバルコラボレーションセンター科目「海外フィールドスタディ（B）」Ⅱ期

大阪大学グローバルコラボレーションセンター科目／大阪大学 G30 プログラム Gender and Development Ⅱ期

◇社会活動、センター外活動

リエゾン・クリエイティブ・アカデミー、クリエイションサポーター

◇科研費による研究、その他の外部資金

科学研究費補助金 基盤研究（C）「現代インドの村落・都市中間地帯における親密圏の再編 — 移動社会を支えるケア関係」研究代表者

人間文化研究機構 地域研究推進事業『現代インド地域研究』国立民族学博物館拠点 研究協力者

◇海外調査活動

2015 年 5 月 28 日～6 月 1 日、シンガポール・“The Asian Association of World Historians Third Congress at Singapore 2015” “Migration in Global History: Peoples, Plants, Plagues, and Ports”で研究発表（他機関経費）

2015 年 7 月 14 日～18 日、タイ・IUAES の国際会議に参加、研究発表（運営費交付金）

2015 年 7 月 29 日～9 月 6 日、インド・科研費基盤 C 「現代インドの村落・都市中間地帯における親密圏の再編 — 移動社会を支えるケア関係」の調査及び情報収集（科研費）

2016 年 2 月 13 日～28 日、インド・科研費基盤 C 「現代インドの村落・都市中間地帯における親密圏の再編—移動社会を支えるケア関係」の調査及び情報収集とオディッシャー州における女性の口頭伝承の調査および資料収集（科研費・運営費交付金）

本庄かおり（ほんじょう かおり）

-----特任准教授（海外体験型教育企画オフィス）

【学歴】関西学院大学経済学部卒業（1986）、Boston University School of Public Health, Social Behavior and Health Dept. MPH 取得修了（1997）、Harvard University School of Public Health, Health and Social Behavior Dept. M.Sc. 取得修了（2002）、岡山大学大学院医歯薬総合研究科衛生学・予防医学分野博士（医学）取得（2005）【職歴】大阪大学大学院医学系研究科社会環境医学公衆衛生学教室特任研究員（2005-2007）、大阪大学大学院医学系研究科「医科学修士健康医療問題解決能力の涵養」教育プログラム特任助教（2007-2010）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授（2010-）【学位】博士（医学）、MPH【専攻・専門】社会疫学、公衆衛生学、健康社会行動科学、健康格差研究

【2015 年度の活動報告】

◇出版業績

・論文

(in press) Watson B, Chiang C, Ikerdeu E, Yatsuya H, Honjo K, Mita T, Cui R, Madraisau S, Ngirmang G, Iso H, Aoyama A. Profile of Non-communicable Disease Risk Factors among Adults in the Republic of Palau: Findings of a National STEPS Survey. Nagoya Journal of Medical Science.

(in press) Honjo K, Iso H, Ikeda A, Fujino Y, Tamakoshi A, JACC Study Group. Employment situation and risk of death among middle-aged Japanese women. J Epidemiol Community Health.

2015 Hanibuchi T, Nakaya T, Yonejima M, Honjo K. Perceived and Objective Measures of Neighborhood Walkability and Physical Activity Among Japanese Adults: A Multilevel Analysis of a Nationally Representative Sample. *Int. J. Environ. Res. Public Health*, 121013350-13364; doi:10.3390/ijerph121013350 (registering DOI)

2015 Chiang C, Singeo ST, Yatsuya H, Honjo K, Mita T, Ikerdeu E, Cui R, Li Y, Watson B, Ngirmang G, Iso H, Aoyama A. Profile of Non-communicable Disease (NCD) Risk Factors among Young People in Palau. *J Epidemiol* 25(5):392-397.

2015 本庄かおり 健康の性差—ジェンダーの健康影響. 家計経済研究. 107:45-53.

・書籍

2016 敦賀和外, 本庄かおり, 安藤由香里, 片山歩「海外体験型教育とは」、「海外体験型教育とは」「海外フィールドスタディ (FS) の運営」「海外渡航時のリスク管理」「5 年間の教訓」、GLOCOL ブックレット 18『大学とグローバル化 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の経験から』大阪大学グローバルコラボレーションセンター、pp.108-125.

2015 本庄かおり 神林博史 第 5 章 ジェンダーと健康 (pp.95-113) 川上憲人 橋本英樹 近藤尚己 編 『社会と健康 — 健康格差解消に向けた統合科学的アプローチ』東京大学出版会

◇講演・口頭発表

・学会発表

2015 年 6 月 26 日 崔 美善 崔 仁哲 江 啓発 本庄かおり 青山温子 磯 博康 ポスター発表 「パラオにおける脂質異常症と日本、アメリカとの比較」第 51 回日本循環器予防学会総会 大阪:大阪大学中之島センター

2015 年 7 月 6 日 Hanibuchi T, Nakaya T, Yonejima M, Honjo K. Neighbourhood walkability and physical activity among Japanese adults: Multilevel analysis of a nationally representative sample. Poster presentation. 16th International Medical Geography Symposium Simon Fraser University, Vancouver campus, Vancouver, B.C. Canada

2015 年 11 月 4 日 埴淵知哉 中谷友樹 本庄かおり ポスター発表「JGSS 累積データからみた健康格差の推移」第 74 回日本公衆衛生学会総会（長崎新聞文化ホール 長崎市）

2015 年 11 月 5 日 本庄かおり 近藤尚己 谷友香子 近藤克則 JAGES 研究グループ ポスター発表「居住形態・社会関係とうつ症状発症の関連：JAGES 3 年間コホート研究」第 74 回日本公衆衛生学会総会（長崎新聞文化ホール 長崎市）

2016 年 1 月 22 日 本庄かおり 近藤尚己 谷友香子 佐々木由里 近藤克則 JAGES 研究グループ ポスター発表「高齢者における、独居、社会的サポートとうつ症状発症の関連：JAGES 3 年間コホート研究」第 26 回日本疫学会学術総会（米子コンベンションセンター、米子市）

2016 年 1 月 22 日 佐々木由里 宮国康弘 谷友香子 辻 大士 亀田義人 斎藤 民 本庄かおり 近藤克則 口頭発表 「高齢者のうつ傾向からの回復状況—JAGES 2010-13 縦断データ分析—」第 26 回日本疫学会学術総会（米子コンベンションセンター、米子市）

2016 年 1 月 22 日 澤 俊二 磯 博康 本庄かおり 山川百合子、千田直人 大仲功一 安岡利一 伊佐地隆 園田 茂 鈴木めぐみ 山田将之 百田貴洋 酒野直樹 鈴木幸治 櫻井宏明 壹岐英正 金田嘉清 才藤栄一 太田

仁史 嶋本喬 ポスター発表「慢性脳血管障害における総合的追跡調査 発病 10 年リハニーズの同定
および達成と未達成の推移」 第 26 回日本疫学会学術総会（米子コンベンションセンター、米子市）

・講義・講演

2015 年 6 月 1 日 7th International Symposium on Social Capital and Health (ISSC) 「Living arrangement and depressive symptoms: JAGES study」 Jeju, Korea

2015 年 6 月 30 日 高槻高校 G A コース 第 4 回グローバルスタディーズ特別セミナー「拡大する健康格差—グローバルな視点から見る」大阪：高槻高校

2015 年 8 月 10 日 第 5 回大阪公衆衛生セミナー：健康の社会決定要因「健康の社会決定要因としてのジェンダー」大阪：大阪大学 最先端医療イノベーションセンター

2015 年 10 月 17 日 第 17 回荒記記念賞受賞講演「Influence of Municipal- and Individual-level Socioeconomic Conditions on Mortality in Japan」仙台：東北大学長陵会館

2015 年 10 月 27 日 長崎大学医歯薬総合研究科大学院セミナー「社会と健康—ジェンダーの視点」長崎：長崎大学大学院医歯薬学総合研究科

2015 年 11 月 5 日 第 74 回日本公衆衛生学会総会 教育講演「社会と健康—ジェンダーの視点」長崎：長崎ブリックホール

2015 年 12 月 10 日 東京大学公共健康医学専攻講義「社会的健康決定要因としてのジェンダー」東京大学
・企画・司会進行

2015 年 7 月 16 日 第 127 回 GLOCOL セミナー / FIELDO グローバル・エキスパート連続講座 (27) 「国づくりは人づくり—グローバルヘルス分野で出来ること」

2015 年 12 月 5 日 大学教育における「海外体験学習」研究会 2015 年度年次大会 （大阪大谷大学ハルカスキャンパス、大阪市）分科会 3：危機管理セッション 報告者

2016 年 1 月 27 日・28 日 公開シンポジウム 「大学のグローバル化と学生海外渡航時のリスク管理—学生を守る・大学を守る」 東京：東京工業大学キャンパスイノベーションセンター 「大学のグローバル化と学生海外渡航時のリスク管理—アンケート調査概要と結果」 報告者

◇教育活動

大阪大学大学院等高度副プログラム「グローバル健康環境」

大阪大学グローバルコラボレーション科目「グローバル健康環境」Ⅰ期

大阪大学グローバルコラボレーション科目「環境問題への回路」オムニバスⅠ期

大阪大学グローバルコラボレーション科目「海外フィールドスタディ A」Ⅰ期

大阪大学グローバルコラボレーション科目「海外フィールドスタディ B」Ⅱ期

大阪大学医学系研究科「疫学総論」オムニバスⅠ期

大阪大学医学系研究科「疫学各論」オムニバスⅠ期

東京大学医学系研究科「社会と健康」オムニバスⅡ期

◇社会活動、センター外活動

日本公衆衛生学会評議員

日本疫学会評議員

Journal of Epidemiology Associate editor

大阪大学大学院医学系研究科兼任

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科非常勤講師

◇外部資金による研究

厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策政策研究事業「たばこ対策の健康影響および経済影響の包括的評価に関する研究」（研究代表者：片野田耕太）分担研究者

科学研究費補助金 基盤研究 (C) 「性別役割分業規範の健康影響とそのメカニズムに関する社会疫学研究」研究代表者

科学研究費補助金 基盤研究 (A) 「社会心理要因から循環器疾患に至るプロセス解明のための社会・健康科学融合研究」

（研究代表者：磯 博康）分担研究者

科学研究費補助金 基盤研究 (A) 「オセアニア・南アジアの労働者。低所得における生活習慣病の実態と社会的危険因子」（研究代表者：名古屋大学 青山温子）分担研究者

科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」（研究代表者：大橋一友）分担研究者

科学研究費補助金 基盤研究 (A) 「世界精神保健日本追跡調査：地域住民における精神疾患の 10 年間のコホート研究」

(研究代表者：東京大学 川上憲人) 連携研究者
地球規模課題対応国際科学技術協力事業「薬剤耐性最近発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」(研究代表者：山本容正) 連携研究者

◇受賞

2015 年 第 17 回 日本行動医学会 荒記記念賞

◇海外調査活動

2015 年 5 月 22 日～28 日、アメリカ・科研挑戦の萌芽研究「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」に関する意見交換及び情報収集を、「Joint NAFSA and URMIA Seminar on Risk Management」参加にて実施（科研費）
2015 年 5 月 31 日～6 月 3 日、韓国・ソウル大学での社会疫学セミナーに参加後、済州島での国際ソーシャルキャピタル研究会参加（科研費）
2015 年 9 月 15 日～18 日、パラオ・科研基盤 A「オセアニア・南アジアの労働者・低所得者における生活習慣病の実態と社会的危険因子」の調査と情報収集、研究会参加（科研費）
2015 年 11 月 9 日～26 日、アメリカ・科研費基盤 C「性別役割分業規範の健康影響とそのメカニズムに関する社会疫学研究」の調査（科研費）

吉富志津代（よしとみ しづよ）

-----特任准教授（グローバル共生グループ）

【学歴】京都外国語大学イスパニア語学科卒業（1979）、神戸大学大学院国際協力研究科修士課程修了（2005）、京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了（2008）【職歴】在神戸アルゼンチン総領事館（1979）、在神戸ボリビア名誉総領事館（1990）マリアテレサスペイン語スクール非常勤講師（1990）、在大阪ボリビア名誉総領事館準備室（1994）、株式会社エフエムわいわいプロデューサー（1996）、特定非営利活動法人多言語センターFACIL 理事長（1999）、財団法人入管協会インフォメーションセンタースペイン語相談員（2000）、関西学院大学非常勤講師（2005）、関西大学非常勤講師（2009）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター（2011-）【学位】国際学修士（神戸大学 2005）、人間・環境学博士（京都大学 2008）【専攻・専門】国際協力政策、公共政策、多文化共生、南米研究

【2015 年度の活動報告】

◇出版業績

- 2016 「第3章 足もとの国際化と大学 基調講演」、GLOCOL ブックレット 18『大学とグローバル化 大阪大学 GLOCOL の9年間の経験から』大阪大学グローバルコラボレーションセンター、pp.72-85.
- 2016 吉富志津代、須本エドワード「第3章 足もとの国際化と大学 対談2：ミックスルーツ・ジャパンと GLOCOL との連携」、GLOCOL ブックレット 18『大学とグローバル化 大阪大学 GLOCOL の9年間の経験から』大阪大学グローバルコラボレーションセンター、pp.93-103.
- 2016 2015 年度 GLOCOL フィールドスタディ（インドネシア）「コミュニティ防災—命を守るためのつながりを学ぶ」報告書
- 2016 第5章「The Current State and Societal Impact of the Multilingualization of Various Forms of Media（多様なメディアにおける多言語化の現状と意義）」（仮題）、第6章「Multilanguage in Community based disaster management（コミュニティ防災の視点における多言語）」（仮題）『Multilingualism and Public Interest Interpreting and Translation in Japan（日本の多言語主義と公益通訳翻訳）』大阪大学出版会

◇講演、口答発表

- 2015 年 6 月 25 日 長田南区域学校園人権教育推進協議会総会・講演会「地域の多様な子どもたち — 言語形成とアイデンティティ」
- 2015 年 6 月 30 日 日米交流プログラム:災害後の地域復興における市民参加 ワークショップコーディネーター
- 2015 年 8 月 4 日 高知県人権セミナー「だれも排除されない社会のために—「教育現場」と「コミュニティ防災」で考える多文化共生」
- 2015 年 8 月 7 日 母語・継承語・バイリンガル教育研究会 報告@立命館大学「二つ以上の言語環境の子どもたちへの支援活動と提言」
- 2015 年 8 月 8 日 兵庫県人権教育指導者研修会 子ども多文化共生教育フォーラム パネルディスカッション
- 2015 年 8 月 21 日 バイリンガル教育を考える 国際シンポジウム、韓国「二つ以上の言葉の狭間で生きる子どもたち」
- 2015 年 8 月 27 日 バイリンガル教育を考える 国際シンポジウム、神戸「二つ以上の言葉の狭間で生きる子どもたち」
- 2015 年 9 月 13 日 神戸市子ども家庭局 ユースまちづくりミーティング「多文化共生のまちづくり」
- 2015 年 9 月 26 日 しまね国際センター平成 27 年度ボランティア研修事業 コミュニティ通訳合同研修会「双方向のコミュニケーションのための『ことば』～コミュニティ通訳の事例から」
- 2015 年 9 月 29 日 全国知事会 第十一次自治制度研究会「だれも排除されない社会のために — 教育現場とコミュニティ防災で考える多文化共生」
- 2015 年 10 月 26 日 トヨタ財団活動報告 「バイリンガル環境で育つ子どもたちの言語形成に考慮した教育環境整備事業 — 韓国との連携で広げるネットワーク構築へ」
- 2015 年 11 月 21 日 ふるさとひょうご創生塾 地域課題の現状と動き（異文化理解）「お隣さんは外国人」
- 2015 年 11 月 21 日 GLOCOL セミナー「足もとの国際化と大学—グローバル時代における社会学連携の成果と課題—」
- 2015 年 11 月 29 日 常総市 「災害ラジオの活用」
- 2015 年 12 月 7 日 JICA アンデス研修「災害とコミュニティラジオ」
- 2015 年 12 月 8 日 Ofix 大阪府外国人向け行政情報提供窓口相談員ネットワーク会議ワークショップファシリテーター
- 2016 年 1 月 18 日 箕面市「医療現場でのコミュニケーション～だれもが暮らしやすいまちをめざして～」
- 2016 年 1 月 19 日 全国市町村国際文化研修所（JIAM）「行政と NPO の協働—TCC の活動から—」
- 2016 年 1 月 24 日 泉佐野市町会連合会講演会「コミュニティ防災の視点で考える多文化共生～だれも排除されないまち

づくり～」

2016年1月24日 JICA 中米研修「災害とコミュニティラジオ」

◇教育／実践活動

大阪大学 GLOCOL「グローバルコラボレーションの理論と実践」

大阪大学 GLOCOL「グローバル共生実践演習」

大阪大学全学共通教育科目「現代社会を読み解く ― グローバル化とコミュニティ」

大阪大学超域イノベーション博士課程プログラム「超域学際・ボランティア実践論」

大阪大学 GLOCOL「海外フィールドスタディ・インドネシア／コミュニティ防災」企画・事前学習・実施

大阪大学未来戦略機構 未来共生イノベーター博士課程プログラムにて、マルチメディア教材「自然環境と地域文化との調和ーコミュニティ防災の視点から」の副読本およびDVD制作

京都外国語大学「NPO/NGO 活動入門」(春学期)、「コミュニティビジネス」「プロジェクト科目 ― 外国人コミュニティとエスニックメディア」(秋学期)

関西学院大学／関西学院大学大学院「多言語・多文化社会」(春学期後半／夏期集中講座)

トヨタ財団助成事業「二つ以上の言語環境で暮らしている外国につながる子どもたちの教育に関する提言」の実施(詳細はp.84)

◇社会活動、センター外活動

大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター客員研究員

財)兵庫県人権啓発協会人権問題研究アドバイザー

兵庫県県民生活審議会委員

財)箕面市国際交流協会評議員

兵庫県長期ビジョン審議会委員

ひょうご市民活動協議会共同代表

特定非営利活動法人多言語センター理事長

特定非営利活動法人エフエムわいわい代表理事

特定非営利活動法人たかとりコミュニティセンター常務理事

西日本地区入国者収容所等視察委員

特定非営利活動法人シャプラニール＝市民による海外協力の会評議員

東大阪市外国籍住民施策懇話会委員

豊中市国際交流センター指定管理者選定評価委員会委員

「ひょうご安全の日推進県民会議」企画委員

自由都市・堺 平和貢献賞選考委員会 委員 など

◇海外調査活動

2015年7月1日～6日、インドネシア・FIELDO 海外フィールドスタディ「コミュニティ防災? 命を守るためのつながりを学ぶ」の実施にむけた準備(運営費交付金)

2015年7月29日～8月1日、韓国・トヨタ財団助成金事業『バイリンガル環境で育つ子どもたちの言語形成を考慮した教育環境整備のためのネットワーク構築事業』において、8月に実施する国際シンポジウムに関して、連携する韓国の団体などとの最終打ち合わせのため(他機関経費)

2015年8月18日～23日、韓国・トヨタ財団助成金事業『バイリンガル環境で育つ子どもたちの言語形成を考慮した教育環境整備のためのネットワーク構築事業』において、韓国の団体との共催で実施する国際シンポジウムへの参加(他機関経費)

2015年9月1日～10日、インドネシア・海外フィールドスタディ・プログラム「コミュニティ防災? 命を守るためのつながりを学ぶ」の実施および学生引率(運営費交付金)

2015年12月9日～16日、インドネシア・海外フィールドスタディで連携している現地 NGO および FM わいわいとのコミュニティ防災プログラムへの FS フォローアップ、コミュニティ防災関連副読本&DVD制作(未来共生予算)のための打ち合わせ、専門家としてのアドバイスおよび調査(他機関経費)

2016年2月1日～8日、インドネシア・海外フィールドスタディで連携している現地 NGO および FM わいわいとのコミュニティ防災プログラムへの FS フォローアップ、コミュニティ防災関連副読本&DVD制作(未来共生予算)のための打ち合わせ、専門家としてのアドバイスおよび調査(他機関経費)

2016年2月23日～3月11日、スペイン・ポルトガル・かつての「送り出し国」が「受け入れ国」への変容が顕著な国であるスペインの調査(運営費交付金)

安藤由香里（あんど う ゆかり）

-----特任助教（海外体験型教育企画オフィス）

【学歴】英国ウォリック大学大学院法学研究科開発法専攻修士課程修了（1999）、名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻博士前期課程修了（2000）、パリ第 11 大学法学研究科博士課程／人権・人道法センター日仏共同博士課程コンソーシアム（2008）、名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻博士後期課程退学（2009）【職歴】国連フィジー選挙監視団（UNFEOM）選挙監視員（2000）、真法律事務所スタッフ（2002-2004）、名古屋外国語大学現代国際学部アシスタントインストラクター（2003-2005）、中央大学研究開発機構準研究員（2006）、トラベルジャーナル旅行専門学校非常勤講師（2006）、内閣府国際平和協力本部事務局研究員（2009-2011）、日本政府スーダン総選挙監視団選挙監視員（2010）、日本政府スーダン住民投票監視国際平和協力隊先遣隊・本隊（2010-2011）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教（2011-）【学位】法学修士（ウォリック大学 1999）、学術修士（名古屋大学 2000）【専攻・専門】国際人権法・難民法、国際協力

【2015 年度の活動報告】

◇出版業績

- 2016 「海外体験型教育プログラムのつくりかた」、GLOCOL ブックレット 18『大学とグローバル化 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の経験から』大阪大学グローバルコラボレーションセンター、pp.106-107.
- 2016 敦賀和外、本庄かおり、安藤由香里、片山歩「海外体験型教育とは」、「海外体験型教育とは」「海外フィールドスタディ（FS）の運営」「海外渡航時のリスク管理」「5 年間の教訓」、GLOCOL ブックレット 18『大学とグローバル化 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の経験から』大阪大学グローバルコラボレーションセンター、pp.108-125.
- 2015 安藤由香里、栗山智帆「資料：中国の法輪功修煉者の難民認定に関するマーティン・トレッドウェルの概説と決定 ニュージーランド移民保護行政審判所 AJ 事件（中国）（2012.1.26 決定）」『国際公共政策研究』第 20 巻 1 号
- 2015 村上正直、安藤由香里、有江ディアナ、栗山智帆、伊崎翔「議事録：アラン・マッキー判事の難民法講座【講義 1】」『国際公共政策研究』第 20 巻 1 号

◇講演・口頭発表

- 2015.11 「難民キャンプでインターン」おかやま国際塾帰国報告会～グローバル社会で活躍するために～岡山大学
- 2015.11 「世界のシリア難民政策」シリア難民の今、大阪大学
- 2015.10 「世界の難民状況の最近の動き ～私たちにできること～」Rafiq14 周年総会
- 2015.10 'In need of Protection for Vulnerable People: Responses to the Current Immigration Crisis' Groningen-Osaka bi-annual conference 2015, Humanitarianism and Global Health – 21st century challenges, necessities and opportunities, University of Groningen, The Netherlands
- 2015.9 'A Study of Effective Learning on International Internships and International Study Tours at Japanese University: The Significance of Self-Assessment and Risk Management' Asia Pacific Career Development Association(APCDA)"Workforce of the Future?"Ryogoku, Tokyo, Japan
- 2015.9 'Preparation and Training for Risk Management at University: Significance of the Risk Simulation for Study Abroad' International Association for Educational and Vocational Guidance(IAEVG) "Restructuring Careers Over Unexpected Powerful Forces" Tsukuba, Ibaragi, Japan
- 2015.7 「EU 人権保障の理念と政策：EU 基本権憲章を中心に」大阪大学大学院国際公共政策研究科・EUIJ 関西主催大学・専修学校等オープン講座（夏季講座）EU とは何か
- 2015.6 'Current Japanese Law and Policies of the Acceptance of Foreigners including Refugee', JSPS-NWO JOINT SEMINAR "Racism and intolerance in Europe and Asia - Challenges and Policies" University of Groningen, The Netherlands
- 2015.5 'Reversing Protection based on Criminalization of Migration: A Case of Japan' Canadian Association for Refugee and Forced Migration Studies (CARFMS)15, Ryerson University, Toronto, Canada.

◇GLOCOL セミナー企画運営

- 2015.5.22 「法整備支援とは何か」佐藤直史、国際協力機構(JICA) シニアアドバイザー、弁護士
- 2015.6.28 世界難民の日シンポジウム「2015 年世界難民の日関西集会」
- 2015.7.9 International Protection of Refugees: Global Trends of Displacement and Refugee Governance, Mr Furio De Angelis, UNHCR Representative in Canada.
- 2015.7.23 「国際刑事裁判所の重要性と可能性 国際司法におけるキャリア形成」尾崎久仁子、国際刑事裁判所判事、第 2 副所長
- 2015.7.31 「検事の法整備支援：ラオス長期専門家としての経験から」伊藤浩之検事（大阪地方検察庁）

◇教育活動

大阪大学基礎セミナー「映画から読み解く国際問題：映画をネタにプレゼン技術を磨く」前期
 大阪大学「法と開発」前期
 大阪大学“Theory and Practice of Human Security and Development“ 前期
 大阪大学「法と共生社会実践演習Ⅰ・Ⅱ」前期・後期
 大阪大学「難民問題から世界を見る」後期
 大阪大学グローバルコラボレーションセンター 海外フィールドスタディ B オランダ「国際司法・平和の現場を知る」
 後期
 大阪大学 GLOCOL「海外プレ・インターンシップ」前期・後期

◇社会活動、センター外活動

弁護士とのネットワーク（難民インターン・コーディネート）

◇外部資金による研究

科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」（研究代表者：大橋一友）研究分担者
 平成 26 年度公益財団法人国際文化交流事業財団人物交流派遣事業「欧州共通庇護制度に関する研究」研究代表者

◇海外調査活動

2015 年 5 月 12 日～18 日、カナダ・カナダ難民強制移住学会に参加、発表（運営費交付金）
 2015 年 5 月 23 日～27 日、アメリカ・科研挑戦的萌芽研究「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」に関する意見交換及び情報収集を、「Joint NAFSA and URMIA Seminar on Risk Management」参加にて実施（科研費）
 2015 年 6 月 21 日～26 日、オランダ・グローニンゲン大学との共同シンポジウム「ヨーロッパ及びアジアにおける人種主義と不寛容 ― 課題と政策」で報告（他機関経費）
 2015 年 8 月 24 日～9 月 15 日、フランス・ストラスブールにある欧州評議会を拠点として、欧州共通庇護制度についての調査（助成金、私費）
 2015 年 10 月 7 日～12 日、オランダ・大阪大学・グローニンゲン大学共同シンポジウム「Go Global!!6 国際医療シンポジウム」で報告（他部局経費）
 2015 年 11 月 21 日～29 日、モロッコ・国際難民法裁判官会議に参加するため（運営費交付金）
 2016 年 1 月 18 日～24 日、オランダ・GLOCOL 海外フィールドスタディ・プログラム オランダ「国際司法・平和の現場を知る」事前調査（運営費交付金）
 2016 年 2 月 1 日～7 日、ミャンマー・ヤンゴン弁護士会で国際人権法の講義等（他機関経費）
 2016 年 2 月 13 日～22 日、オランダ・GLOCOL 海外フィールドスタディ・プログラム オランダ「国際司法・平和の現場を知る」（運営費交付金）

小峯茂嗣（こみね しげつぐ）

-----特任助教(国際協力グループ)

【学歴】東海大学法学部法律学科卒業（1994）、横浜国立大学国際社会科学研究科国際経済法学系博士前期課程国際関係法専攻修了（2001）、横浜国立大学国際社会科学研究科博士後期課程国際開発専攻単位取得満期退学（2004）【職歴】早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター客員講師（インストラクター）（2004-2007）、成蹊大学文学部非常勤講師（2007）、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター客員講師（非常勤扱）（2007-2010）、東京外国語大学大学院総合国際学研究科平和構築・紛争予防専修コース非常勤研究員（2007-2010）、成蹊大学文学部非常勤講師（2008-）、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター客員准教授（非常勤扱）（2010-2013）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教（2010-）、大阪大学大学院工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻兼任教員（2013-）、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター ボランティアコーディネーター（2013-）【学位】国際経済法学修士（横浜国立大学 2001）【専攻・専門】平和構築、平和・紛争研究

【2015 年度の活動報告】

◇出版業績

- 2016 「試行錯誤 — バングラデシュの農作業の改善にモノづくりで挑む」、GLOCOL ブックレット 18『大学とグローバル化 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の経験から』大阪大学グローバルコラボレーションセンター、pp.55-67.
2016 「グローバルに生きる!」、GLOCOL ブックレット 18『大学とグローバル化 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の経験から』大阪大学グローバルコラボレーションセンター、pp.134-135.

◇講演・口頭発表

- 2015 年 11 月 19 日「試行錯誤—バングラデシュの農作業の改善にモノづくりで挑む」GLOCOL セミナー(131)「アジアの課題と大学の知」

◇教育活動

- 大阪大学グローバルコラボレーション科目「海外フィールドスタディ A」、「海外フィールドスタディ B」
大阪大学グローバルコラボレーション科目「トランスカルチュラル・スタディ I」
大阪大学工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻「ビジネスエンジニアリング研究」
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター公認「Saopopo」コーディネーター
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター公認「日本ルワンダ学生会議」コーディネーター
成蹊大学文学部「国際協力論」（後期）

◇社会活動、センター外活動

- NGO アフリカ平和再建委員会（ARC）運営委員（事務局長）
特定非営利活動法人インターバンド 代表理事

◇外部資金による研究

- 科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究「発展途上国の農業支援ものづくりを志向したフィールド教育の実施と教育効果の分析」（研究代表者：大村悦二）研究分担者

◇海外調査活動

- 2015 年 4 月 27 日～5 月 4 日、バングラデシュ・科研挑戦的萌芽研究「発展途上国の農業支援ものづくりを志向したフィールド教育の実施と教育効果の分析」（研究代表者：大村悦二）の現地調査（他部局経費）
2015 年 8 月 3 日～7 日、韓国・日本コリア未来プロジェクト「38 度線平和活動」参加学生の引率指導（他機関経費）
2015 年 9 月 6 日～15 日、バングラデシュ・海外フィールドスタディ「開発途上国の生活環境の改善に貢献するモノづくりを提案する」の学生引率（他機関経費）
2015 年 9 月 17 日～21 日、ベトナム・早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター公認プロジェクト「Saopopo」参加学生の引率指導および協力協定締結手続き（他機関経費）
2016 年 2 月 17 日～20 日、韓国・大韓民国統一部訪問。統一部による脱北者定住促進支援の内容と今後の課題についてのヒアリング（運営費交付金）

大野光明（おおの みつあき）

-----特任助教（国際協力グループ）

【学歴】立命館大学国際関係学部卒業（2001）、立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫性博士課程修了（2012）【職歴】（財）日本国際協力センター職員（2001-2006）、独立行政法人国際協力機構（JICA）エチオピア事務所職員（出向）（2007-2009）、（財）日本国際協力センター職員（2009-2011）、日本学術振興会特別研究員（2011-2012）、立命館大学 GCOE「生存学」創成拠点リサーチ・アシスタント（2011-2012）、四国学院大学非常勤講師（2012-）、日本学術振興会特別研究員（2012-2013）、立命館大学衣笠総合研究機構客員研究員（2013-）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教（2013-）、同志社大学＜奄美・沖縄ー琉球＞研究センター学外研究員（2013-）【学位】学術博士（立命館大学 2012）【専攻・専門】歴史社会学、社会運動論、マイノリティ論

【2015 年度の活動報告】

◇出版業績

- 2016 「アジアの課題と大学の知」、GLOCOL ブックレット 18『大学とグローバル化 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の経験から』大阪大学グローバルコラボレーションセンター、pp.32-33.
- 2015 「この国は本当に平和なのか——沖縄戦終戦から 70 年、沖縄の「占領」は終わったのか」『週刊読書人』2015 年 6 月 26 日号。（共著）
- 2015 「「私」が政治を語り始めるとき、反戦・反基地の経験は継承されるか」『図書新聞』3219 号.
- 2015 「軍事基地がつくられるということ——京都での米軍基地建設と地域社会の軍事化」日本平和学会編『平和研究』45 号.
- 2015 「（新）植民地主義論という光のもとで「沖縄問題」を考える——創り出される現場から」立命館大学国際言語文化研究所『立命館言語文化研究』27 巻 1 号.
- 2015 「接続する反戦・平和運動へ——社会運動をめぐる言葉の現在地」『情況』第 4 期 4 巻第 9 号.
- 2015 「怒り抗う〈現場〉 「国家とは」根源的問い（10・21 県民大会から 20 年 展望を切り拓くために 下）」『琉球新報』2015 年 10 月 21 日.
- 2015 「在野の戦い——現場をつくり、立つということ（仮）」『PACE』10 号.（共著）

◇講演・口頭発表

- 2015 年 6 月 5 日 「沖縄闘争の時代から」、京都自由大学「沖縄から考える」、京都市.
- 2015 年 6 月 12 日 「沖縄の反戦・反基地民衆運動から学びなおす——阿波根昌鴻の思想と闘い」、NPO 法人アジア太平洋資料センター（PARC）自由学校「火をともし、何度でも一民衆思想の 100 年 後編」、PARC.
- 2015 年 6 月 20 日 「応答」立命館大学国際言語文化研究所、2015 年度国際言語文化研究所連続講座ブレ企画『戦後史再考』合評会、立命館大学.
- 2015 年 7 月 30 日 「京都・経ヶ岬における米軍MD基地と反対運動の現状と課題」、宇宙と平和・国際セミナー実行委員会、国際シンポジウム「宇宙と平和・国際セミナー@京都」、同志社大学（今出川校地）志高館 112 教室.
- 2015 年 9 月 19 日 「軍事化と地域社会の変容——京都府京丹後市宇川地区における米軍基地建設を事例に」、日本社会学会第 88 回大会、早稲田大学.
- 2015 年 10 月 23 日 「もう一つの地図を描きながら、〈地域〉を生きる／創る」、立命館大学国際言語文化研究所「10 月連続講座 70 年目の戦後史再考」、立命館大学.
- 2015 年 11 月 1 日 「軍事主義と植民地主義」、日本平和学会関西地区研究会シンポジウム「〈戦後 70 年〉を考える」、大阪大学.
- 2015 年 12 月 5 日 「沖縄、ベトナム反戦、黒人兵——太平洋横断的な運動史研究のために（仮）」、地域ベ平連研究会公開研究会「ベ平連研究の現在——社会運動論の再検討」、立教大学.
- 2015 年 12 月 6 日 「可変的な現実を生み出す反戦・平和の思想——岡本恵徳を読み直す（仮）」、ワークショップ「「沖縄」に生きる思想 岡本恵徳を想う」、成蹊大学.

◇教育活動

- 大阪大学グローバルコラボレーションセンター「グローバルコラボレーションの理論と実践」Ⅰ期
- 大阪大学全学教育推進機構「平和の問題を考える — 多角化する国際協力」Ⅰ期
- 大阪大学グローバルコラボレーションセンター「マイノリティとグローバリゼーション」Ⅱ期
- 四国学院大学「平和学特講（サマーセッション）」
- 関西大学「政治学と 21 世紀社会」、「導入ゼミ 1（社会科学入門）」、「プロフェッショナルリーディング——英語で学ぶ現

代日本社会とアジア」

◇社会活動、センター外活動

同時代史学会 関西研究会委員

◇外部資金による研究

科学研究費補助金 若手研究 (B)「沖縄の反基地運動と米軍黒人兵の連帯の力学ー太平洋を横断するネットワークの視点から」研究代表者

科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究「発展途上国の農業支援ものづくりを志向したフィールド教育の実施と教育効果の分析」(研究代表者:大村悦二) 研究分担者

◇海外調査活動

2016年3月9日～26日、アメリカ、科研費若手 (B)「沖縄の反基地運動と米軍黒人兵の連帯の力学ー太平洋を横断するネットワークの視点から」の史料収集とインタビュー調査(カリフォルニア州におけるベトナム反戦運動に関して)(科研費)

福田州平（ふくだ しゅうへい）

-----特任研究員（グローバル共生グループ）

【学歴】東海大学文学部北欧文学科卒業（1998）、東京国際大学大学院国際関係学研究科修士課程修了（2000）、中部大学大学院国際関係学研究科博士後期課程修了（2004）【職歴】中部大学リサーチ・アシスタント（2001-2004）、中部大学人間安全保障研究センター非常勤研究員（2004-2006）、中部大学国際交流センター嘱託事務員（2006-2007）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任研究員（2007-）【学位】博士（国際学）（中部大学 2004）【専攻・専門】国際関係論

【2015 年度の活動報告】

◇出版業績

- 2016 橋口裕子、福田州平「第 3 章 足もとの国際化と大学 対談 1：ハロハロ SQUARE（スクエア）における社会学連携」、GLOCOL ブックレット 18『大学とグローバル化 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の経験から』大阪大学グローバルコラボレーションセンター、pp.86-92.
- 2015 「総特集『グローバル・スタディーズ』を読んで」『地域研究』Vol.15 No.1、pp.204-208.

◇講演・口頭発表

- 2015 年 7 月 4 日「フィラデルフィア万博の機械館に見るアメリカのソフト・パワー」第 14 回日本国際文化学会全国大会、多摩大学。
- 2015 年 11 月 21 日「対談：ハロハロ・スクウェアについて」（橋口裕子氏との対談）足元の国際化と大学—グローバル時代における社会学連携の成果と課題—（GLOCOL セミナー132）、大阪大学豊中キャンパス。

◇教育活動

- 大阪大学法学研究科「現代中国研究」Ⅰ期
- 大阪大学法学研究科「現代中国研究特殊講義」Ⅰ期
- 大阪大学グローバルコラボレーションセンター「グローバル共生実践演習」Ⅱ期
- 大阪大学グローバルコラボレーションセンター「リサーチ・プロポーザル作成演習」Ⅰ期

◇社会活動、センター外活動

- 大阪大学生協同組合総代（吹田第一選挙区）
- 地域研究コンソーシアム運営委員
- 吹田市国際交流協会「ハロハロ SQUARE」の活動支援（詳細は p.75）

◇外部資金による研究

- 科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究「フィラデルフィア万博に注目した米中日国際文化関係の研究」研究代表者

◇海外調査活動

- 2015 年 8 月 17 日～22 日、アメリカ・科研挑戦的萌芽「フィラデルフィア万博に注目した米中日国際文化関係の研究」の調査（科研費）

IV. 実践支援活動

1. JICA 連携事業

昨年度に引き続き、主に JICA との連携協定にもとづいた事業を推進した。大阪大学は 2007 年 2 月に JICA との間で以下の連携協力協定を結んだ。GLOCOL はこの連携協力協定の内容を具体化する役割を担っている。

連携目的

- (1) 国際協力に関する研究の推進
- (2) 国際協用に資する人材の育成
- (3) その他国際協力にかかわる事業の実施

連携協力

- (1) 国際協力にかかわる研究の推進と成果の公開
- (2) 国際協力にかかわる啓発的事業の実施
- (3) 講師の相互派遣その他大阪大学と JICA 間の人的交流
- (4) 国際協用のための専門家および調査団の派遣
- (5) 国際協用のための研修プログラムの実施
- (6) 学生の青年海外協力隊などへの参加に対する支援
- (7) 学生の JICA インターンシップへの参加に対する支援
- (8) 国際協用に携わる要員の教育・訓練に対する支援
- (9) 施設の相互有効利用
- (10) その他、双方が合意する連携プログラム

● JICA 関西夏期インターンシップ実習事業

大阪大学と JICA の連携協定にもとづき、国際協用に関心をもつ大学生・大学院生を対象に、JICA 関西国際センター（JICA 関西）にインターン実習生を派遣する事業を実施した。本事業の目的は、学生に実務経験の場を提供し、国際協用に携わる人材を育成することである。インターン実習生の公募は、GLOCOL が大阪大学での窓口となつて行われた。応募資格をもつ対象者は、大阪大学の学部または大学院に在学中の者で、国際協力や開発援助に深い関心があり、将来的に国際協用に関連した仕事に携わる意志をもつ者とした。2015 年度に本プログラムにより派遣されたインターン実習生は、下記の 1 名であった。

外国語学部外国語学科 3 年

実習期間：2015 年 9 月 7 日～9 月 18 日

実習内容：研修員受入事業、開発教育支援事業、広報事業の一般業務補助

2. 学生支援活動

GLOCOL では、設立以来、実践的研究を志す大学院生や若手研究者のキャリア形成を支援する目的で、多様な学生支援活動（若手研究者を含む）を行ってきた。

GLOCOL では、STA、TA、RA、アソシエイツ、招へい研究員などの採用を体系化し、招へい研究員を除くカテゴリーで明確な到達目標を掲げた公募をおこなうとともに、招へい研究員の採用においても、GLOCOL のミッションとの関連性に加え、キャリア形成の視点を重視している。

個々のプロジェクトでは、「地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ」「GLOCOL プレゼンコンテスト」「ハロハロスクエア」（外国人児童生徒の学習支援に関する吹田市国際交流協会との共同事業）が、有償無償を問わず学生、大学院生のキャリア形成に資する目的でおこなわれている。

世界では、人材のグローバルな移動が常態化しつつある。日本国内の労働市場は、教育制度のグローバル化への対応の遅れもあって、その影響はいまだ限定的であるが、早晚、労働市場も、教育制度も、そうした人材の流動性の影響を免れ得なくなるであろう。今後、大学は、グローバルな人材の移動の結節点としての役割を益々期待されていくことになるだろうが、教育を通して、こうしたトレンドに即した人材を育成することに加え、将来的に、国際機関や海外の NGO 等との間で多様なレベルでの人材交流をすすめることも必要である。国際協力等の実践に携わる実務家は、専門性に即してひとつの国際機関や海外の NGO 等から別の機関へと頻繁に移動するが、その合間に GLOCOL に籍をおき、GLOCOL から次の仕事にすすんでいくといった仕組みを用意できれば、同様の実践を志す学生にとって大いに資するであろう。GLOCOL の組織が特任教員を主体としていることも、こうしたトレンドに沿ったものであるが、今般の大学では、特任の雇用は不安定な雇用としか見られておらず、人事交流という観点は欠如している。このため現状では、国際機関や海外の NGO 等で働く人たちが立ち寄ってくれるような組織になっているとは言い難い。今後、大学、さらには日本国政府のグローバル人材育成に向けての本気度が試されるところであろう。



V. 学内連携事業

1. 未来戦略機構との連携

未来戦略機構は総長のリーダーシップのもと、部局横断的な教育・研究を推進するために2012年度より設置されている。未来戦略機構の説明には「専門領域の教育・研究はこれまで各部局で行われていましたが、現代社会には多様な面から解決すべき幾多の課題が立ちはだかり、専門領域を越えた新たな取り組みが求められています。そのため、未来戦略機構では総長を機構長として、中長期的視野に立ち大学全体を俯瞰しつつ、部局横断的に教育・研究を推進します。」と述べられている。未来戦略機構設置の主旨はGLOCOLの設置理念とつながるものがありGLOCOLは機構側の要請を受けて、機構の運営を通じての部局横断的な教育・研究に貢献した。

1) 超域イノベーション博士課程プログラム

このプログラムは、文部科学省による「博士課程教育リーディングプログラム」のオールラウンド型に採択されたプログラムであり、大阪大学未来戦略機構第一部門に位置付けられている。GLOCOLは本プログラムに対し、主として海外体験型教育プログラムの構築と実施に参画した。GLOCOLからは、宮原 暁教授、敦賀和外特任准教授らが、兼任教員としてプログラム委員会に参加し、吉富志津代特任准教授が「超域学際・ボランティア実践論」の授業を担当し、神戸市でのフィールドスタディの運営・実施に携わった。

2) 未来共生イノベーター博士課程プログラム

このプログラムは、大阪大学未来戦略機構第五部門に位置付けられている。GLOCOLは本プログラムの選択科目として、「グローバルコラボレーションの理論と実践」、「グローバル共生実践演習」、「多言語共生社会演習」を提供した。兼任教員として、吉富志津代特任准教授は産学官連携WG、常田夕美子特任准教授は国際連携WGの一員としてプログラム委員会に参加し、運営に携わった。さらに本プログラム用に、マルチメディア教材「自然環境と地域文化との調和ーコミュニティ防災の視点から」の副読本およびDVD映像教材を作成した。

2. 全学教育推進機構との連携

大阪大学全学教育推進機構（CELAS）は、学部から大学院までの教養教育のさらなる充実、各部局を中心とした教育プログラムによる教育改革の全学的な展開、大学内の教育資源を活かした語学教育の充実、教育の質保証に向けた学習機能の強化等を図り、大学として組織的に教育を推進するため、「大学教育実践センター」を発展的に解消し、2012年4月1日に設置された。

全学教育推進機構は、大学院を含む教養教育や全学横断的な教育を企画する機能等を持った組織であり、企画開発部と実施調整部の2つの部を置き、企画開発部の下には6つの部門（学部共通教育部門、大学院横断教育部門、言語教育部門、海外教育部門、スポーツ・健康教育部門、教育学習支援部門）、実施調整部の下には3つの部会（基礎教育部会、教養教育部会、言語教育部会）が置かれている。

GLOCOLは、企画開発部の海外教育部門と大学院横断教育部門の2つの部門の運営に参画してきた。海外教育部門においては、国際教育交流センターと並んで主管部局となっており、GLOCOLセンター長が部門長を務めた。大学院横断教育部門においてGLOCOLは、グローバルコラボレーション科目、高度教養プログラム「知のジムナスティック」、高度副プログラムの一部を開発、提供している。（詳細はpp.31-32）

3. 兼任教員会議

GLOCOL 兼任教員との情報交換および連携促進のための機会として、毎年、兼任教員会議を開催している。兼任教員会議では、GLOCOL の活動報告、年次計画の報告を行っている。今年で 10 回目となる兼任教員会議は、今までの GLOCOL での取り組みや今後の方針などについて報告とディスカッションがなされた。

【開催日・場所】

2015 年 2 月 16 日、本部棟 301 会議室（吹田キャンパス）

【概要】

プログラム

- ・外部評価を終えて ― 継承すべきこと
平田收正（GLOCOL センター長：2014.004-）
- ・歴代センター長より
小泉潤二（GLOCOL 元センター長：2007.04-08）
栗本英世（GLOCOL 元センター長：2007.08-2011.08）
大橋一友（GLOCOL 前センター長：2011.08-2014.03）
- ・フリーディスカッション
- ・コメント



4. フィールドスタディに関する学内連携

2015 年度、GLOCOL では計 5 本の海外フィールドスタディ・プログラムを実施した。これらのプログラムに参加した学生の所属は、文系・理系を問わず、さまざまな部局にわたった。参加学生の部局別の詳細については、p.25 を参照のこと。また、プログラム実施にあたっては、工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻との協働、国際公共政策研究科教員のプログラムへの参画などこれまでの連携を継続してさらに深めることができた。

5. セミナー

学内の他部局と協力して主催、また、他部局が主催するセミナーなどを GLOCOL が共催や協力をして開催した。

● 国連創設 70 周年記念特別セミナー 国際の平和と安全維持における国連の役割

【講師】

アンゲラ・ケイン（国連軍縮担当上級代表）

【開催日・場所】

2015 年 6 月 10 日、OSIPP 棟 6F 会議室（豊中キャンパス）

【言語】

英語

【概要】

国連創設 70 周年記念特別セミナーとして、国連軍縮担当上級代表のアンゲラ・ケイン氏を講師に迎え、国際の平和と安全維持における国連の役割について講演していただいた。学生が興味のある国連でのキャリアアップのお話もしていただき、学生からの質問も多数出ている。

【備考】

主催：国際公共政策研究科国連政策センター（CUNPS）

共催：GLOCOL



● 2015 年 UC Berkeley 国際シンポジウム アメリカ合衆国、中国、日本のウェルネス・イノベーション 自然科学と社会科学のトランスレーショナル・リサーチ

【開催日・場所】

2015 年 8 月 5 日、理学研究科 B301（豊中キャンパス）

【言語】

日本語と英語（日本語発表の要約を英訳）

【概要】

プログラム

開会の辞：副学長、稲盛財団寄附講座長 星野俊也（国際公共政策研究科）

理学研究科長 篠原 厚（理学研究科）

司会：国際交流センター・副センター長 久保孝史（理学研究科）

話題提供 1：「イノベーションのための健康科学研究とバークレイ・ウェルネス・モデル」

Winston Tseng（カリフォルニア大学バークレイ校社会健康科学部、健康行動科学研究所、エスニック・スタディーズ学科）

話題提供 2：「健康な自然環境のための地球科学のイノベーション」

中嶋 悟（理学研究科）

話題提供 3：「アメリカ合衆国と日本におけるメンタル・ヘルスのための多文化支援のイノベーション」

星野和実（理学研究科国際交流センター、GLOCOL）

討論

閉会の辞：CAREN 代表 田中敏宏（工学研究科）



※この国際シンポジウムは一般社団法人日本心理臨床学会の研究助成（研究代表者：星野和実）を受けて行われた。

【備考】

主催：理学研究科国際交流センター

共催：GLOCOL、CAREN（アジア人材育成教育拠点プログラム）、国際公共政策研究科・稲盛財団寄附講座グローバルな公共倫理とソーシャル・イノベーション、ヒューマンウェアイノベーション博士課程プログラム、工学研究科国際交推進センター、基礎工学研究科留学生相談室、医学系研究科公衆衛生学教室、国際医療センター、風間書房、日本発達心理学会ナラティブと質的研究分科会

後援：大阪大学とカリフォルニア大学との学術交流推進室、大阪大学北米同窓会、文学研究科臨床哲学専門分野、人間科学研究科臨床心理学分野

● 公衆衛生セミナー

日本における健康の社会決定要因

(The Osaka Public Health Symposium: Social Determinants of Health in Japan)

【開催日・場所】

2015年8月8～10日、最先端医療イノベーションセンター棟（吹田キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

社会医学の分野で世界をリードしているユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンのEric Brunner 博士（大阪大学招へい教授）、ケーブル典子博士（上級研究員）、我が国の公衆衛生や社会疫学をリードする先生方をお招きし、日本の社会決定要因について学ぶ3日間の集中セミナーをおこなった。

【備考】

主催：大阪大学大学院医学系研究科公衆衛生学

共催：GLOCOL



● ソーシャル・イノベーションが拓く未来

【開催日・場所】

2015年10月18日、基礎工学国際棟シグマホール（豊中キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

近年、既存の制度や分野の変革、融合を促しながら様々な社会的課題を解決することを目的とする「ソーシャル・イノベーション」が注目されています。民間、政府、非営利団体、大学など各セクターがそれぞれの特性を活かしつつ、協働によって新たな社会的価値を創造し、医療、環境、教育、貧困削減など様々な社会的課題の解決を図ることは、世界及び日本の将来を考える上で重要な命題となっている。「社会と知の統合」は大学に求められている重要な役割であり、大阪大学においても、公益財団法人稲盛財団からの寄附を受けて国際公共政策研究科の研究教育活動の一環として2012年4月より「グローバルな公共倫理とソーシャル・イノベーション」をテーマとした寄附講座を開設したのも、社会変革を導き、よりよい未来を構築するリーダーを養成することが主眼となっている。

本シンポジウムでは、2003年の発刊以来、ソーシャル・イノベーションの学術的発展や理論と実践の融合を牽引し、



「ソーシャル・イノベーションの教科書」とも言える「スタンフォード・ソーシャル・イノベーション・レビュー」(Stanford Social Innovation Review) の出版元である PACS のキム・メレディス所長を招へいし、ソーシャル・イノベーションの歴史的展開と将来の展望及び米国などでの実践例について語っていただき、日本においてソーシャル・イノベーションを醸成するエコシステムの発展に尽力されている専門家や各分野で先進的な取り組みをされている実践家の方を交えたパネルディスカッションを行った。

プログラム

- ・基調講演： Ms. Kim Meredith (Executive Director, Stanford PACS) (同時通訳あり)

- ・パネルディスカッション

第一部「日本におけるソーシャル・イノベーションの歴史と現状」

モデレーター：井上英之氏（慶應義塾大学 特別招聘准教授／INNO-Lab International 共同代表）

パネリスト：鶴尾雅隆氏（日本ファンドレイジング協会 代表理事）

佐々木健介氏（NPO 法人 ETIC インキュベーション事業部 マネジャー）

工藤七子氏（日本財団ソーシャルイノベーション本部 社会的投資推進室）

西村勇哉氏（NPO 法人ミラツク代表理事、大阪大学大学院国際公共政策研究科招へい教員）

第二部「ソーシャル・イノベーションプレイヤーの紹介と今後の展望」

モデレーター：星野俊也氏（大阪大学理事・副学長）

パネリスト：奥田晴久氏（パナソニック株式会社ブランドコミュニケーション本部）

松島由佳氏（クロスフィールズ共同創業者・副代表）

中村俊裕氏（コペルニク共同創始者兼 CEO、大阪大学国際公共政策研究科招へい准教授）



【備考】

主催：国際公共政策研究科（OSIPP）稲盛財団寄附講座

共催：Stanford Center on Philanthropy and Civil Society: Stanford PACS（スタンフォード大学「フィランソロピーと市民社会センター」）

協力：GLOCOL

公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS 大阪大学・京都大学連携プログラム）



● 環太平洋大学協会 グローバルヘルスワークショップ

【開催日・場所】

2015 年 10 月 30～11 月 1 日、医学系研究科最先端医療イノベーションセンター（10/30、31）、銀杏会館（11/1）（吹田キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

環太平洋大学協会は、環太平洋 16 か国、45 大学の学長で構成される組織で、各国の高等教育の相互協力関係を強め、環太平洋地域社会にとって重要な諸問題に対し、教育・研究の分野から協力・貢献することを目的としている。このワークショップでは、環太平洋の大学の研究者・学生・行政関係者等が一堂に集まり、グローバルヘルスに関する教育研究の現状と課題について議論し、教育研究活動の提携の強化や国際共同研究の発展へとつなげることを目的とし開催した。グローバルヘルスに関与している多くの人々とのネットワークを広げるまたとないチャンスとなった。

【備考】

主催：医学系研究科公衆衛生学

共催：GLOCOL

● 国際開発セミナーシリーズ

本部、地域事務所、カントリーオフィスから見た世界保健機関（WHO）の仕事
— 国際機関で働くということ

【講師】

竹内百重（WHO カンボジア事務所 保健システム開発アドバイザー）

大谷順子（人間科学研究科教授）

【開催日・場所】

2015 年 11 月 27 日、人間科学研究科 東館 404（吹田キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

プログラム

第Ⅰ部：本部、地域レベル、カントリーレベルでの WHO の役割
カンボジア保健セクター支援などを例に（竹内百重）

・質疑

第Ⅱ部：国際機関で働くことの意義（竹内百重）

・総括コメント（大谷順子）

・質疑

【講師紹介】

竹内百重氏：WHO カンボジア事務所 保健システム開発アドバイザー。上智大学大学院（国際経済・開発学修士）、東京大学大学院（保健学博士）修了。国立病院管理研究所（当時）、民間シンクタンク、私立大学講師などを経て、2001 年に JPO として世界保健機関（WHO）本部に赴任。以後、本部（ジュネーブ）、西太平洋地域事務所（マニラ）、2 カ所のカントリーオフィス（バングラデシュおよびカンボジア）で保健システム強化、保健政策・財政、ポリオ撲滅・予防接種拡大計画、プログラム計画管理などに従事し、2014 年より現職。

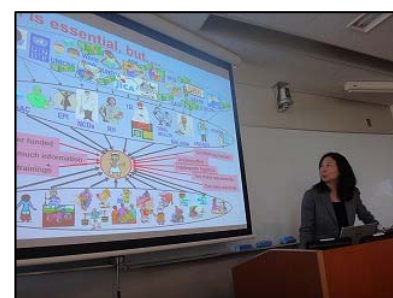
大谷順子：大阪大学大学院人間科学研究科教授。副理事（社会学連携室）、大阪大学東アジアセンター長（海外拠点・上海オフィス）、大阪大学大学院人間科学研究科・教授。世界銀行、世界保健機関（WHO）中国代表事務所（北京）およびジュネーブ本部勤務。主な著書に『国際保健政策からみた中国—政策実施の現場から』九州大学出版会、2007 年。『人間の安全保障と中央アジア』（編）、花書院、2010 年、など他、多数。

【備考】

主催：人間科学研究科グローバル人間学系

共催：GLOCOL

東アジアセンター（海外拠点 上海オフィス）



● CLIC Cafe : 社会人と語り、自分の未来をデザインしよう

現役国際機関職員が語る — 理系人材が国際機関で働くには！

【講師】

和田満美（国際連合食糧農業機関ローマ本部人事・財務局）

【開催日・場所】

2016 年 1 月 13 日、産連本部 C 棟（e-square）3 階さいえんす工房（吹田キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

実際に国際機関への就職活動を体験した立場から率直な話をしていただいた。国際機関は文系のイメージが強いが、国際連合食糧農業機関（FAO）・国際農業開発基金（IFAD）・世界食糧計画（WFP）ローマに本部を置く国際機関は理系色が強いことや、インターン・就職につなげるコツなどをお話し頂いた。



【備考】

主催：21 世紀課題群と中国（大阪大学未来研究イニシアティブ）

共催：GLOCOL、MULTUM で切り拓くオンサイトマススペクトロメトリー（大阪大学未来研究イニシアティブ）

● GLOCOL セミナー（138） / 「シリーズ：適正技術 Design for Life」（13）
Design for Life — 地域が変わるものづくり
ふるさと納税で地域を元気にしたい：地域活性化の仕掛けとこれから

【講師】

須永珠代氏（株式会社トラストバンク 代表取締役社長）

【開催日・場所】

2016 年 1 月 21 日、豊中総合学館 501 講義室（豊中キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

「生まれ育ったふるさとに貢献したい」、「自分の意思で応援したい自治体を選びたい」といった思いを叶えるために 2008 年に創設された「ふるさと納税」。今、特産品などの特典も人気となって自治体への寄附が飛躍的に伸びている。本セミナーでは、ふるさと納税のポータルサイト「ふるさとチョイス」を立ち上げ、ふるさと納税ブームを巻き起こした株式会社トラストバンク社長の須永氏を招き、起業のきっかけ、地方創生への想い、そして今後の展望や課題について語っていただいた。

【講師紹介】

2012 年 4 月にトラストバンクを設立し、同年 9 月、ふるさと納税ポータルサイトのメディアを立ち上げる。地域に「ヒト」「モノ」「カネ」「情報」を循環させるにはどうしたらよいかを考え、「カネ」が直接地域に動くふるさと納税に着目。ふるさと納税の「情報」を発信することで、地域に「カネ」が流れ、地域から「モノ」が動き出し、さらには観光 PR を行うことで「ヒト」も地域へと動き出している。ふるさと納税を通じた地域支援を行うため、全国の自治体を訪問しコンサルを行い、日本初となるふるさと納税全国セミナーを全国 100 か所以上で実施。延べ 2,000 名以上がセミナー参加。2015 年 12 月、日経「ウーマン・オブ・ザ・イヤー 2016」大賞を受賞。

【備考】

主催：コミュニケーションデザイン・センター

共催：GLOCOL

公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS 大阪大学・京都大学連携プログラム）

後援：株式会社 JTB 西日本



● 産学連携国際協力シンポジウム 第2回 ベトナム・ネクスト メコンデルタを開く日本の技術

【開催日・場所】

2016年3月4日、中之島センター7F 講義室 702

【言語】

英語、日本語

【概要】

ベトナムは、1987年に始まったドイモイ政策以降、社会主義市場経済の導入によって、新興国の仲間入りをするまでに成長した。しかし、同時に、人口の質、産業構造の在り方、環境問題への対応、社会保障、グローバル化など、単なる経済成長にとどまらない「次のステップ」への進化が求められている。このような問題意識に鑑み、大阪大学では未来研究イニシアティブのプロジェクトとして、「メコン川流域ベトナム南部における地域適合型の包括的な環境再生ソリューションモデルの形成」を実施するとともに、GLOCOLにおいては、ベトナムの高等教育支援をはじめとする国際協力に積極的に参加してきた。今回のシンポジウムでは、ベトナムの次のステップを、大学だけでなく産業界とも連携して構築していくための機会とした。

プログラム

開会の辞「地球健康環境教育研究センター構想」

平田收正（GLOCOL センター長）

「日本の ODA によるカンター大学強化事業」 Dr. Nguyen Van Be（カンター大学国際部長）

「メコンデルタ：カンター大学と大阪大学」 住村欣範（GLOCOL 副センター長）

Session 1: 薬剤耐性菌と食品安全

「ベトナムの畜産における薬剤耐性菌の問題」 Dr. Nguyen Cong Ha（カンター大学農学・応用生物学部（食品化学部門）副教授）

「ベトナムの環境の抗生物質汚染」 原田和生（大学院薬学研究科講師）

Session 2: ダイオキシンのモニタリングと処理

「ベトナムにおける微生物を用いたダイオキシン処理」 Dr. Duong Minh Vien（カンター大学農学・応用生物学部（土地科学部門）講師）

「日本における有害化学物質汚染の浄化対策実績」 西村 実（(株)エンバイオ・ホールディングス代表取締役）

Session 3: バイオエネルギーと有用物生産のコベネフィット

「メコンデルタの稲のもみ殻を用いたバイオ炭」 Dr. Nguyen Van Cong（カンター大学環境・天然資源学部 副学部長）

「メコンデルタのバイオマスエネルギーと有用物生産の可能性」 住村欣範（GLOCOL 副センター長）

総括コメント・ディスカッション

「メコンデルタにおける地域適合型の包括的な環境再生ソリューションモデルの形成」 三宅 淳（大学院基礎工学研究科教授）

閉会の辞 星野俊也（理事・副学長：グローバル連携担当）

【備考】

主催：大阪大学未来研究イニシアティブ・グループ支援事業「メコン川流域ベトナム南部における地域適合型の包括的な環境再生ソリューションモデルの形成（発展途上国の環境問題を総合的に支援するための技術統合グループの形成を目指して）」代表者：三宅 淳

共催：GLOCOL



VI. 学外連携事業

1. 社会学連携

- パイリンガル環境で育つ子どもたちの言語形成に考慮した教育環境整備事業
— 韓国との連携で広げるネットワーク構築へ（トヨタ財団助成事業）

神戸と韓国・ソウルにて、国際シンポジウムを開催し、いずれも 100 名を超える参加者で、熱心な質疑応答がおこなわれ、関係者のラウンドテーブルでも、関係機関への提言についての具体的なディスカッションが行われた。報告書は、日本語、韓国語、英語に翻訳し、2016 年はこれを、移民送り出し国であるフィリピンに伝え、情報を共有する予定である。

- ・神戸での開催（詳細は pp.88-90）
- ・韓国（ソウル）での様子



- 「大学とグローバル化 — 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の経験から」
「足もとの国際化と大学 — グローバル時代における社会学連携の成果と課題」

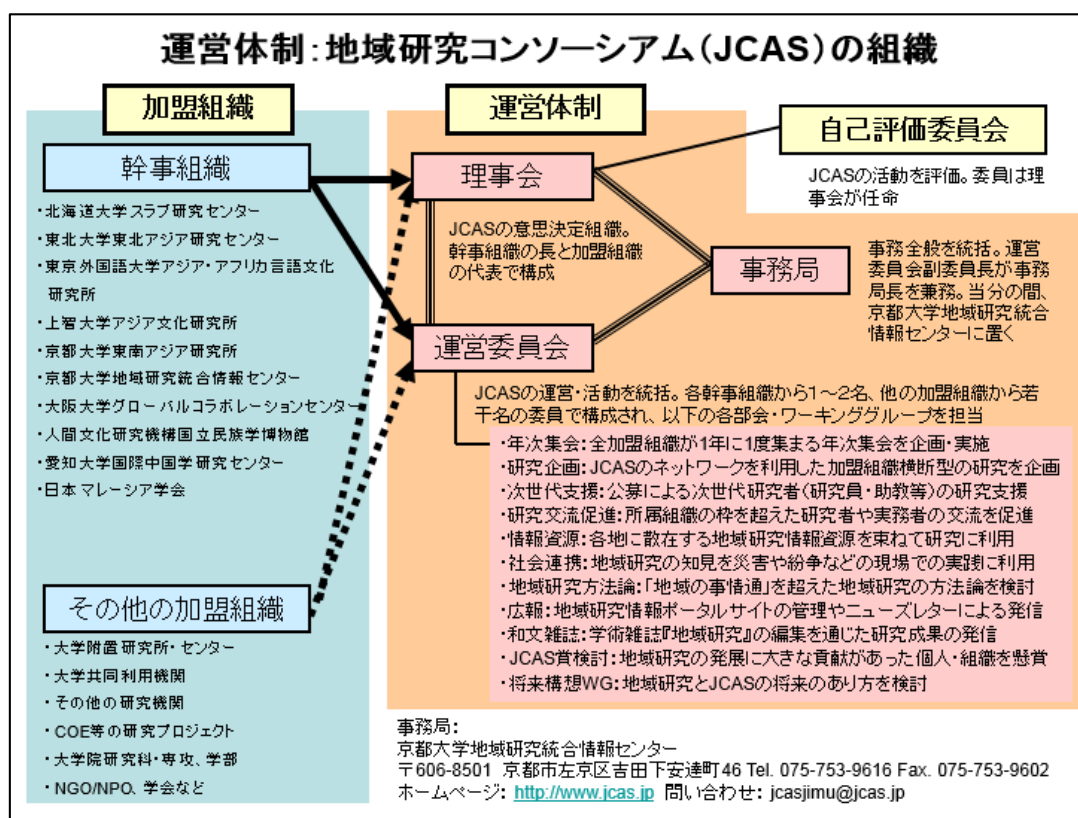
GLOCOL は「足もとの国際化」をキーワードに、身近にあるグローバル化と多文化共生の重要性について研究・教育・実践支援活動を行ってきた。これまでの成果を紹介し、大学の社会における役割の今後の展望も含めて、地域の NGO/NPO や行政の参加者とともに、地に足をつけたグローバルな視点で共生について考えるセミナーを開催した。（詳細は p.88-90）

2. 他機関との連携

● 地域研究コンソーシアムへの参加

世界の諸地域で発生するグローバルかつ、ローカルな諸問題に対し、GLOCOL では、地域研究を基盤に据えつつ、人文社会科学、自然科学の様々な専門分野が共同し得るプラットフォームを提供してきた。そうした外部に開かれたネットワークを支えてきたのが、地域研究コンソーシアムと GLOCOL の連携である。

地域研究コンソーシアム（JCAS）は、世界諸地域の研究に関わる研究組織、教育組織、学会、そして地域研究と密接に関わる民間組織などからなる、新しい型の組織連携である。GLOCOL は、旧大阪外国語大学から引き継ぐ形で、2007 年以降、JCAS の幹事組織の一つとして、我が国の地域研究に大きな足跡を残してきた。その活動実績は、JCAS の幹事組織はもとより、加盟組織からも高く評価され、GLOCOL の消滅を惜しむ声も多い。社会連携プロジェクト、研究交流促進プログラムなど、GLOCOL と JCAS が連携して行ってきたいくつかのプロジェクトは、今後も JCAS のなかで継承されていくことだろう。



● 移民政策学会 2014 年度冬季大会

【開催日・場所】

2014 年 12 月 13 日、ステューデント・コモンズ（豊中キャンパス）

※共催。詳細は pp.90-91 へ。

3. 学会役員、民間団体役員など

GLOCOL スタッフは、各種の学会役員、民間団体役員などを務めている。2015 年度の活動は以下のとおり。

学会役員など

薬学教育評価機構評価委員長（平田收正）
薬学教育協議会薬学教育者 WS 実施委員長（平田收正）
日本華僑華人学会常任理事（宮原 暁）
地域研究コンソーシアム運営委員長（宮原 暁）
日本公衆衛生学会評議員（本庄かおり）
日本疫学会評議員（本庄かおり）
移民政策学会常任理事・企画委員長（吉富志津代）

民間団体役員など

中国環境保護 NGO「自然之友」理事（思沁夫）
ツァガンボルガソ遊牧民環境保護組合顧問（思沁夫）
ロシアブリヤード共和国民間組織（NGO）「エヴェンキ文化保護・人材育成会」教員（思沁夫）
世界トナカイ放牧者協会 理事（思沁夫）
財）兵庫県人権啓発協会人権問題研究アドバイザー（吉富志津代）
財）箕面市国際交流協会評議員（吉富志津代）
兵庫県長期ビジョン審議会委員（吉富志津代）
ひょうご市民活動協議会共同代表（吉富志津代）
特定非営利活動法人多言語センター理事長（吉富志津代）
特定非営利活動法人エフエムわいわい代表理事（吉富志津代）
特定非営利活動法人たかとりコミュニティセンター常務理事（吉富志津代）
特定非営利活動法人シャブラニール＝市民による海外協力の会評議員（吉富志津代）
NGO アフリカ平和と再建委員会（ARC）運営委員・事務局長（小峯茂嗣）
特定非営利活動法人インターバンド代表理事（小峯茂嗣）

4. セミナー・イベントなど

● ジェトロ・アジア経済研究所・大阪大学共同セミナー 障害と開発

【開催日・場所】

2015年5月21日、人間科学研究科51講義室（吹田キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

世界の貧困者数の半減など8つの目標を掲げ、2000年に定められたミレニアム開発目標（MDGs）は、その達成期限である2015年を前に多くの成果が上がっている。中国やインドの経済成長が大きな推進力となって、東アジアの貧困削減は大きな進展を見せ、南アジアの貧困人口比率も着実に低下している。

その一方で、経済成長の恩恵に与れないグループの人々が存在し、不利な立場に置かれた人たちが取り残される危険が懸念されている。国連の推計によると、世界の人口の10～15%（約7～10億人）が障害者で、そのうち約8割が開発途上国で暮らしている。また、このグループの中でも、女性、子ども、スラム居住者のようにMDGsの目標として明示的に位置づけられている人々がいる反面、MDGsにさえ反映されていないグループの人々もいる。障害者は、まさしく後者のグループに属する。ジェンダー、教育、保健、環境といった領域と比較すると、障害課題に対する取り組みは遅れている。開発過程に障害者が主体的な一員として関わっていくことは重要である。

「障害と開発」に関する豊富な研究蓄積を持つジェトロ・アジア経済研究所の知見を大阪大学と共同で発表することにより、学術的な観点から社会に還元・普及するとともに、パネルディスカッションを通じて今後の研究の発展につなげることとなった。



プログラム（手話通訳付き）

開会挨拶：河森正人（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

司会：野村茂樹（ジェトロ・アジア経済研究所研究支援部長）

<第1部 講演>

はじめに「開発課題としての障害」

森 壮也（ジェトロ・アジア経済研究所開発研究センター主任調査研究員）

「フィリピンの障害者の生計 ―何が彼らの貧困をもたらしているのか―」

森 壮也、山形辰史（ジェトロ・アジア経済研究所国際交流・研修室長）

「中国の障害者 ―雇用法制と就労実態―」

小林昌之（ジェトロ・アジア経済研究所開発研究センター主任調査研究員）

「障害と働くということ ―日本とタイの経験から―」

河森正人

<第2部 パネルセッション・質疑応答>

モデレーター：山形辰史

パネリスト：森 壮也、小林昌之、河森正人、川口 純（大阪大学大学院人間科学研究科助教）

閉会挨拶：野村茂樹

【備考】

主催：ジェトロ・アジア経済研究所

人間科学研究科グローバル人間学専攻

共催：GLOCOL

● 世界難民の日シンポジウム 「世界難民の日 関西集会 2015」

【講演者】

小尾尚子（国連高等難民弁務官事務所（UNHCR）駐日事務所副代表（法務部））

【開催日・場所】

2015 年 6 月 28 日、中之島センター10F 佐治敬三メモリアルホール

【言語】

日本語

【概要】

2000 年 12 月 4 日の国連総会決議 55/76 によって、1951 年難民条約が採択されて 50 周年となる 2001 年から毎年 6 月 20 日は「世界難民の日」として、難民について理解を深める日となっている。主催者である世界難民の日関西集会実行委員会は、日本に庇護を求めてきた難民がいること、彼・彼女らが置かれている状況、私たちが改善しなければならないことを 10 年前から訴え、集会を行っている。このシンポでは、10 年の歩みを紹介し、小尾氏より国連における年民保護の取り組みについて講演いただいた。これらの様子は「Ustream」にて中継された。

プログラム

開会の挨拶 ～10 年の歩み～

講演「国連の国際的な難民保護の取り組みについて」

小尾尚子：国連高等難民弁務官事務所（UNHCR）駐日事務所 副代表（法務部）

難民からの事例

難民裁判について

難民支援 NGO の取り組みや報告など

【備考】

主催：2015 年世界難民の日関西集会実行委員会

共催：GLOCOL

後援：公益社団法人アムネスティ・インターナショナル日本

全国難民弁護団連絡会議

特定 NPO 法人 難民フォーラム（FRJ）

特定非営利活動法人 関西国際交流団体協議会

協力：難民ナウ



● 公開シンポジウム バイリンガル教育を考える国際シンポジウム 2つ以上の言葉の狭間で生きる子どもたち

【開催日・場所】

2015 年 8 月 27 日、兵庫県教育会館ラッセホール リリーの間（神戸市中央区中山手通 4 丁目 10-8）

【言語】

日本語、英語

同時通訳対応（要事前申込）：英語・韓国語・スペイン語、

託児サービス（要事前申込）：無料

【概要】

2 つ以上の言語環境で生きる子どもたちが理解力・思考力・表現力を不足なく学習できるよう、ひとりひとりの言語習得状況を考慮した教育について考えたシンポジウムであった。



プログラム

1. 基調講演：“すべての言語は平等です”

— アメリカ・ミシガン州における日本語・英語のバイリンガル教育の実践から

講師：テッド・デルフィア氏（Michigan Japanese Bilingual Education Foundation 会長）

2. インタビュー：ロサ イセラさんに聞く“わたしのことば、わたしの道”

ロサ イセラ・ドミンゲスさん（サンタクルス日本語普及学校 教師）

聞き手：松原 ルマ ユリ アキズキ（映像作家）

3. シンポジウム：“多言語の子どもたちの教育現場から”

パネリスト：テッド・デルフィア

朴 亨植（仁川ハンヌリ学校 校長）

秋宗英生（兵庫県立国際高等学校 校長 / 兵庫県立芦屋国際中等教育学校 前校長）

モデレーター：吉富志津代（ワールドキッズコミュニティ 代表／大阪大学 GLOCOL 特任准教授）

コメンテーター：落合知子（神戸大学 研究員）

ロサ イセラ・ドミンゲス

【講師紹介】

テッド・デルフィア氏：「Michigan Japanese Bilingual Educational Foundation」（ミシガン日本語バイリンガル教育基金/MJBEF）創設者。ひのきインターナショナルスクール前校長。3児の父であり、2004年に妻と共に、日本語イマージョン幼稚園「ひまわり 幼稚園」を設立。その後、「ミシガンで、日本とアメリカの文化を両方尊重し、体験できる居場所をつくりたい」と、公立学校としての双方向バイリンガル・イマージョン学校「ひのきインターナショナルスクール」も設立し、校長を務める。2014年に退任後、新たに「にじいろ日本語イマージョン小学校」など、リボニア学区公立小学校の設立を手掛け、MJBEFを通して、現在も同校のサポートを続けると同時に、将来的には、幼稚園入園から高校卒業まで一貫して学べるバイリンガル環境の実現に励む。

ロサ イセラ・ドミンゲス氏：1983年生まれ、ボリビア サンタクルス出身。サンタクルス日本語普及学校教師。1994年11月、10歳の時両親が出稼ぎしていた日本の大阪府に引越す。日本語を理解しないため当初は小学校二年生に転入、中学校二年生で神奈川県へ。その後、県立高等学校へ入学、卒業後は外国語専門学校国際情報ビジネス学科へ入学し、2004年卒業。日本で商社に就職したが1年半で退職し、初めて故郷ボリビアへ帰国し、スペイン語を学び直す。その後通訳として仕事をし、現在はボリビアのサンタクルス日本語普及学校の教員の傍ら、大学で心理学を勉強中。

にじいろ小学校：アメリカ・ミシガン州リボニア地区で英語と日本語のバイリンガル教育に取り組む公立学校として2014年に新設。未習得の言葉で教科を習いながら、第二言語の習得を目的とするイマージョンプログラムを英語と日本語の双方向で実施している。異なる言語や文化背景をもつ児童たちがお互いから学びあい、お互いの文化を尊重しながら、第二言語に慣れ親しむことをミッションとしている。

仁川ハンヌリ学校：韓国語の理解が十分でなく一般学校への進学及び適応が難しい帰国子女の子ども達と、多文化家庭の子ども達の生活適応支援を目的に、韓国初の小・中・高統合寄 宿型多文化学校として2013年に開校。韓国全土の学校から推薦を受けた児童生徒が、在籍校へ復帰するために一定期間在学し、基本的な教育課程に加えて、韓国語の基礎を集中的に学んでいる。中国、モンゴル、日本、ロシアのバイリンガル教師と、韓国人教師がともに、生徒一人一人の特長に合わせた多文化教育に力を注いでいる。

芦屋国際中等教育学校：日本全国初の国際中等教育学校として2003年に開校。言語環境や文化的背景の異なる子どもたちの相互啓発により、共に生きる心をはぐくみ、多文化社会に生きるにふさわしい人間形成を図ることを教育目標に掲げている。1学年の定員80名のうち、外国籍を持つ生徒30名、海外からの帰国生徒30名、一般の日本人生徒20名で現在30ヶ国の生徒が在籍。中高一貫の6年間を通じて、生徒が能力や適性に応じて弾力的に学んでいける教育活動を展開している。

【備考】

主催：ワールドキッズコミュニティ、関西母語支援研究会、アジアブリッジ、大阪大学グローバルコラボレーションセンター、関西ブラジル人コミュニティ、ひょうごラテンコミュニティ、ベトナム夢 KOBE、神戸コリア教育文化センター、たかとりコミュニティセンター

後援：兵庫県、神戸市、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、公益財団法人兵庫県国際交流協会、公益財団法人神戸

市国際協力交流センター

助成：トヨタ財団

実施・企画：「2つ以上の言葉の狭間で生きる子どもたち」実行委員会



● 医学／医療者教育研究&臨床研究ワークショップ 質的研究編 (2)

【講演者】

飯田淳子 (川崎医療福祉大学教授)

島菌洋介 (GLOCOL 講師)

【開催日・場所】

2015 年 11 月 14・15 日、ステューデント・コモンズ 2F マッチング型セミナー室 (豊中キャンパス)

【言語】

日本語

【概要】

エスノグラフィーとは、参与観察とインタビューによって主に質的データを収集し、記述・分析する手法で、近年、保健医療福祉の領域でも急速に関心が高まっている。参加者には、フィールドノート (ある現場で行った出来事に関する体験や観察の記録) やインタビューの書き起こしを持ち寄ってもらい、それらをデータとして実際に分析してみることで、エスノグラフィーのノウハウを体験的に 2 日にわたり学んだ。

※京都大学医学教育推進センター開講の「現場で働く指導医のための医学教育学プログラム—基礎編」選択授業の扱いにもした。

【備考】

主催：京都大学医学教育推進センター

共催：GLOCOL

● 地域研究コンソーシアム「学会連携企画」 日本マレーシア学会 第 24 回研究大会 国際シンポジウム「現代マレーシアの舞台芸術と文化政策」

【開催日・場所】

2015 年 12 月 13 日、立教大学新座キャンパス 8 号館 5 階 N852

【言語】

日本語

【概要】

- ・趣旨説明：舩谷鋭 (立教大学)
- ・報告 1：滝口健 (National University of Singapore)
「マレーシア演劇の『見えにくさ』をめぐる： マレーシア現代舞台芸術の状況から」
- ・報告 2：Charlene Rajendran (National Institute of Education, Singapore)

"Theatre as Action and Agency: Performing Alterity within the Politics of National Policy"

- ・報告3: Kathy Rowland (LASALLE College of the Arts, Singapore)

"Misbehaving Artists: Post-1998 Policies and Practice"

- ・報告4: 松井憲太郎 (富士見市民文化会館)

「演劇の国際共同制作: 歴史とともに創る試み」

- ・コメント: 川崎賢一 (駒澤大学)

「コメント: 文化的グローバリゼーション研究から」

- ・総合討論・質疑応答: 登壇者全員、司会: 舩谷鋭

- ・閉会挨拶: 富沢寿勇 (日本マレーシア学会会長、静岡県立大学)

【備考】

主催: 日本マレーシア学会

共催: 立教大学アジア地域研究所、地域研究コンソーシアム (JCAS)、京都大学地域研究統合情報センター、上智大学
アジア文化研究所、大阪大学グローバルコラボレーションセンター

後援: 国際交流基金アジアセンター

● 海外大学院留学説明会

【講演者】

米国大学院学生会

【開催日・場所】

2015年12月21日、ステューデント・コモンズ セミナー室1 (豊中キャンパス)

【言語】

日本語

【概要】

米国大学院学生会 (<http://gakuiyugaku.net>) は、海外大学院での学位取得を志す皆さんを支援する目的で、在米日本人留学生たちにより設立された団体である。実際に海外の大学院に留学している大学院生が、自らの体験をもとに説明会を行った。

登壇者: 本田朋也 (カリフォルニア大学サンディエゴ校生物学博士課程)

南出将志 (ペンシルベニア州立大学気象学博士課程)

勝谷郁也 (ライス大学電気コンピュータ工学博士課程)

松尾美和 (早稲田大学高等研究所准教授、ハーバード大学 都市計画専攻博士)

瀬戸山晃一 (大阪大学大学院法学研究科招聘教授、ウィスコンシン大学
マディソン校ロースクール M.L.I., LL.M., S.J.D. プログラム留学)

【備考】

主催: 米国大学院学生会

共催: GLOCOL

後援: 船井情報科学振興財団、米国大使館



● GLOCOL セミナー (137) 第 68 回日米学生会議 募集説明会

【開催日・場所】

2016 年 1 月 18 日、ステューデント・コモンズ 2F セミナー室 2 (豊中キャンパス)

【言語】

日本語

【概要】

日米学生会議は、日本と米国の学生、各 36 名が約一ヶ月にわたって共同生活を送りながら、世界の様々な問題に関して活発な議論を行うと共に、日米両国の参加者同士の相互理解を深めることを目的とする国際学生交流プログラムである。当会議は今年度 81 周年を迎え、故宮沢喜一元首相やキッシンジャー元米国務長官なども日米学生会議出身者であり、極めてレベルが高く歴史ある学生会議との評価を受けている。この日米学生会議をより深く知ってもらう為、説明会を開催した。

【備考】

協力：GLOCOL



● 公開シンポジウム 裁判員裁判時代の法廷通訳人

【開催日・場所】

2016 年 2 月 18 日、東京都江戸東京博物館 1 階会議室 (東京都墨田区横網 1-4-1)

【言語】

日本語

【概要】

司法制度改革の一環として、裁判員制度が施行されてから 7 年近くになり、一般市民が裁判員として刑事裁判に参加することも定着してきた。そこでは、日本語を十分に解さない外国人が被告人や証人として法廷に臨んでいる。審理の進行には、日本語と外国語の間で、通訳・翻訳を行う法廷通訳人の存在が欠かせないのに、その役割については認識されているものの、法廷通訳人が背負う重責に伴う悩みは「声なき声」として、なかなか表には出てきていない。

津田守氏 (名古屋外国語大学教授・大阪大学名誉教授) をはじめとする研究チームは、過去 7 年間にわたって法廷通訳人を対象に調査を行い、その成果をまとめた『裁判員裁判時代の法廷通訳人』(大阪大学出版会) が 2016 年 2 月に刊行される予定である。このシンポジウムでは、法廷通訳人の就労環境の改善と負担軽減に向けた議論を深めることを目的とし、本書の執筆者が各研究成果について報告した。

※科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究「司法通訳人の負担軽減のための学際的研究 ― 就労環境整備と日本語運用技術の改善」(研究代表者: 静岡県立大学准教授 水野かほる/課題番号 24653121) を利用して開催した。

プログラム

第 1 部: 法廷通訳人の声 (上記書籍の執筆者による報告)

第 2 部: オープンディスカッション

【備考】

主催: 静岡県立大学法廷通訳研究会

共催: GLOCOL

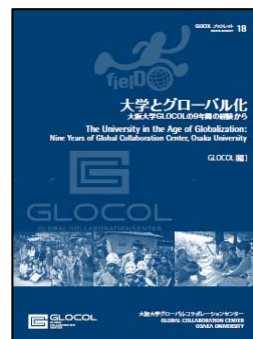
静岡県立大学大学院国際関係学研究科附属グローバル・スタディーズ研究センター
名古屋外国語大学ワールドリベラルアーツセンター



VII. 出版、情報発信

● GLOCOL ブックレット 18

GLOCOL (編) 『大学とグローバル化
— 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の経験から』
2016 年 3 月 15 日発行



● 年報 2014

● GLOCOL リーフレット

● FIELDO リーフレット



● GLOCOL 海外体験型教育プログラム リーフレット Go to FIELDO

● GLOCOL 教育プログラム 2015 Imagine the Global



● Website

GLOCOL の独自のウェブサイト運営している。セミナーやシンポジウムなどの広報だけでなく、終了後の報告などもサイトに掲載し、FIELDO で募集・開催している海外フィールドスタディや海外インターンシップなどの情報と帰国後の報告書や、GLOCOL が担当する授業の科目一覧やシラバスなどの資料も掲載した。グローバルな活動を志す阪大生へむけた情報提供ページとして、GLOCOL が企画・主催する海外インターンシップやフィールドスタディ、セミナー等に関する情報に加えて、学外の機関・団体が実施するインターンシップやフィールドスタディ/スタディツアー、海外の大学の夏季・冬季短期プログラムに関する情報を掲載するメンバーサイトを活用して情報を発信した。

これらの情報も GLOCOL が年限終了のため、ウェブサイトも閉じることになるので、海外フィールドスタディや海外インターンシップの報告書ならびに、セミナーやシンポジウムなどの情報は報告書としてまとめ、大阪大学リポジトリに登録した。今まで GLOCOL が刊行したブックレットや年報も登録している。

オンラインペーパーのサイトを立ち上げて、Health Environment のオンラインジャーナルを公開しているが、このサーバーは教員がレンタルしているため、引き続き閲覧できる。

Electric Journal Health Environment : <http://www.healthenvironment-journal.net/>



● 議事要旨公開

大阪大学第一期中期計画の「178）部局運営の透明性を保つため、教授会、各種委員会等における審議の議事録を作成し公表する」にもとづき、GLOCOLにおいてもセンター会議議事要旨を GLOCOL ホームページ上に公開した。

VIII. 資料

1. セミナー、シンポジウム等開催一覧



2015 年 4 月 7 日

GLOCOL セミナー (123) 「Public Health Transition in Modernizing SE Asia: Lessons from the Malaysian Experience」

於：理工学図書館 2 階会議室（吹田キャンパス）（詳細は p.41） 参加者：15 名



2015 年 5 月 11 日

国際公共政策研究科「特殊講義（国連政策エキスパート・キャリア形成論）」一般公開講座/ FIELDO グローバル・エキスパート連続講座（25）「国連職員の人生計画・ユニセフの問題解決」

於：基礎工学国際棟セミナー室（豊中キャンパス）（詳細は pp.15-16） 参加者：73 名



2015 年 5 月 21 日

ジェトロ・アジア経済研究所・大阪大学共同セミナー
「障害と開発」

於：人間科学研究科 51 講義室（吹田キャンパス）（詳細は p.87） 参加者：35 名



2015 年 5 月 22 日

セミナー・シリーズ：グローバル化時代の法と社会
「第 3 回 法整備支援とは何か」

於：豊中総合学館講義室 L4（豊中キャンパス）（詳細は p.33） 参加者：54 名



2015 年 6 月 10 日

セミナー・シリーズ 国連創設 70 周年記念特別セミナー
「国際の平和と安全維持における国連の役割」

於：OSIPP 棟 6 階会議室（豊中キャンパス）（詳細は p.78） 参加者：37 名



2015 年 6 月 22 日

FIELDO グローバル・エキスパート連続講座（26）/ 「シリーズ：適正技術 Design for life」

第 10 回 WS 「ソーシャル・ビジネスで生きていく：どうせやるなら、社会を変える仕事を」

於：国際公共政策研究科 2F 講義シアター（豊中キャンパス）（詳細は pp.16-17） 参加者：75 名



2015 年 6 月 28 日

世界難民の日シンポジウム

「世界難民の日 関西集会」

於：中之島センター10F 佐治敬三メモリアルホール（詳細は p.88） 参加者：170 名



2015年7月2日

GLOCOL セミナー (124)

「みんなでジャーナリズムする」

於：カルチエ・ミュルチラング（豊中キャンパス）（詳細は pp.33-34） 参加者：33 名



2015年7月4日

GLOCOL セミナー (125) 「人類学的な営為を行う人類学者ではない人びとを対象とした場合のエスノグラフィーのあり方」

於：STUDIO（豊中キャンパス）（詳細は p.34） 参加者：8 名



2015年7月8日

FIELD O BBL セッション (17)

「海外渡航時の健康管理について」

於：ウエストフロントセンター長室（吹田キャンパス）（詳細は p.20） 参加者：12 名



2015年7月9日

セミナー・シリーズ：グローバル化時代の法と社会「第4回 International Protection of Refugees: Global Trends of Displacement and Refugee Governance」

於：豊中総合学館講義室 L4（豊中キャンパス）（詳細は p.35） 参加者：37 名



2015年7月14日

GLOCOL セミナー (126) 「ベトナムの食の安全を守る：薬剤耐性菌モニタリングシステムの構築に向けて」

於：千里ライフサイエンスセンター6F 千里ルーム A（詳細は pp.41-42） 参加者：37 名



2015年7月16日

GLOCOL セミナー (127) / FIELD O グローバル・エキスパート連続講座 (27)

「国づくりは人づくり：グローバルヘルス分野で出来ること」

於：医学部保健学科第3講義室（吹田キャンパス）（詳細は p.17） 参加者：24 名



2015年7月23日

GLOCOL セミナー (128) / FIELD O グローバル・エキスパート連続講座 (28)

「国際刑事裁判所の重要性と可能性：国際司法におけるキャリア形成」

於：豊中総合学館5階講義室501（豊中キャンパス）（詳細は p.18） 参加者：50 名



2015年7月31日

セミナー・シリーズ：グローバル化時代の法と社会第5回

「検事の法整備支援：ラオス長期専門家としての経験から」

於：豊中総合学館5階講義室501（豊中キャンパス）（詳細は p.36） 参加者：30 名



2015年8月5日
2015年UC Berkeley 国際シンポジウム
「アメリカ合衆国、中国、日本のウェルネス・イノベーション」
 於：理学研究科 B301（豊中キャンパス）（詳細は pp.78-79） 参加者：30 名



2015年8月8-10日
公衆衛生セミナー「日本における健康の社会決定要因」
 於：最先端医療イノベーションセンター棟（8/8・9）、銀杏会館（8/10）（吹田キャンパス）
 （詳細は p.79） 参加者：120 名



2015年8月27日
バイリンガル教育を考える国際シンポジウム「2 つ以上の言葉の狭間で生きる子どもたち」
 於：兵庫県教育会館ラッセホール リリーの間（神戸市中央区中山手通4丁目10-8）
 （詳細は pp.88-90） 参加者：120 名



2015年10月5日
GLOCOL セミナー（129）/ FIELDO グローバル・エキスパート連続講座（29）
「IMF 業務紹介セミナー」
 於：豊中総合学館 501 講義室（豊中キャンパス）（詳細は p.18） 参加者：28 名



2015年10月18日
シンポジウム「ソーシャル・イノベーションが拓く未来」
 於：豊中総合学館 501 講義室（豊中キャンパス）
 （詳細は pp.79-80） 参加者：60 名



2015年10月30日-11月1日
ワークショップ 環太平洋大学協会グローバルヘルスワークショップ
 於：医学系研究科最先端医療イノベーションセンター（10/30、31）、銀杏会館（11/1）
 （吹田キャンパス）（詳細は p.80） 参加者：231 名



2015年11月6日
GLOCOL セミナー（130）/ FIELDO グローバル・エキスパート連続講座（30）
「人道危機に立ち向かう ― 現場で求められるリーダーシップとは」
 於：大学会館（豊中吹田キャンパス）（詳細は p.19） 参加者：103 名



2015年11月9日
FIELDO BBL セッション（18）
「あなたも日韓学生フォーラムに参加しませんか？― 2016 年日韓学生フォーラム説明会」
 於：STUDIO（豊中吹田キャンパス）（詳細は p.20） 参加者：4 名



2015 年 11 月 14-15 日

医学／医療者教育研究&臨床研究ワークショップ「質的研究編（2）」

於：ステューデント・コモンズ 2F マッチング型セミナー室（豊中キャンパス）

（詳細は p.90） 参加者：21 名



2015 年 11 月 19 日

GLOCOL セミナー（131） / GLOCOL 連続セミナー（1）「大学とグローバル化

— 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の経験から」「アジアの課題と大学の知」

於：コンベンションセンター1F 会議室 1（吹田キャンパス）（詳細は p.49） 参加者：29 名



2015 年 11 月 21 日

GLOCOL セミナー（132） / 連続セミナー（2）「大学とグローバル化 — 大阪大学 GLOCOL の

9 年間の経験から」「足もとの国際化と大学 — グローバル時代における社会学連携の成果と課

題」於：ステューデント・コモンズ カルチェ・ミュルチラング（豊中キャンパス）

（詳細は p.49-50） 参加者：20 名



2015 年 11 月 27 日

国際開発セミナーシリーズ「本部、地域事務所、カントリーオフィスから見た

世界保健機関（WHO）の仕事 — 国際機関で働くということ」

於：人間科学研究科 東館 404（吹田キャンパス）（詳細は p.81） 参加者：25 名



2015 年 12 月 4 日

GLOCOL セミナー（133） / 連続セミナー（3）「大学とグローバル化 — 大阪大学 GLOCOL の 9

年間の経験から」「海外体験型教育プログラムのつくりかた — GLOCOL・FIELDO の経験・教

訓を共有」於：银杏会館大会議室（吹田キャンパス）（詳細は pp.50-51） 参加者：76 名



2015 年 12 月 11 日

GLOCOL セミナー（134） / 連続セミナー（4）「大学とグローバル化 — 大阪大学 GLOCOL の 9 年

間の経験から」「グローバルに生きる！ — はじまりは GLOCOL だった」

於：ステューデント・コモンズ カルチェ・ミュルチラング（豊中キャンパス）

（詳細は p.51） 参加者：30 名



2015 年 12 月 13 日

日本マレーシア学会 第 24 回研究大会 国際シンポジウム

「現代マレーシアの舞台芸術と文化政策」

於：立教大学新座キャンパス 8 号館 5 階 N852（詳細は pp.90-91） 参加者：32 名



2015 年 12 月 17 日

FIELDO BBL セッション（19）

「海外渡航時の健康管理について」

於：STUDIO（豊中キャンパス）（詳細は p.20） 参加者：3 名



2015年12月21日
「海外大学院留学説明会」
 於：ステューデント・コモンズ セミナー室1（豊中キャンパス）
 （詳細は p.91） 参加者：30 名



2015年12月22日
GLOCOL セミナー（135）
「モンゴルから一点突破で貧困の解消に挑む12年」
 於：STUDIO（豊中キャンパス）（詳細は pp.36-37） 参加者：15 名



2016年1月12日
GLOCOL セミナー（136）「閉鎖国家・北朝鮮を取材するー接近し、証拠を示す取材」
 於：ステューデント・コモンズ セミナー室1（豊中キャンパス）
 （詳細は p.37） 参加者：50 名



2016年1月13日
CLIC Cafe「現役国際機関職員が語るー理系人材が国際機関で働くには！」
 於：産連本部C棟（e-square）3階 さいえんす工房（吹田キャンパス）
 （詳細は pp.81-82） 参加者：17 名



2016年1月18日
GLOCOL セミナー（137）「第68回日米学生会議 募集説明会」
 於：ステューデント・コモンズ2F セミナー室2（豊中キャンパス）
 （詳細は p.92） 参加者：21 名



2016年1月21日
GLOCOL セミナー（138）/ 「シリーズ：適正技術 Design for life」第13回WS
「ふるさと納税で地域を元気にしたい：地域活性化の仕掛けとこれから」
 於：豊中総合学館501講義室（豊中キャンパス）（詳細は p.82） 参加者：約26 名



2016年1月27-28日
公開シンポジウム「大学のグローバル化と学生海外渡航時のリスク管理ー学生を守る・大学を守る」
 於：東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター2F 多目的室2
 （詳細は pp.44-45） 参加者：約100 名



2016年2月18日
公開シンポジウム
「裁判員裁判時代の法廷通訳人」
 於：東京都江戸東京博物館1階会議室（詳細は p.92） 参加者：約60 名



2016年3月4日
国際シンポジウム 産学連携国際協力シンポジウム 第2回 ベトナム・ネクストメコンデルタを開く日本の技術
 於：阪大中之島センター7階702講義室（詳細は p.83） 参加者 30 名

2. 海外出張一覧

※ 出張（研修）期間、氏名、用務先・用務内容（経費）

2015 年

- 3 月 24 日～4 月 4 日、宮原 暁、ベトナム・フィリピン・科研基盤 B「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」の調査及び情報収集（科研費）
- 4 月 27 日～5 月 4 日、小峯茂嗣、バングラデシュ・科研挑戦的萌芽研究「発展途上国の農業支援ものづくりを志向したフィールド教育の実施と教育効果の分析」（研究代表者：大村悦二）の現地調査（他部局経費）
- 5 月 12 日～18 日、安藤由香里、カナダ・カナダ難民強制移住学会に参加、発表（運営費交付金）
- 5 月 22 日～28 日、本庄かおり、アメリカ・科研挑戦的萌芽研究「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」に関する意見交換及び情報収集を、「Joint NAFSA and URMIA Seminar on Risk Management」参加にて実施（科研費）
- 5 月 23 日～27 日、安藤由香里、アメリカ・科研挑戦的萌芽研究「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」に関する意見交換及び情報収集を、「Joint NAFSA and URMIA Seminar on Risk Management」参加にて実施（科研費）
- 5 月 23 日～28 日、敦賀和外、アメリカ・科研挑戦的萌芽研究「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」に関する意見交換及び情報収集を、「Joint NAFSA and URMIA Seminar on Risk Management」参加にて実施（科研費）
- 5 月 26 日～30 日、住村欣範、ベトナム・科研挑戦的萌芽研究「照葉樹林文化圏の近代化過程における食品の保存方法に関する複合的研究」の研究打合せ及び調査（科研費）
- 5 月 28 日～6 月 1 日、常田夕美子、シンガポール・"The Asian Association of World Historians Third Congress at Singapore 2015" "Migration in Global History: Peoples, Plants, Plagues, and Ports"で研究発表（他機関経費）
- 5 月 31 日～6 月 3 日、本庄かおり、韓国・ソウル大学での社会疫学セミナーに参加後、済州島での国際ソーシャルキャピタル研究会参加（科研費）
- 6 月 3 日～16 日、宮原 暁、クロアチア、スロベニア、マケドニア、ブルガリア・人口移動に関する国際会議、招待講演、現地調査、バルカン地域の国家形成に関する資料収集（運営費交付金）
- 6 月 7 日～11 日、島菌洋介、フィリピン・レイテ島での災害復興支援と学校建設に関わるコミュニティエクステンション・リサーチの試行（他機関経費）
- 6 月 14 日～16 日、住村欣範、ベトナム・国立栄養院において、SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの構築」に関する会議に出席（受託研究費）
- 6 月 19 日～25 日、島菌洋介、フィリピン・マニラでの臓器移植に関する研究調査（運営費交付金）
- 6 月 21 日～26 日、安藤由香里、オランダ・グローニンゲン大学との共同シンポジウム「ヨーロッパ及びアジアにおける人種主義と不寛容 ― 課題と政策」で報告（他機関経費）
- 6 月 25 日～30 日、住村欣範、ベトナム・科研挑戦的萌芽研究「照葉樹林文化圏の近代化過程における食品の保存方法に関する複合的研究」の研究打合せ及び調査（科研費）
- 7 月 1 日～6 日、吉富志津代、インドネシア・FIELDO 海外フィールドスタディ「コミュニティ防災？ 命を守るためのつながりを学ぶ」の実施にむけた準備（運営費交付金）
- 7 月 9 日～18 日、宮原 暁、シンガポール、タイ・人口移動に関する国際会議、招待講演、および科研基盤 B「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」の現地調査（科研費）
- 7 月 14 日～18 日、常田夕美子、タイ・IUAES の国際会議に参加、研究発表（運営費交付金）
- 7 月 14 日～19 日、島菌洋介、タイ・IUAES の国際会議に参加、研究発表（運営費交付金）
- 7 月 18 日～24 日、思沁夫、モンゴル、中国・モンゴル国オブルハンガイ県オンギ川流域における柳林保護および越冬用資料（草）の栽培に関する協力活動のため（助成金）
- 7 月 25 日～29 日、住村欣範、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリング

システムの構築」に関する研究打合せ（受託研究費）

- 7月29日～8月1日、吉富志津代、韓国・トヨタ財団助成金事業『バイリンガル環境で育つ子どもたちの言語形成を考慮した教育環境整備のためのネットワーク構築事業』において、8月に実施する国際シンポジウムに関して、連携する韓国の団体などとの最終打ち合わせのため（他機関経費）
- 7月29日～9月6日、常田夕美子、インド・科研費基盤C「現代インドの村落・都市中間地帯における親密圏の再編—移動社会を支えるケア関係」の調査及び情報収集（科研費）
- 8月1日～19日、思沁夫、モンゴル・海外フィールドスタディ「環境と地域保全」の実施および学生引率のため（私費、運営費交付金）
- 8月3日～11日、宮原 暁、フィリピン、香港・フィリピンでの会議に参加し科研課題の情報収集および学術交流協定にもとづく調査を行い、香港で科研費基盤B「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」の研究打ち合わせ（科研費、運営費交付金）
- 8月3日～7日、小峯茂嗣、韓国・日本コリア未来プロジェクト「38度線平和活動」参加学生の引率指導（他機関経費）
- 8月6日～16日、島藺洋介、フィリピン・臓器移植に関する調査（運営費交付金）
- 8月8日～15日、敦賀和外、イギリス・RENKEIがUCLで開催するワークショップに参加するため（他部局経費）
- 8月17日～22日、福田州平、アメリカ・科研挑戦的萌芽「フィラデルフィア万博に注目した米中日国際文化関係の研究」の調査（科研費）
- 8月18日～23日、吉富志津代、韓国・トヨタ財団助成金事業『バイリンガル環境で育つ子どもたちの言語形成を考慮した教育環境整備のためのネットワーク構築事業』において、韓国の団体との共催で実施する国際シンポジウムへの参加（他機関経費）
- 8月22日～27日、思沁夫、ノルウェー・オスロ世界平和研究所にて世界温暖化とトナカイ放牧についての研究打合および国際シンポジウム（カナダ）の開催準備打合せ（他機関経費）
- 8月24日～9月15日、安藤由香里、フランス・ストラスブールにある欧州評議会を拠点として、欧州共通庇護制度についての調査（助成金、私費）
- 8月30日～9月27日、思沁夫、中国、ロシア・科研基盤C「トナカイ放牧と自然保全の持続可能な関係：エヴェンキ人のローカルナレッジの再評価」の調査（科研費）
- 9月1日～10日、吉富志津代、インドネシア・海外フィールドスタディ・プログラム「コミュニティ防災？ 命を守るためのつながりを学ぶ」の実施および学生引率（運営費交付金）
- 9月2日～7日、敦賀和外、アメリカ・スティムソンセンターのプロジェクト「Japan as a peace enabler: views from the next generation」研究会参加（他機関経費）
- 9月6日～15日、小峯茂嗣、バングラデシュ・海外フィールドスタディ「開発途上国の生活環境の改善に貢献するモノづくりを提案する」の学生引率（他機関経費）
- 9月13日～17日、住村欣範、ベトナム・メコン川流域ベトナム南部における地域適合型の包括的な環境再生ソリューションモデルの形成（発展途上国の環境問題を総合的に支援するための技術統合グループの形成を目指して）に係る調査および研究（他部局経費）
- 9月15日～18日、本庄かおり、パラオ・科研基盤A「オセアニア・南アジアの労働者・低所得者における生活習慣病の実態と社会的危険因子」の調査と情報収集、研究会参加（科研費）
- 9月17日～21日、小峯茂嗣、ベトナム・早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター公認プロジェクト「Saopopo」参加学生の引率指導および協力協定締結手続き（他機関経費）
- 10月7日～12日、安藤由香里、オランダ・大阪大学・グローニンゲン大学共同シンポジウム「Go Global!!!6 国際医療シンポジウム」で報告（他部局経費）
- 10月10日～13日、住村欣範、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理におけるモニタリングシステムの開発」に係る研究打ち合わせ出席（受託研究費）
- 10月15日～23日、宮原 暁、中国、香港・科研基盤B「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」に関する研究打合せおよび研究報告（中国華僑大学）、講演（香港中文大学）、中国泉州において調査活動（科研費）

- 10月22日～31日、思沁夫、中国・H28年度以降の超域イノベーション博士課程プログラム 海外フィールド・スタディにかかる予備調査（他部局経費）
- 11月9日～13日、住村欣範、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理におけるモニタリングシステムの開発」に係るサイエンティフィックミーティングとワークショップ出席、ベトナムにおける食品安全に関する調査実施（受託研究費、奨学寄附金）
- 11月9日～26日、本庄かおり、アメリカ・科研費基盤C「性別役割分業規範の健康影響とそのメカニズムに関する社会疫学研究」の調査（科研費）
- 11月19日～28日、宮原 暁、マレーシア、イタリア・マレーシアでの会議参加、ローマで「グローバル化時代の法と社会」に関する情報収集、打合せ（運営費交付金）
- 11月21日～29日、安藤由香里、モロッコ・国際難民法裁判官会議に参加するため（運営費交付金）
- 12月9日～16日、吉富志津代、インドネシア・海外フィールドスタディで連携している現地 NGO および FM わいわいとのコミュニティ防災プログラムへの FS フォローアップ、コミュニティ防災関連副読本&DVD 制作（未来共生予算）のための打ち合わせ、専門家としてのアドバイスおよび調査（他機関経費）
- 12月6日～10日、住村欣範、ベトナム・メコン川流域ベトナム南部における地域適合型の包括的な環境再生ソリューションモデルの形成（発展途上国の環境問題を総合的に支援するための技術統合グループの形成を目指して）に係る打合せ、協議および熱帯植物由来テルペノイドの有用機能評価と生産系構築に向けた基盤研究に係る研究打ち合わせ（奨学寄附金、他部局経費）

2016 年

- 1月6日～10日、敦賀和外、フィリピン・超域イノベーション博士課程プログラム 超域アクティビティ・プラス（教員発案型）「ものづくり分野における途上国と先進国の新しい協力関係を提示する共創フィールドワーク」現地調査（他部局経費）
- 1月18日～24日、安藤由香里、オランダ・GLOCOL 海外フィールドスタディ・プログラム オランダ「国際司法・平和の現場を知る」事前調査（運営費交付金）
- 1月30日～2月1日、住村欣範、ベトナム・科研費萌芽的研究「照葉樹林文化圏の近代化過程における食品の保存方法に関する複合的研究」に関する研究会に参加（科研費）
- 2月1日～8日、吉富志津代、インドネシア・海外フィールドスタディで連携している現地 NGO および FM わいわいとのコミュニティ防災プログラムへの FS フォローアップ、コミュニティ防災関連副読本&DVD 制作（未来共生予算）のための打ち合わせ、専門家としてのアドバイスおよび調査（他機関経費）
- 2月1日～7日、安藤由香里、ミャンマー・ヤンゴン弁護士会で国際人権法の講義等（他機関経費）
- 2月13日～22日、安藤由香里、オランダ・GLOCOL 海外フィールドスタディ・プログラム オランダ「国際司法・平和の現場を知る」（運営費交付金）
- 2月13日～28日、常田夕美子、インド・科研費基盤C「現代インドの村落・都市中間地帯における親密圏の再編—移動社会を支えるケア関係」の調査及び情報収集とオディッシャー州における女性の口頭伝承の調査および資料収集（科研費）
- 2月17日～20日、小峯茂嗣、韓国・大韓民国統一部訪問。統一部による脱北者定住促進支援の内容と今後の課題についてのヒアリング（運営費交付金）
- 2月23日～3月11日、吉富志津代、スペイン・ポルトガル・かつての「送り出し国」が「受け入れ国」への変容が顕著な国であるスペインの調査（運営費交付金）
- 2月27日～3月6日、思沁夫、中国・雲南大学、普洱学院との共同研究及び拠点形成についての打合せ（運営費交付金）
- 3月9日～26日、大野光明、アメリカ・科研費若手（B）「沖縄の反基地運動と米軍黒人兵の連帯の力学—太平洋を横断するネットワークの視点から」の史料収集とインタビュー調査（カリフォルニア州におけるベトナム反戦運動に関して）（科研費）
- 3月13日～16日、敦賀和外、アメリカ・スティムソンセンターのプロジェクト「Japan as a peace enabler: views from the next generation」研究会参加（他機関経費）
- 3月27日～4月1日、住村欣範、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理におけるモニタリングシ

システムの開発」の研究会および ODA カントー大学強化支援事業の会議に出席（受託研究費、他機関経費）

3. 活動記録

2015.04.07	GLOCOL セミナー (123) 「Public Health Transition in Modernizing SE Asia: Lessons from the Malaysian Experience」
2015.04.10	Message from 阪大 OG/OB シリーズ (5) 「渡瀬淳一郎 さん」 掲載
2015.04.14	スタッフ会議 (1)
2015.04.28	センター会議 (1)
2015.04.30	海外フィールドスタディ平成 27 年度追加募集
2015.05.11	平成 27 年度海外プレ・インターンシップ助成募集
2015.05.11	国際公共政策研究科「特殊講義（国連政策エキスパート・キャリア形成論）」一般公開講座/FIELDO グローバル・エキスパート連続講座 (25)
2015.05.12	スタッフ会議 (2)
2015.05.12	GLOCOL 海外インターンシップ助成 募集説明会
2015.05.18	平成 27 年度海外インターンシップ助成募集
2015.05.18	海外フィールドスタディ報告会「東ティモールについて語り合う」
2015.05.21	ジェトロ・アジア経済研究所・大阪大学共同セミナー「障害と開発」
2015.05.22	セミナー・シリーズ「グローバル化時代の法と社会」第 3 回 法整備支援とは何か
2015.05.26	センター会議 (2)
2015.06.09	スタッフ会議 (3)
2015.06.10	国連創設 70 周年記念特別セミナー「国際の平和と安全維持における国連の役割」
2015.06.22	FIELDO グローバル・エキスパート連続講座 (26) / 「シリーズ：適正技術 Design for life」第 10 回 WS 「ソーシャル・ビジネスで生きていく：どうせやるなら、社会を変える仕事を」
2015.06.23	センター会議 (3)
2015.06.26	平成 27 年度 JICA 関西夏期インターンシップ募集
2015.06.28	世界難民の日シンポジウム「世界難民の日 関西集会 2015」
2015.06.30	高槻高等学校 GA コース・第 4 回グローバルスタディーズ特別セミナー「拡大する健康格差 ― グローバルな視点から見る」
2015.07.02	GLOCOL セミナー (124) 「みんなでジャーナリズムする」
2015.07.04	GLOCOL セミナー (125) 「人類学的な営為を行う人類学者ではない人びとを対象とした場合のエスノグラフィのあり方」
2015.07.07	FD セミナー (1) 「ハラスメントと情報セキュリティ・個人情報保護について」
2015.07.08	FIELDO BBL セッション (17) 「海外渡航時の健康管理について」
2015.07.09	グローバル化時代の法と社会 (4) 「International Protection of Refugees: Global Trends of Displacement and Refugee Governance」
2015.07.14	スタッフ会議 (4)
2015.07.14	GLOCOL セミナー (126) 「ベトナムの食の安全を守る：薬剤耐性菌モニタリングシステムの構築に向けて」
2015.07.16	GLOCOL セミナー (127) / FIELDO グローバル・エキスパート連続講座 (27) 「国づくりは人づくり：グローバルヘルス分野で出来ること」
2015.07.23	GLOCOL セミナー (128) / FIELDO グローバル・エキスパート連続講座 (28) 「国際刑事裁判所の重要性和可能性：国際司法におけるキャリア形成」
2015.07.28	センター会議 (4)

2015.07.30	FD セミナー (2)「全員参加型！ケーススタディから考える学生海外派遣時のリスク管理」 (阪大教職員対象)
2015.07.31	グローバル化時代の法と社会 (5)「検事の法整備支援：ラオス長期専門家としての経験から」
2015.08.03-09.07	GLOCOL 海外フィールドスタディ (S) タイ「生物資源と環境」派遣
2015.08.03-10.09	海外インターンシップ助成：Leibniz Centre for Agricultural Landscape Research (ZALF) (ドイツ)
2015.08.05	2015 年 UC Berkeley 国際シンポジウム「アメリカ合衆国、中国、日本のウェルネス・イノベーション」
2015.08.09-18	GLOCOL 海外フィールドスタディ (A) モンゴル「環境と地域保全」派遣
2015.08-10	公衆衛生セミナー「日本における健康の社会決定要因」
2015.08.10-10.30	海外インターンシップ助成：IAV GmbH Ingenieurgesellschaft Auto und Verkehr (ドイツ)
2015.08.18-27	海外プレ・インターンシップ助成：Indonesian Institute of Sciences, Research Center for Geotechnology (インドネシア)
2015.08.20-09.17	海外プレ・インターンシップ助成：Borderless LINK (ミャンマー)、BLJ Bangladesh Corporation (バングラデシュ) Grameen Bank (バングラデシュ)
2015.08.27	バイリンガル教育を考える国際シンポジウム「2 つ以上の言葉の狭間で生きる子どもたち」
2015.08.31-09.26	海外インターンシップ助成：Sayariy Warmi (ボリビア)
2015.09.01-10	GLOCOL 海外フィールドスタディ (A)「コミュニティ防災 — 命を守るためのつながりを学ぶ」(インドネシア)
2015.09.01-10.30	海外インターンシップ助成：Center for Molecular and Macromolecular Studies Poland Academy of Science Department of Hetero Organic Compounds (ポーランド)
2015.09.05-15	GLOCOL 海外フィールドスタディ (A)「開発途上国の生活環境の改善に貢献するモノづくりを提案する」 (バングラデシュ)
2015.09.08	スタッフ会議 (5)
2015.09.15	センター会議 (5)
2015.09.24	海外フィールドスタディ (B) 平成 27 年度募集
2015.10.01	海外プレ・インターンシップ助成 第 2 期分募集
2015.10.05	海外フィールドスタディ (B) 平成 27 年度募集
2015.10.05	GLOCOL セミナー (129) / FIELDO グローバル・エキスパート連続講座 (29)「IMF 業務紹介セミナー」
2015.10.06	GLOCOL 海外体験型教育プログラム説明会
2015.10.13	スタッフ会議 (6)
2015.10.18	シンポジウム「ソーシャル・イノベーションが拓く未来」
2015.10.27	センター会議 (6)
2015.10.30-11.01	環太平洋大学協会グローバルヘルスワークショップ
2015.11.02	海外フィールドスタディ (B) 平成 27 年度 追加募集
2015.11.06	GLOCOL セミナー (130) / FIELDO グローバル・エキスパート連続講座 (30)「人道危機に立ち向かう — 現場で求められるリーダーシップとは」
2015.11.09	FIELDO BBL セッション (18)「あなたも日韓学生フォーラムに参加しませんか？ — 2016 年日韓学生 フォーラム説明会」
2015.11.09	海外インターンシップ助成 追加募集
2015.11.10	スタッフ会議 (7)
2015.11.14-15	医学／医療者教育研究&臨床研究ワークショップ 質的研究編(2)
2015.11.19	GLOCOL セミナー (131) 連続セミナー (1)「大学とグローバル化 — 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の 経験から」「アジアの課題と大学の知」
2015.11.21	GLOCOL セミナー (132) 連続セミナー (2)「大学とグローバル化 — 大阪大学 GLOCOL の 9 年間の 経験から」「足もとの国際化と大学 — グローバル時代における社会学連携の成果と課題」
2015.11.24	センター会議 (7)

2015.11.27	国際開発セミナーシリーズ「本部、地域事務所、カントリーオフィスから見た世界保健機関（WHO）の仕事 ― 国際機関で働くということ」
2015.12.04	GLOCOL セミナー（133） 連続セミナー（3）「大学とグローバル化 ― 大阪大学 GLOCOL の9年間の経験から」「海外体験型教育プログラムのつくりかた ― GLOCOL・FIELDO の経験・教訓を共有」
2015.12.08	スタッフ会議（8）
2015.12.11	GLOCOL セミナー（134） 連続セミナー（4）「大学とグローバル化 ― 大阪大学 GLOCOL の9年間の経験から」「グローバルに生きる！ ― はじまりは GLOCOL だった」
2015.12.13	日本マレーシア学会 第24回研究大会 国際シンポジウム「現代マレーシアの舞台芸術と文化政策」
2015.12.17	FIELDO BBL セッション（19）「海外渡航時の健康管理について」
2015.12.21	「海外大学院留学説明会」
2015.12.22	センター会議（8）
2015.12.22	GLOCOL セミナー（135）「モンゴルから一点突破で貧困の解消に挑む12年」
2016.01.12	スタッフ会議（9）
2016.01.12	GLOCOL セミナー（136）「閉鎖国家・北朝鮮を取材する ― 接近し、証拠を示す取材」
2016.01.18	GLOCOL セミナー（137）「第68回日米学生会議 募集説明会」
2016.01.27-28	公開シンポジウム「大学のグローバル化と学生海外渡航時のリスク管理 ― 学生を守る・大学を守る」
2016.02.02	センター会議（9）
2016.02.09	外部評価委員会
2016.02.13-22	GLOCOL 海外フィールドスタディ（B）「国際司法・平和の現場を知る」（オランダ）
2016.02.16	FD セミナー（3）「研究の不正防止について」
2016.02.16	スタッフ会議（10）
2016.02.16	兼任教員会議
2016.02.18	公開シンポジウム「裁判員裁判時代の法廷通訳人」
2016.02.23	センター会議（10）
2016.03.04	国際シンポジウム
2016.03.08	スタッフ会議（11）
2016.03.15	センター会議（11）
2016.03.16	運営協議会（16）

年報 2015

発行日 2016 年 3 月 25 日（非売品）
編集責任者 住村欣範
編集実務 宮地薫子
編集発行 大阪大学グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-7
TEL : 06-6879-4442 FAX : 06-6879-4444
<http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/>



OSAKA UNIVERSITY



大阪大学グローバルコラボレーションセンター
GLOBAL COLLABORATION CENTER
OSAKA UNIVERSITY

<http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/>